
月　～ルナ・ドーム～

田中 遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月　　ルナ・ドーム

【Nコード】

N4483D

【作者名】

田中　遼

【あらすじ】

世界中で人が増えていた。日本の人口が10億人である。ついに人は宇宙に飛び出した。月に移民しようというのだ。それが“ルナ・ドーム”。“地球の人口を減らす”ための場所である。

ブローグ

人口は増えるばかりだ。60億人？そのころは快適だったろうな！！

今では、一つの大陸にその人数が押し込まれている。何処に行っても、人、人、人。

地球で一番イカれた種類だけが増えてしまったのだ。

わが国日本は（総人口10億人）、その中でも選りすぐりのイカれた連中が集まり、一つの結論を出した。

“地球の人口を減らす”

宇宙移民時代の幕開けだ。

政治家は秘密裏に開発した“ルナ・ドーム”の全容を国民に公表し、移民を要請した。通常ではあり得ないほどの低価格で半永久的に住居を提供する、というのだ。しかし、彼らが思ったほど、希望者が出ない。

ルナ・ドーム最初の住人は、職を失った人がほとんどだった。

総勢2億人を収容できる、月の住宅地に向かったのはたったの2千万人。

その後も政府は希望者を募った。徐々にその数は増大し、定員を超えてしまう結果となる。そこで政府は希望者を篩いにかけて、ルナドームの人口が1億8千万人以上にならないよう調整し、募集を中断した。

僕はルナドームへ向かう、最終便に、忍び込んでいた。

第一話

・・・まさか！？

何で忍び込んだんだ？そう思ったろ？

なあに、簡単な話さ。月に行ってみたかったんだ。

自己紹介しようか？僕の名前は石井 哲。年は17。高校生なんだけど、バイトのほうに熱が入ってる。コンピューターがあれば、出席日数をどうにかするなんて簡単だからさ。

本当はきちんとした手段で月に行くつもりだったんだ。家族みんなが行きたがってた。・・・親父を除いて。こう言うんだ。

「地球が一番だ」

全く嫌になる。親父自身が“ルナドーム”開発チームのメンバーなのに。

結局、頑固な親父の説得は諦めてこうして忍び込んだ。幼馴染がこの便で発つから、見送りにいくといって家を出て、ね。まあ、無事に乗れたんだが・・・

「お兄ちゃん、ホントにここ、大丈夫なの??」

一つ年下の妹がついてきてしまった。名前は未来。

「・・・設計上、ここは客席と直接つながってるから」

「真っ暗で怖いんだけど」

「だからついて来るなって言ったのに・・・」

「しょうがないじゃん、ついて行きたかったんだから。ねえ、ライトかなんかもってないの？」

僕は懐中電灯を取り出し、自分の顔を下から照らした。

「ギャー!!」「ドゴー!!」

「イテツ！何すんだ、馬鹿！」

「やめてよ!!私ホラー系に弱いんだから！」

「蹴りかますこたあねえだろ!!」

ガタ!!

何処からか音がして、僕らは口をつぐんでさっと身を寄せ合った。

しかし、何事も無く、静寂が続く。不意に笑いがこみ上げてきた。未来も同じだったらしく、二人で必死に声を出さないように笑っていた。

やはり、誰かが調べに来た。それでも笑いが止まらない。上のほうからの光が、端の方を照らし、そこから入念に調べ始めた。流石に危機感が芽生え、笑いがおさまった。今にもライトが未来の体を照らしそうになった、その時

「おい、そろそろ発射するそうだ。席に着かないと・・・」

「ん・・・おう」

ライトがパチツと音を立てて消える。僕はホッと息をついた。遠くでアナウンスが聞こえる。

“ ただいまより、乗務員がシートベルトの確認を・・・ ”

ヴヴヴ！ヴヴヴ！しばらくしてケータイが鳴った。皆席についた頃だからいいかと思い、電話に出た。画面に親父の顔が映る。

「おっす、父さん」

「え？電話？」

未来が画面を覗き込んだ。

「・・・何処にいるんだ・・・？・・・まさか！？」

「ダイジョーブダイジョーブ。ちゃんと帰ってくつから」

「・・・！何も知らないんだ・・・お前は・・・！」

「え？」

親父はちよつと躊躇うかのような間をおいた。しかし、思い切つて息を吸い込んだ。

「ルナ・ドームの本当の目的は……」バシュウ！ドゴゴゴゴゴゴゴゴ！！！！！！

轟音がとどろき、親父の言葉がさえぎられた。僕と未来はものすごい力で床に押し付けられた。

“ 発射した………！！ ”

親父がなにやら叫んでいるが、何一つ聞き取れない。音量を最大にして耳に押し付けると、これだけ聞こえた。

「お前たち………！！………生き残るんだぞ………！！」プツツ

しかし、限界だった。下からなだれ込む轟音と、上からのしかかるようなG。僕と未来の気を失わせるには、十分だった。

第二話 やられたぜ

地球

「お前たち……！生き残るんだぞ……！」

プツッ

彼は一階に下りた。

「……………」

「哲たち、何処にいました？」

彼の妻が手を拭きながらきいてきた。

「…………シャトルの中だ」

「あら、やっぱり」

「何！？知っていたのか！？」

彼女は肩をすくめた。

「あんなに行きたがってたから……あの子ならやりかねないし」

石井氏はソファに沈み込んだ。

彼の頭の中で、“健康診断”の後の“お偉いさん”の言葉が反響し

た。

“君たちは国家機密を担うことになる。君たちがその機密を漏らせば、混乱、無秩序、戦いをもたらす”

「・・・・・・帰ってきてくれますよ」

妻の笑顔が目の前にあった。

「・・・・・・そうだな・・・・・・」

彼は無理に笑って見せ、ソファから立ち上がった。そして自室に向かう。

“機密を漏らしたものは・・・・・・抹殺されるだろう。もちろん、それを知ったものも。君らの行動は監視される。24時間、ずっとだ”

どういうことか、彼にはわかっていた。体に盗聴装置や、超極小の監視カメラを植えつけられたのだ。自分の開発したものを・・・・・・彼だけが知っているやり方で破壊したが。電話をかける寸前に。

“我ながら、勘がよかったな”

彼はニヤツと笑った。

石井氏は部屋に入り、ドアを閉めた。

「誰か、いるんだろう？」

闇の中で、黒光りしているものを握っているはずだ。……この部屋のどこかで

「……さすがですね、石井さん」

正面から声がした。目の前にいるらしい。

「一つ、頼みがある。妻には全く何も知らせていないんだ……」

バス！ドサ！

階下で音がした。

「……残念ながら命令は、“この家にいるもの全員の抹殺”です」

「……この……」バシユ！

サイレンサー付きの拳銃からの弾丸が、石井氏のこめかみを貫いた。真横からの弾丸だった。

……ドサ。

彼の体が重々しい音を立てて床に転がった。

刺客は彼の正面に置かれたスピーカーを自分のポケットにしまい、

石井氏の手には拳銃を握らせた。

その仲間がその部屋に銃を投げ込む。・・・石井夫人を撃った拳銃を。そして、ガス栓をひらき、自動発火装置を　　石井氏の開発したものを仕掛け、スツと闇に溶けるように消えた。

3人目の刺客は、とうに石井宅を離れていた。石井氏のコンピューターを持ってスポーツカーを走らせている。適当な場所に止まって中身を調べる。

「・・・・おつと・・・・これだな・・・・？」

キーを2、3叩くと、一つのメールアドレスが表示された。

「さてと・・・・」

助手席のノートパソコンを開き、表示されているアドレスを打ち込む。

「完了！」

エンターキーを押すと、まず老人の顔写真が表示され、そのデータがその下に順々に表示される。

「何！？」

顔写真のすぐ下にこう書かれていた。

“ 正田 賢治 現職内閣総理大臣 ”

男は荒々しく舌打ちすると、携帯電話を取り出した。

“ プルルルル ガチャ。 どうした？ ”

「 やられたぜ。 石井がルナ・ドームと輸送シャトルのデータを送った奴、ただもんじゃない 」

“ だれか分かったのかね？ ”

「 どうやったか知らんが、あ ん た の 名前や経歴を使ってアドレスを取得している！ 」

“ 何！？ ”

「 なんて奴だ！ ご本人を探すなら 二、三日は軽くなるな 」

“ 電話とほぼ同じタイミングだったはずだ。 その相手は？ ”

「 同一人物だ！ それ以上は何も . . . 」

“ 電話の内容は！？ ”

「 あのおっさん、電話の前に盗聴器をぶち壊しやがった。 何も分かん！ 」

“ 八方塞か 一刻も早く見つけ出して始末せねば。 君も早く本部に戻ってきてくれ。 政府のコンピューターを総動員して調べ

るぞ”

電話が切れると、男は携帯を助手席に投げつけた。そして車のキーを回し、アクセルを踏み込んだ。鋭くUターンした後、彼は猛スピードで“本部”に向かった。

ふと目をあげると、空を何かが横切る。

「フン……最終便か……」

男は、なにやら不吉な笑みを浮かべ、さらにアクセルを踏み込んだ。

第三話 まだ早い

「・・・・・・・・む・・・・・・・・？」

真っ暗だ。目を閉じてるのか、開けているのか、自分でも全く分からない。目の前に手をかざしてみても、全く見えない。

“・・・・・・・・ここはどこだ？・・・・・・・・何も見えない・・・・・・・・まさか・・・・・・・・”

だんだんと焦りが生れる。まさか、まさか、目が・・・・・・・・？

その時、視界の隅で何かが光った。それと同時に記憶も戻ってくる。

“そうか、シャトルの中で・・・・・・・・”

僕は手探りで携帯を見つけ、画面を開いた。あまりのまぶしさに反射的に目を瞑ってしまった。

「・・・・・・・・お兄ちゃん？」

未来も目を覚ましたようだ。目がくらんでいて、顔が見えなかったが、声は相当不機嫌だ。

「・・・・・・・・な？ついてこない方がよかつたろ？」

「・・・・・・・・まあね」

未来はしぶしぶ同意した。

“それにしても、親父は何を言っていたんだろう?”

携帯の画面は相変わらず明るすぎたが、目を細めれば何とか見ることが出来る。

「・・・なんだあ??」

「どうしたの?」

「莫大な大きさのデータが・・・これは!??」

「え・・・?」

未来が覗き込もうとしたので、僕は画面を切った。

「ちょっと。見せてよ」

「お前には・・・まだ早いよ」

「えゝ・・・まさかアダルト!??」

「・・・まあ、そんなところ・・・って違う!!ほれ」

僕はクスクス笑いながら画面を開いてやった。

「・・・何これ・・・? シャトル?」

画面には僕らの乗っているシャトルの設計図が映し出されていた。出発前に見たような茶々な物ではなく、本当に事細かに示された

たとえば扉のパスワードとか 僕はニンマリ笑って間接を

2、3鳴らした。

「さてさて……やってみようかね……」

「ちょっと、まさか……」

「まずは明かりをつけようか」

携帯のキーを2、3押すと、いとも簡単に明かりがついた。そしてバッグからノートパソコンを取り出す。

「やっぱりパソコンは明るいところでやらんとね！」

「……またハッキング??」

「……そう……これで最後かも知れねえけど」

「え？」

僕は無言でキーを叩き続けた。

我ながら上出来だった。携帯の画面をあの一瞬でシャトルの設計図に移し変えたんだから。ルナ・ドームの設計図は、まだ、未来には早い。

シャトルの制御コンピューターの中を覗いて、今の状況を確認しながら、ちよつとした計画を立てた。大方成功しそうなんだけども・
・・・

もう一度シャトルの設計図を確認する。ついでに乗客名簿も。

「おい、未来」

「終わったの？」

「いやいや、これから始まるんだ」

「え？」

「出るぞ」

僕はノートパソコンを閉じてバッグに放り込み、立ち上がった。未来は哑然として僕を見上げている。

「せつかく忍び込んだのに!？」

「もう出発したんだ。とつくの昔に大気圏外。放り出されはしないさ。」

「まあ、そうだけど・・・」

僕はこの部屋に入ったときに壊した通風孔に、再び入った。さつき、警備員がここを見つけてたらアウトだったな・・・

「お兄ちゃん！」

「ん？」

「電気、消していこうよ」

「……どうでもいいこと気にするんだな」

電気を消すと、辺りは再び闇に包まれた。

第四話

人々は神意に逆らった

さっきの通り、照明なんざ簡単にいじれる。ボタンをちょっと押すだけだ。

客席に出るとき、僕は全ての明かりを落とした。こんな風に。

「・・・・・・・・・・3」

「・・・・・・・・・・2」

「・・・・・・・・・・1」

カタカタカタ

「・・・・・・・・・・0!!」パシユウウウ

「はい、安心して通れるな!」

「・・・カウントダウンの意味は？自分でスイッチいじってるよ
うなもんじゃん」

未来は完全に僕を馬鹿にしていた。

「・・・お前、ホントにかわいくない妹だよ」

「ホントにダサイ兄貴を持っていますから・・・オホホホ」

「オホホホ、アーオモシロイオモシロイ。で、未来」

「ん？」

「出て、右。22メートル先左折。それからさらに13メートル先の
右側の部屋だ。全速力で駆け抜けるからな、しっかりついてこい
よ」

「了解」

未来が敬礼のポーズをとった。完全な闇の中、僕は駆け出した。

未来が部屋に入ると同時に照明を回復させる。未来はある機械を使

い、非常用のアナウンスを流させる。

“ただいまの停電はコンピュータの信号ミスでございます……すでに修復いたしましたので、ご安心ください……”

仕事を終わらせてから、未来が口を尖らせた。

「人使い荒いんだから、全く……」

「ご苦労、ご苦労！」

僕はここで初めてこの部屋の住人に目をやった。

「おっす、アオ」

僕らを唾然としてみていた3人の一人が激しく反応した。

「……哲！？何であんたが！？」

彼女の名前は日向葵。ヒュウガ アオイ 言い訳に使わしてもらった、幼馴染。冷静に彼女の顔を見るとかなりの美形で、スタイルもなかなか……

親父は、僕が月に行きたいって言ったのは葵がいるからじゃないかと本気で疑っていた。

まあ、少しはそうかな？

「諸事情つてやつ？・・・そんなことより、今日は葵じゃなくて日向さんに質問がありまして」

「私に？」

葵の隣の人のよさそうなおっさんが驚いた顔で僕を見た。何度かあったことはあるけど、話すのは初めてだと思う。

彼、日向 政史^{マサシ}は葵の父であり、親父の親友であり、元、国会議員であり、現・ルナドームのトップだ。

「P・P^{ピーピー}って、ご存知ですか？」

「P・P？それは何かの略かね？」

「・・・そうです。ご存じないんですか？」

「・・・全く知らんよ。・・・P・P？People tem
pted Providenceとか？」

「何ですって？」

僕が聞き返すと、彼はふつとミステリアスな笑みを浮かべた。

「People tempted Providence
人々は神意に逆らった」

「. . . . そしたらPTPになるのでは？」

「おお、確かにな」

「. . . . しかし、俺はそっちのほうがいいと思いますね
詩的で では、失礼します」

僕は立ち上がって部屋から出て行くとした。もう、用事はすんだ。
ドアノブに手をかけたとき、日向さんが鼻を鳴らした。

「ふむ、悪くないだろう？で、本当は何の略なのかね？」

僕はちよつと迷ったが、いつかは話さなければならぬこと、ドア
に向かって吐き捨てた。

「単純ですよ？“Purge Plan” 追放計画」

「それは、私のことかね？」

「さあ、ね。内容を聞きたいからいろんな人に伺ってるんですよ」

では、といって僕は部屋から出た。未来は戸惑いながらもついてき

た。

「お兄ちゃん」

「あ？」

「実は内容も知ってるでしょ」

「どうか？・・・さ、お次は機長にでも会おうかね？」

「「・・・・・・・・・・は！？」」

未来とは違う声が重なった。振り返ると葵がいた。

「哲、まだ聞いてないよ。何であんたがここにいいのか」

「さあな」

「・・・・・・・・ふん・・・・・・・・ま、いいわ」

彼女の目がギラリと光った。うん、慣れてきたけどやっぱり恐ろしい。

「・・・・・・・・何か問題でも？」

「ルナ・ドーム最初の逮捕者になりそうなだけ・・・・・・・・“密入国”」

“ハッキング”あとそれと・・・」

「まだあるのか？」

葵はニンマリ笑った。

「私が襲われたことにするとか？」

ダメだ、こいつはたちが悪い。

「・・・分かった、ついてこい。・・・未来。」

「ほいほい」

「悪いがこいつの部屋で待っててくれ」

未来はキョトンと僕を見た。

「・・・なんで？」

「お前らは一緒にいないほうがいい」

女どもはクスクス笑いあって分かれた。

全くおめでたい。

僕は二人の笑い方に妙に腹が立った。

しばらく歩くと、初めて障害らしい障害にぶち当たった。施錠された扉だ。

「哲、ホントに機長に会うつもり？」

そこで葵が再び聞いてきた。3度目だ。

「ああ」

「でも……ここでストップね。ロックかかってるよ。」

「へえ？」

ピ、ピピピ。ガシャン

「何処に？」

啞然とした表情の葵を見るのは実に面白い。

第五話

Good night

僕はさっきと同じやり方で操縦席までたどり着こうと思っていた。
・・・隣にいるのが未来なら。

「・・・葵はさ」

「え？」

「暗い中でも、まっすぐ走るくらいなら・・・」

「無理」

「即答!？」

予想通り、あっさりと斬られた。

「無理は無理。できない。・・・なんで？」

「照明落として突っ走ろうかと・・・」

「ハイ、ボツ。次の案」

そういえば、こいつがいても、得することはあんまりない・・・？

「・・・お前、ここで待ってる？」

「さて、着いたらすぐに警察に動いてもらいましょうか。何ならさらに罪ふっかけてあげようか？」

葵はにこりもしない。本当にやりかねないから危ない。

「………しょうがない。ちゃんと着いてこいよ？」

「了解。で、ルートは？」

僕は天井を指差した。

僕らは身をかがめてやっと通れるような、狭くて暗い空間を歩いていた。通気孔らしいんだが……

「最ッ低！！こんなとこ通るなんて………！」

「五月蠅い！俺だってこんなとこ通るつもりはこれっぽっちもなかったんだ！！」

いい加減いらしてきた。この野郎（？）、さっきからブービー言いすぎだ。誰のせいでこんな埃だらけの小汚い空間を通る羽目になったつか、わかってんのか？

「だいたい、アオがまっすぐ走ることすら………」

「違う！“暗い中”ってのが重要なポイントでしょうが！」

「視覚に頼ってんじゃねえよ！」

「あんたと未来ちゃんが異常なんでしょ!？」

「異常とは何だ、異常とは！」

やつのことで通気孔が終わった。僕らは格子状のふたをこじ開け、下の部屋に何も考えずに飛び降りた。

「動くな!!」

……ずっと怒鳴りあってたんだもんな。部屋に侵入した僕たちに、警備員が銃を向けてたって不思議じゃない。

「……おい、葵のせいだぞ」

「はあ?あんたが大声でごちゃごちゃと……」

「……手を上げる」

警備員は冷静沈着で、ホントに迷いなく撃ちそつだ。僕はおとなしく手を上げた。

「あのさ、アオ」

「え？」

「暗い中、“アレ”は出来る？」

「…………暗くなれば」

「喋るな！」

「…………Good night…………！」

電子音の後、電気が切れた。

ミシッ「グッ！！」ドサッ

「もしもに備えててよかったな」

すぐに電気を復旧させると、警備員は床に伸びていた。その傍らに葵がいる。

「今の、何？」

「俺の声紋とパスワードを登録してあるんだ。俺のいる部屋の電気が自動で切れるように」

葵は怪訝な顔をした。

「…………準備良すぎない？」

「なあに、葵のその護身術と同じだよ」

実際は“護身”よりも“攻撃”に使われているが。

「ねえ、ほかにも何か仕込んでんじゃないでしょうね？」

「備えあれば憂いなし。何かあつたら、何か出てくる」

「・・・・・・・・・・なんかやな予感がする・・・・・・・・」

僕も同じである。

第六話 やな奴だな

泥棒と、所持者との戦いは、いたちごっこに他ならない。

ハッカーとセキュリティの戦いも同じだ。

まず、無防備な場所から盗られ、壁が築かれる。それを乗り越えて盗る。

さらに壁を強固にする。それも乗り越える。

今度は完全に覆う。しかし、その頃には壁を通り抜ける方法が見つかってしまっている。

そこでようやく防ぐのが困難だと気付く。ようやく、ね。ここからはサイバーポリス（SP）が動く。

簡単に言えば指紋で特定するのと同じだ。それで犯人までたどり着ける。

ただ、指紋は拭けば残らない。ネット上でも、自分の指紋を消すことが出来る奴が続々登場した。

さあ、大変だ。SPはさらに知恵を絞り、今度は“誰かが触った瞬間に警報が鳴り、指紋を採取できる”セキュリティシステムを作った。

あくまでイメージだけだ。

そのセキュリティシステムが導入されてから、国家機密がハッキングされるって事はなくなった。

「俺さ、SPは面白い奴らの集まりだって思うよ」
サイバーボリス

コンピュータへの指令が完了するのを待ちながら、葵に話しかけた。鍵のかかった部屋にいる限り、何やってても安全だから。“プライバシー”がどうたらこうたら言う連中のおかげだ。

「・・・何で？あんまり仲良さそうじゃないけど？さっきの行動を見てると」

「だってさ、ハッカーと渡り合おうなんて、不可能に決まってるじゃん。それを仕事にしてるなんて、面白い奴らだよ」

「そういうけどさ、ちょっと前にコンピュータのセキュリティシステムが切り替わってから、ハッキングはなくなっただってお父さんが言ってたよ」

「壁をすり抜けられるなら、触らずにして物を盗ることが出来る・・・」

葵は首をかしげた。コンピュータが完了したことを知らせた。

「さ、行くぞ」

「・・・まさか、また上？」

「まさか、俺ももう懲り懲りだよ」

「じゃあ？」

「堂々と歩く」

「・・・は？」

通路ですれ違った乗務員がお辞儀してきた。笑顔でお辞儀を返す。何回目かで葵が口を尖らせた。

「・・・最初っからこうすればいいんじゃないの!？」

「違う。俺たちがここにいるから、あいつらは警戒してないんだ」

「・・・?」

「ここまで入るのに、何重にもなったセキュリティシステムが動いてる。それを突破するのはまず不可能」

「へえ」

「もし突破できたとしても、必ず何らかの騒ぎになっているはず」

「まあ、ねえ」

「そうなっていないってことは、このガキどもは許可を得ている相当なVIP！って考える。だから何も言ってこないんだ」

「ナルホド。でもさ、さすがに操縦席までは入れないよね？」

「さあね」

「まさか……」

何の変哲もない扉が通路の突き当たりにあった。扉は特別ではないが、そのセキュリティの複雑さと、その中の重要性は群を抜いている。

「こういうのだったら、勝機はあるぜ？」

僕にいわせれば、こんな物、ただの砂山だ。

「ホントにいい？」

まだ疑うか、この女は！

「……」

僕は親父から送られてきた設計図を見せてやった。

「へえ……この、扉のところに書かれてるのは何？」

「おお。目ざといな！……これこそが我らを部屋に招き入れる、魔法の言葉ですぞ！」

葵が僕を冷たい目で見て言った。

「……パスワード？」

「おい、雰囲気ってもんがあるだろ！」

「どうでもいいけど早く入ろうよ。外にいたってしょうがないし」

「……やな奴だな、お前」

「なんか言った？」

「気のせいだろ」

僕が扉の前に立つと、しばらくして目の高さの部分がタッチパネルに切り替わった。

「おお！」

葵が歓声を上げた。内心苦笑しつつも、パスワ……じゃなくて、“魔法の言葉”を打ち込んだ。

このシャトルでもっとも強固な守りに固められているであろう扉は、音もなく、そして、いとも簡単に開いた。

第七話

“South-Pore”・・・

このシャトル、セキュリティは欠陥だらけだということが明らかになった。操縦席に直接つながる扉が開いたというのに、パイロット達が気付いていない。

銀行だって職員用の入り口が開けば警報が鳴るのに、だ。

どうなってる？まるで・・・誰かが来ることを知って・・・

僕は頭を振って、余計な考えを追い出した。もう、機長のすぐ後ろにいるんだ。例え罫でももう遅い。

「機長」

なるべく穏やかな声で、と思っていたら、作ったような声になった。葵が変な顔をした。

二人のパイロットがはじかれたように立ち上がった。年老いたほうの　つまり機長つばいほうのパイロットは、動揺をまるで隠せていない。

「な、な、何だ、貴様らは！？」

もう一方の若い

20代後半といったところか

パイロット

トはきわめて冷静だった。

「動くな」

すでに拳銃をこちらに向けている彼の目が、微妙な光を宿している。

先ほどの警備員とは違い、明らかにこちらを消そうとしているように感じた。

葵は僕の腕にしがみついてくる。僕は、喉から何とか言葉を絞り出した。

「何もしませんよ。ただ、機長にお伺いしたいことが……」

「ここに入った時点で犯罪なのだ。両手を上げて、壁に向かって……」

僕の声に言葉をかぶせた、若いパイロットの声に負けないよう、精一杯大きな声を出した。

「P・Pについてお聞きしたいんですが！」

全ての時が止まった。ただ、計器が点滅していること以外、全てが

動きを止め、息を殺した。

パイロットは機長を睨みつけたが、機長は気付かず、囁くような声を出す。

「・・・・・・・・P・P・・・・・・・・？」

「Purge Planのことです」

機長はようやく“彼”を見た。

「斎藤君、銃を下ろしたまえ。彼とはじっくり話す必要がある」

斎藤は僕を憎々しげに見つめ、ゆっくりと銃を下ろした。すぐ傍の葵が安堵の溜息をつく。

機長は計器に向かい、何やら打ち込んだ。

“自動操縦”

モニターにそう表示されるのを確認してから、機長は僕らについてくるよう合図し、操縦席から出て行った。

彼について廊下を歩くとき、僕と葵は後ろを振り返れなかった。斎藤が、ものすごい形相で睨みつけているのが分かったから・・・

“小会議室”。そんな名前がしつくりくる部屋で、機長はコーヒーを出してくれた。そして、僕と葵の向かいに座り、切り出した。

「で、君は何処まで知っている？」

「……名前、最高級の国家機密であること、ルナ・ドームが関係してる。そのくらいですかね？」

「……あら、ホントに知らなかったの？」

「……そうだよ！」

「……君、名前は？」

「……石井 哲」

「……！」

斎藤がわずかに反応したように思えた。気のせいかもしれない。

「石井君。嘘を言ったところで何にもならん。本当は知っているの
だろう？」

「……機長サン。お名前は？」

「南 みなみ 孝 たかし だ。」

「南さん、俺、本当に知りませんよ？教えていただけませんか？い

「つたい、何をたくらんでるんですか？」

「……………ダメですよ、機長」

斎藤が横槍を入れた。

「こんなガキに国家機密を漏らす必要はありません」

カチンと来たのでやり返してしまった。

「失礼な奴だな。法律の中でしか動けない若造は引っ込んでろ」

彼は低い、囁くような調子で言った。

「法律さえも守れない、自制のないお子様はママの所に帰りな」

「ふん、腰抜けの分際で知ったような口聞くじゃねえか」

「なにい！？」

「ほら、二人ともやめなさい。斎藤、みつともないぞ」

南さんの言葉で、舌戦はとまったが、いまだに睨みあいが続いていた。

「……………石井君、すまないが、斎藤の言うとおりだ」

「え……………」

「君のような少年が知るべきことではない」

「ちょ……………」

「ここに忍び込んだことは不問にしてあげよう。おとなしく帰ってくれ」

斎藤の勝ち誇った顔より、さっきの言葉より、機長に目を逸らされたことに腹が立った。僕はいつの間にか立ち上がっていた。

「……………テメエ……………」

「待つて」

僕は腕をつかまれた。葵が何かを決心したときの、不安そうな、でも確信に満ちた笑顔を浮かべていた。

「お願いです、彼に話してやってください。南さん、いや……………」
「

葵が立ち上がった。

「サウスポ―South-pore”……………」

彼女の切り札は絶大な効果を発揮した。
トランプ

南さんは口をあんぐりあけたまま、葵をずっと見つめた。斎藤はさつきよりもさらに鋭い目をしていた。その目が僕と葵を交互に見る。

どうやら、葵をつれてきたのは間違いではなかった。

第八話 勘、かな？

葵を穴が開くほど見つめていた“South-pore”は、乾いた唇をなめて、尋ねた。

「君はいつたい……」

「私は日向葵。でも、あなたが知っている名前はこっち……
日向葵^{ひまわり}”……！」

先程のような反応の後、機長がむっとり呟いた。

「……何故、彼に？」

葵は肩をすくめる。

「……勘、かな？」

「……分かりました……」

どうやら、彼らの上下関係が変化したらしい。僕と斎藤はいまいちついていけなかったが。

「……Purge Planの全容は、ほんの一握りの人間

しか知らない。私も、本当は知るべき人間じゃない。“やむをえない犠牲”の一人のはずだからな」

「・・・・・・・・」

「石井君も知っている通り、近年の人口爆発は深刻だ。日本中で過密化が進んでいる。」

「その問題を解決するためのルナ・ドームでしょ？」

思わず口を挟んだが、彼はこちらをチラッと見ただけで、話を続けた。

「・・・・・・・・ルナドームの“選ばれた住人”は、ほとんどの者が共通点を持っている。何か分かるかね？」

「・・・・・・・・？」

斎藤は機長を、葵はテーブルをじっと見詰めている。誰も何も言わない、何か不安を抱かせる沈黙があった。

「経済的な そうだな、俗に言う 敗者たちだ」

「???当然じゃないですか? そういう人たちのほうが身軽だし、

再出発を望んでいるし、政府の提供した値段も手ごろですし」

「まあ、確かに筋が通っているが、あまりに割合が高すぎるんだ」

「え？」

「具体的なデータでは、約8割が失業者だ。」

「そんなにですか！？」

「残りの2割もほとんどが低所得者。作為的な何かを感じないか？」

「……そうですね。普通なら買占めを狙う金持ちが出てきてもおかしくないのに」

彼が頷いた。

「そう、これは仕込んだ。そうだろ？ 斎藤くん」

話を振られた斎藤は、全員をじろりと見渡してから、溜息をついた。

「……ええ。政府は、ルナドームを実験施設としか考えていない」

「実験？」

斎藤はこちらを見ようとせせず、テーブルとにらめっこしながら話し続けた。

「人類が地球から離れて生活できるのか、快適に暮らすには何が必要か、伝染病がはびこったときの対処法。それを確認するためのドームだ。最初の1億8千万人はただの、実験体さ」
モルモット

「……………モルモット……………」

「もちろん、すぐ傍で監視するために政府の人間も少しは混じっている。この便に乗っている日向ってお偉いさんも恐らくその一人だ。そうだろう?」

斎藤は葵に問いかけたが、彼女はポカンと口を開けて、彼を見ている。斎藤は戸惑った。

「……………知らなかったのか?さっきの様子だと……………」

「まあ、斎藤くん、焦ることはない」

機長がちよつと微笑んで斎藤を制した。

「え?」

「彼らはそう説明したが、それは、私たち乗務員用の説明に過ぎない」

「え!??」

「真相は、違う」

機長は同意を求めるように葵を見る。そして彼女もそれに答えて頷く。

「……………P・Pは、もっと、勝手な計画なんだ……………」

機長は、冷めたコーヒーをがぶりと飲み干した。

第九話

“地球の人口を減らすこと”

「ルナ・ドームの目的は？」

機長は新しく入れたコーヒーをすすった。

「移民施設でしょ？」

「そう！」ドン！

彼はコップを勢いよくテーブルに叩きつけて、中身のコーヒーの大半をこぼしたが、気にもしていなかった。

「その通り、“移民施設”だ！」

「え……？」

僕はどうやら何か核心に近づけたらしい。彼は興奮したまま、質問を投げかけてきた。

「なのに、おかしくないか？ 政府は“地球の人口を減らすために、ルナ・ドームを造ったという……”

僕はちよつと首を傾げた。

「だって、結果的にそうなるでしょう？」

「なら、何故“月に移民するため”ではいけないのかね？ その方がずっと分かりやすいはずだろう？」

僕はちよつと笑ってしまった。

「・・・・・・・・政治家つてのはもったいぶるのが好きですからね」

僕の冗談めかした発言を、機長はまともに返してきた。

呆れたように首を振りながら。

「そんなことではない。分からない者には分からないままで、分かる者たちには察しがつくような物にしたかったのだ」

「・・・・・・・・・・？」

葵も斎藤も何もない空間を睨んでいる。今、気がついたが、斎藤は何も知らないわけではなさそうだ。

機長はじつと僕を見ている。僕は考える振りをして、彼の言葉を待っていた。結局、静寂を破ったのは葵だった。

「・・・・・・・・いい加減、もったいぶるのをやめたら？サウスポー」

彼女の、この偉そうな発言にも驚かされたが、機長が“すみません”と頭を下げたのにはもっと驚いた。

「・・・・・・・・しかし、いきなり話しても信じられる類の話では・・・」

全く耳を貸す気のない葵は、彼の言葉をとてつもなく短く、鋭くさ

えぎった。

「早く」

「・・・・・・・・おい、葵」

僕は見るに見かねた。

「なによ？」

「どんな関係かは知らねえが、一応年上で、普通なら目上だろ？」

葵は鼻を鳴らして冷たく言った。

「政府のシャトルに忍び込んで操縦席までたどり着く奴に、そんな意見をする権利はない」

「・・・・・・・・あのねえ」

「いや、石井君、気にしないでくれ。話を戻そう」

僕はあんまりこういうのは好きじゃなかったが、そんなことより、話の続きが聞きたかった。

「・・・・・・・・お願いします」

機長は頷き、重々しく口を開く。

「ルナドームの目的は・・・・・・・・“地球の人口を減らすこと”だ」

頭がガクツと落ち、流石に敬意を失った。

「はあ？そんな分かりきったことを……………」

機長がにやりと笑って僕をなだめる。

「まあまあ、君がというような意味ではない」

「え？」

「文字通りの意味だ。“人口を減らす”」

「地球の人口を減らすために、月に移住するんでしょう？さっきも……………」

「……………移住しても、その移住先が満杯になっていくだけだ。根本的な解決になっていない」

「じゃあ？」

僕はいらいらして機長を見た。流石にもったいぶりすぎだ。

機長がゆっくりと口を開いた。

「
・
・
・
・
・
死 人
は
人
口
に
数
え
ら
れ
な
い
」

長い、沈黙があつた。

第十話

L o k i

「・・・・・・・・・嘘、ですよネ？」

彼はかぶりを振った。

「実際、ルナ・ドームほど“それ”に適した場所はない」

「・・・・・・・・・どういことですか？」

機長は指を折りながら説明した。

「情報のコントロールも簡単、余計な被害はゼロに出来る、そして、ルナドームを開発したのは政府。どんな殺人兵器も隠すことが出来るだろう」

「南機長、その情報は何処から？」

斎藤が問う。彼は葵と南を交互に見ている。

「・・・・・・・・・話してもいいですか？」

南が問う。彼は葵を見ている。葵は僕をチラッと見て頷いた。

「いいわ。きつと、何か働いてくれる」

彼はちよつと頷き、またコーヒーをすすった。

「・・・・・・・・5ヶ月ほど前の話だ・・・・・・・・」

私がこのシャトルの機長に決定した日だ。自宅で自分のパソコンを起動した。

ふと思いつき、メールをチェックした。

“・・・・・・・・?”

不思議な題のメールがあつた。

「機長へ」・・・・・・・・?誰だ?」

“南 孝様。突然、このようなメールをお送りするという無礼をお許してください。まだ、ご存知でないかもしれませんが、あなたはルナドーム行最終便シャトルの機長に選出されました。まずはおめでとうございます。

さて、これより月に飛び立たれる、南様に、ぜひ協力していただき

たいのです。出来れば、下記のアドレスをクリックして、私どもの話を聞いてくださいますか？ L o k i ”

機長はちょっと黙り込んだ。僕は我慢できずに先を促した。

「で、どうしたんですか？」

「私は躊躇った。そのメールは一週間ほど前に送られてきていた。私自身のことを、私自身が知る前に他の誰かが知っていた。それが私には恐ろしいことに思えた。……何もかも知られているような気がしたんだ」

「……わかります」

「しかし、私は、そのサイトを訪ねた」

白い背景に黒い文字が浮かんできた。

“ お待ちしておりました

少々お待ちください”

パソコンの画面が真っ白になった。

「 な！？ 」

私はマウスやキーボードを必死で操作したが、なんの反応もなかった。

「 クソ！ 」

先ほどのように文字が浮かんた。

“ ご安心を ウィルスではありません”

「 ……くそ、完全に引っ掛けられた…… 」

“ ご信用なさらないのですね？ まあ、無理もありませんが…… ”

「 え………？ 」

“ もし、私どもを信じようと思えたときは、再度先程のページにアクセスしてください”

画面が光り、瞬きする間に画面が通常に戻った。

「 ……何なんだ………？ 」

私はどうしても自分を抑えられず、再びそこに行った。

“こんなに早く信じていただけるとは思いませんでした”

「何者なんだ……？」

“……まずは私どもがつかんだ情報をお見せします”

「その時にですか？」

「ああ。そこでPurge Planの全容が書かれたファイルを受け取った」

「……それで？」

尋ねた斎藤の声のトーンが微妙にずれていた。しかし、機長は気にせず答える。

「最初は何かの冗談かとも思った……名前が名前だしね」
葵がくすりと笑った。

「わかるわ。“Loki”はないわよね……」

「“ロキ”とは？」

「北欧神話の悪神よ……世界の破滅の遠因なんだから……」

「

僕も知っていた。

確か、その神話では、“ロキ”の起こした戦争が“終末”となり、“ロキ”の息子が最高神を一瞬で飲み込んでしまうはずだ。

彼の呼び名は“ずる賢い者”。信用できないのも当然だ。

第十一話 言え

「それだけか？」

斎藤が機長に質問した。その、尋問のような口調に、部屋の空気が変わった。

「・・・・・・・・斎藤？」

「それだけかと聞いているんだ」

葵がそつと後ろに下がった。唇はきつく結ばれ、顔が白くなりつつあった。南機長はただただ啞然として自分の部下を見つめている。

「答えろ」

斎藤は冷たい目をしていた。その視線は機長に注がれている。

「・・・・・・・・お前・・・・・・・・.. いったい・・・・・・・・..」

「質問しているのはこちらだ」

斎藤の手がスムーズに懐に入り、出てきたときには、銃が握られていた。

「答えなければ、彼女を撃つ」

言葉とともに、銃が構えられた。壁に張り付き、蒼白になった葵に

向けられている。

「さっき“向日葵”だとか“サウスポー”だとか言っていたな。貴様らのコードネームだろう？」

「・・・・・・・・・・」

「組織の名前も出せばしゃべるのか？“F・F”。そうだろう？」

「な！？」

南機長が大きな声を上げた。葵はそれすら出来ずに固まっている。勝ち誇った声が響いた。

「貴様らの動きは全て把握済みだ。政府とて馬鹿ではない」

二人が動くことも出来ない中、斎藤は一人で熱くなっていた。もう、機長以外に何も見ていない。

「俺も貴様らと同じ名前がある。向日葵、サウスポー。俺は“ザイン”だ！！」

「ザイン・・・！？」

「LoKiもずいぶん間抜けだな。俺がどという奴か、確認もしないでメンバーにいれやがった」

葵が叫んだ。

「じゃあ知ってるんでしょ！？このままじゃ、皆殺されちゃうのよ！？」

彼女の顔に幾分赤みが戻ってきた。斎藤は笑った。

“皆”、じゃない。政府に取り付く寄生虫どもが消えるだけだ」

背中に氷を入れられたような気がした。

「なんてこと・・・」

彼女は後退さろうとしたが、それ以上は行けなかった。

「で、質問に答えてもらおう。それで話は終わりか？」

南機長は苦々しげに答えた。

「・・・そうだ」

「・・・嘘をつくな！」

斎藤がいきなり叫んだ。

「まだ、“L o k i”の正体を話していない！」

「いいえ。あなたが本当にザインだとしたら、あなたの知っている以上の事は……」

葵はようやく落ち着きを取り戻し、壁から離れて彼に近づいた。

斎藤は冷徹な目で一瞥し、引き金を引いた。

「葵……!!」

彼女は銃声とともに倒れた。僕が駆け寄ると、痛みで顔をゆがめていた。

「葵……?」

「……大、丈夫……肩を掠っただけ……」

「次は脳天をぶちまける。言え」

「……サウスポー……」

彼女は体を起こそうとしたが、僕がそれを止めた。“掠った”というより、挟られていた。血がどくどくと流れている。

「・・・・・・・・知らないんだ」

「・・・・・・・・なに・・・・・・・・?」

斎藤は銃を無表情で構えた。僕が葵と彼の間に入り込んだが、この距離では何の意味もないかもしれない。

機長は必死だった。

「頼む、信じてくれ!さつきまで、向日葵の正体すら知らなかったんだ・・・・・・・・!」

「貴様は?」

葵がぼそぼそと呟いた。

「・・・・・・・・L o k iの正体・・・・・・・・?そんなもの誰も知らないわよ・・・・・・・・」

斎藤はこちらをずっと睨んでいたが、諦めて銃をしまった。

「お前ら三人は監房入りだ」

斎藤は警備員を呼び寄せた。

第十二話　いろいろ、ですよ

一人の警備員が部屋に入ってきた。

「お呼びですか？」

そして、この部屋の状況に目を見張った。

後ろ手に手錠をかけられている機長。出血した肩を抑えた少女と、その傍で何も出来ずにおろおろしている少年。それに偉そうに足を組んでいる副パイロットだ。

「・・・・・・・・何事ですか？」

「こいつらを監房に連れて行け。麻薬の密輸を企てていた。今も少し“クスリ”が入ってる」

「ハ！」

警備員は僕ら三人を疑わしそうに見渡しながら敬礼した。

「おい、本庄くん」

南機長が警備員に尋ねた。

「稲垣はどうした？」

警備員は葵の傷を具合を見ながら答えた。

「それが……ちょっと前から姿が見えなくて」

葵と僕の視線が交わり、さっと離れた。

「早く連れて行け」

「……この娘の傷は治療しても？」

「良いから早くしろ！」

本庄は不快感をあらわにしながらも、僕ら三人を立たせ、連行した。

「……機長」

「何だね？」

廊下に出てしばらく歩くと、彼が話しかけてきた。

「何事ですか？」

「……何も聞くな。斎藤に従っておいたほうがいい」

「でも、一般市民の少女を撃つような男に……」

「一般市民じゃないぜ？」

僕が口を挟んだ。二人の視線を感じたので、半分おぶっている葵をあごでさした。

「ルナ・ドームのトップのご令嬢様だ」

「・・・・・・・・ちよつと・・・・・・・・その言い方はやめてよ・・・・・・・・」

その声があまりにも弱弱しかったので驚いた。

「おい、大丈夫か!？」

「なんか・・・・・・・・ちよつと・・・・・・・・ふらつく・・・・・・・・」

「医務室は!？」

「もうすぐだ」

本庄が手を貸してくれた。

「・・・・・・・・ちよつと出血が多かったみたいですが、もう、大丈夫。痛み止めを打っておきました」

医師の言葉にホッと胸をなでおろした。葵はベッドですやすや眠っている。本庄が決まり悪そうに言った。

「・・・・・・・・お二方、悪いんですが・・・・・・・・」

「分かつてる。斎藤の命令に従わねばならんのだらう?」

「・・・・・・・・はい」

僕ら二人は葵を医務室に置いたまま、監房へと“連行”された。手錠ははずされていた。

彼は僕らを閉じ込めると、申し訳なさそうに出て行った。

「……石井くん、すまない」

「はい？」

「私が無用心だった。斎藤が政府のスパイだったとは……」

「まあ、過ぎたことは忘れましょうよ」

「しかし、君をこのような状況に陥れたのは確かだし、向日葵も……」

「……葵は大丈夫。あれであいつの安全は保障された」

機長が“何を言ってるんだ？”という顔をしたのは分かったが、あえて無視した。

「あんまり、隠す意味なかったなあ」

僕はバックの中から“本”を取り出した。何処からどう見ても何の変哲もない辞書だ　開いてみるまでは。

そいつを開けば、もう一つの僕の“手足”が顔を出す。

「パソコンか？」

「ええ。身体検査があると思っていたんですが……あの警備員さん。ずいぶんとあなたを信用しているようですね」

「ああ、そうだな……」

南機長は黙りこくってしまった。自分で言うのもなんだが、キーボードの音が耳障りだった。

「なあ、君は何をやっているんだ？」

ついに機長が聞いてきた。だいたい20分ぐらいは経ったと思う。ちょうど、僕の作業が終った時だった。

「いろいろ、ですよ」

「何を考えている？脱出するつもりか？」

「……南さんは、俺がここから出るのに20分以上かかると思っているんですか？」

「私なら一時間かかっても無理だがね」

「……」カタ、カタカタ

5秒後

カチャ！

「俺には5秒で十分です」

彼は自分の視線をロックが解除された扉と僕の間を行ったり来たりさせた後、僕を探るように見つめた。

「じゃあ何をやっていた？」

「……あなたが思ってる以上に、俺は知っているんです」

僕は誰もいない廊下へ出て行った。

第十三話 宣戦布告だ……！！

地球

“ 21日、郊外の石井さん宅で火災が発生し、男性と女性の遺体が……”

アナウンサーが深刻な顔でニュースを読み上げる。誰一人テレビ画面を見ていないのだが、そこに背を向けてたたずむ一人の男が耳を傾けていた。

“ 遺体は石井夫妻のものと思われ、警察は確認を急いでいます。また、長男の哲さん、長女の未来さんの行方が分からなくなっており、何か事件に巻き込まれたものとして……”

“ チツ……”

彼は思った。

“ ガキどものおかげで“事件”になっちまった……”

彼は下に目をやった。幾人もの眼鏡の男が、コンピューター画面に向かい、もしくは怒鳴り、もしくは走り回っている。この28時間で収穫はたったの一つだ。しかも、一番初めにつかんだ一つだ。

「・・・・・・・・」

羽下 はねした けん 兼はうんざりしていた。後5秒もすれば、またあのお偉いさんがやってくる。

「羽下くん!!」

ほづら、きっかり5秒だ。

「手がかりは!?!」

健康的な体つきの ようは太ってる 男がせわしく近づいてきた。ちよつとした時間稼ぎに煙草に火をつけた。

「・・・・・・・・何度も言ってるでしょう? 正田さん」

「“手がかりが見つかったらこちらから連絡する”か? 待っていて何も言ってこないではないか!!」

「つまり・・・・・・・・?」

彼は安物の煙草で下を指した。忙しそうに走り回る、“部下”たちがそこにいた。

「君が言ってきたのはたったの一つだ!!」

正田現職総理大臣は怒りに膨れ上がらんばかりになっている。

「“メールの受取人は二人いた”。まさか、一日以上費やして得た

情報はそれだけでもいいのかな!？」

羽下は煙草をくわえたまま、髪の毛をボリボリかいた。それでふつと微笑み、肩をすくませる。

「ま、要約するとそんなとこだね。こっちも真面目に動いてるんだが……」

「君の真面目さはよく知っているつもりだがね」

正田は皮肉たつぷりに言い放つと、騒然としている階下に降りていった。

一人の青年が羽下のところに早足で近づいてきた。

「……どうした？」

「ほんの少し、前進しました!!」

「ほう!」

「二人の受取人のうち、一人の身元が……」

「石井 哲に関することならもう知っているぞ」

青年は鼻を殴られたかのようにたじろいだ。羽下の目に浮かんだ、一瞬の期待が過ぎ去った。彼はさも面倒くさそうに青年から目を逸らし、追い払うように手を振った。

「その情報はだいたい27時間前には最新だったんだがね。早く仕事に戻りたまえ」

「いえ．．．．．でも．．．．．」

「まだあるのかい？」

「もうご存知かと．．．．．」

「何の話だ！？」

青年はまたしてもたじろぎ、恐る恐る告げた。

「もう一人の．．．．．なんというか．．．．．影の形がつかめました」

「何！」

羽下は身を乗り出した。しかし、次の一言は、彼らを更なる迷路に叩き込んだだけだった。

「．．．．．“L o k i”です。あいつがもう一通を受け取りました。」

羽下は目に見えて落胆していた。

一時間後

正田に小言をいわれたとき、ついに羽下が切れた。

「ふざけんな！！あんな無能どもを使っていたら、いつまでたっても進展はねえぞ！！！」

「その責任は彼らではなく………」

「どれだけ使えねえか教えてやろうか！？俺が一時間で調べた内容を、あいつらは28時間経ってからようやく伝えてきたんだ！！！」

「その中には………」

「ああ、俺の知らなかったこともあった！だが、俺が2時間コンピユータに向かっていれば、もっと情報が集まっただはずだ！！！」

「……貴様が働かないのが悪いんだろうが！！！」

「もともとこつちにはやる気なんてないんでね！！これで失礼させていただきますよ！！！」

正田が負けを認めた。

「……働く条件は？」

「下のパソコン4台と、俺がひとりになれる空間。もちろん、太ったお偉いさんが邪魔しに來ない場所がいい」

正田が憤怒しながらも承諾しかけたとき、先程の青年が異変に気付いた。

“・・・？”

フリーズだ。思わず辺りを見回すと、同じように当惑した目をしたものと目が合った。

画面に目を戻すと、いきなり、画面が真っ黒になった。

「何!？」

あちこちで同じような声上がる。

「何だ?いきなり?」

画面に白い、四つのアルファベットが順番に浮かんだ。まるで引っこ掻き傷の様な奇怪な文字が並び始める。

“L”

「どうしたんだ!？」

“O”

「分かりません!」

“ k ”

羽下が叫ぶ。

「 奴だ！！！」

“ i ”

「 “ L o k i ” の宣戦布告だ……！！」

そこにある、すべてのコンピューターが致命傷を負った。

第十四話 勝手に、ね

シャトル

斎藤は一人で操縦席に座っていた。ちょうど、メッセージを送り終わったところだ。

“石井の息子が、このシャトルに乗っている”

このメッセージが届くのは、“L o k i”が政府のコンピュータを壊滅させた2分後だ。

本庄が斎藤にとってどうでもいい報告をしに来なかったら、地球の政府の指示が仰げたかもしれないが、もう、遅かった。

“全く……日向氏の娘の怪我がどうだったとか……別にそんなことに興味はないというのに……”

何も知らない斎藤は、“向日葵”“South-Pore”の兩人を出し抜いたことで悦に入り、にやけて座席に寄りかかった。

「……………フン……………俺の勝ちだ」

そんな独り言さえ口にした。

シャトルの個室

「うわ、独り言・・・・・・・・」

それも独り言だと気付いて、笑いがこみ上げてきた。私もあの“斎藤”とか言っやつと変わらないか。

「まあ、私は完全にひとりじゃないけどね。ねえ？議員」

耳にイヤホンをつけたまま、椅子に座ったまま動かない、中年の夫婦に笑いかける。答えはない。

「ぐっすり眠ってる・・・・・・・・まるで・・・・・・・・」

自分の一瞬考えた言葉に背筋が寒くなった。こう思った。

“・・・・・・・・死んでいるみたい”

我に返って、急いで荷物をまとめ、かばんを肩に引っ掛け、部屋を

後にした。

部屋は、真っ暗だった。自分がその中にいたと思うと、なんだか氣味が悪かった。

シャトルのさらに別の場所の廊下

「石井君!」

僕はぐると振り返りながら、人差し指を唇に当てた。

「警備員に見つかったらどうするんです!」

当たり前だろう?と、いわんばかりに彼が言った。

「……また君が何とかするだろう?」

うんざりしてきた。

声にそんな感情がたっぷりと詰まっているのが、自分でもわかった。

「・・・・・・・・今度はあなたを置いていきますけどね」

「それはそうと、石井君」

全く！ある種の才能だ。僕の感情をここまで無視できるとは・・・・・・・・

「君はいろいろ知っているかもしれない。だが、一つ教えてやらねば・・・・・・・・」

ぴんと来た。こいつは・・・・・・・・

「親父のことですか？」

機長が停止した。見事にぴたりと。普段なら笑っていたらうけど、今はそんな気分じゃなかった。

「知っているんですよ。あなたが思っている以上・・・・・・・・」

いつの間にか壁を見つめていた。頭が空っぽで、機長の声が聞こえてはいたが、聴いてはいなかった。言葉を聞き流してしまいなんていったのかさっぱり分からなかった。

「え？」

彼は僕の顔をじっと見て、繰り返した。

「……どうやって知った？」

迷ったが、設計図のことをこの人に話すのは、なんだか気が引けた。

「……知るべきことは、知りたくなくても、勝手に耳に入ってくるもんなんです」

僕は廊下を進みながらもう一度呟いた。

「勝手に、ね」

第十五話 二人のピエロです

「何を言おうとしているのかね？」

機長は、顔をしかめて僕を見た。

「・・・・・・・・良いでしょう。はっきりいますよ？」

「・・・・・・・・」

僕は廊下を早足で歩きながら続けた。

「この船の乗客の 9 割が組織のメンバーと
いうことを知っています・・・・・・・・あ、それと、南さん」

僕は付け加えた。

「ポーカーフェイスを身につけたほうが良いんじゃないですか？」

慌てふためく男を横目で見るのは、面白かったが、先のことを考えるとどうにかしてもらわないと困る。貴重な人材なのだから。

「・・・・・・・・まさか、私たちの・・・・・・・・」

「“Straw”でしょ？」

「何の話だ？」

「政府の機関があなた達の計画につけたあだ名ですよ。『藁』ってね」

「・・・・・・藁？」

「溺れるものは藁をもつかむ」

機長はそれきり黙ってしまった。

“ちよつとまずかったかな？”

「まあ、やるしかないですよ」

機長が力なく笑った。

「種の見えてるマジックを披露しろと？」

「はい」

ついつい、笑ってしまった。

「二人のピエロです」

「君も、かね？」

僕は何も言わなかったが、彼にはそれでよかったようだ。

僕たちはシャトルの集会所の扉の前に立っていた。

「・・・・・・・・前に聞いたかな？君は何者だ？」

「・・・・・・・・ごく普通の高校生です」

「・・・・・・・・最近の高校生はレジスタンスのアジトも知っているのか・・・・・・・・やれやれ・・・・・・・・」

諦めたかのように首を振った機長を促し、扉を開けさせた。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

張り詰めた空気に満ちていた。

“やれやれ・・・・・・・・ちよつと違う連中が入って来たぐらいで殺気立ちやがって・・・・・・・・”

「お二人さん、何か間違えてないか？」

僕の身長は182cm。結構高いほうだろ？そんな僕が見上げてしまふような大男だ。その上、ボデイビルでもやってるんじゃないかというほどの体つきで、人を小馬鹿にした笑みを浮かべている。

「何も間違つてないよ」

機長が完璧に冷静さを保っているには驚かされた。

「ここがどこか、君たちか何者か、しっかり分かっているつもりだ」

金属音が鳴り響き、いくつもの銃口がこちらに向けられた。

“怪しんでください”と言わんばかりだな。ブラフだったらすんだ?”

目の前の大男も銃を構えていた。銃器類に詳しくないのでよく分からないが、とてつもなくごつい銃だった。

「どついう意味かお聞かせ願おうか」

機長が両手を広げ、周りを見渡した。

「私は“South-Pore”だ」

部屋の中の者がぴたりと止まった。そして、構えられた銃がゆっくりと降りていった。

「……………待ってましたよ」

声がしたほうを振り返ると、僕ぐらいの身長で、サングラスをかけた男が立っていた。

「まさか機長がそうとは思ってませんでしたか……………」

「君は？」

「“Wildcat”です」

「え!？」

つい、声が出た。皆が僕のほうを向く。
“Wildcat”がサン
グラスを取った。

「・・・・・・・・哲!？」

第十六話

まあ、そうだな

本来、“ハッカー”というのは、褒め言葉だ。コンピューターに詳しいとか、技術があるとか、そんなような意味だ。辞書によっては“天才的”なんて表現もある。

しかし、コンピュータ・システムを破壊する側（“クラッカー”）にも、同じぐらいの、もしくはそれ以上の技術が求められた。それで、“クラッカー”“ハッカー”の様な認識が生れ、今の意味になったのだ。

今、僕の目の前でサングラスをとった、“Wildcat”……
・いや、僕のクラスメート 三浦 翔は真正銘本来の意味の“ハッカー”だ。

「なんでお前がここに!？」

「お前こそ!」

「知り合いかね？」

「……一応」

僕の個人的意見を言えば、“面倒くさい奴”だ。まあ、かなり仲が良いが。

「おいおい、“一応”とは何だ!？」

「言葉のままだ」

「・・・・・・・・それより、“Wildcat”」

機長がやんわりと会話に割り込んできた。

「君は来ないはずでは？」

翔は肩をすくめた。

「気が変わった、とでも言うておきましょうか。あれ？“向日葵”は一緒じゃないんですか？」

僕と機長がピクリと動いた。

「・・・・・・・・気が変わった・・・・・・・・？」

機長はこう聞いたが、僕は違う言葉に反応していた。が、表に出ないように努力した。

「ええ。それ以上は話せません」

翔は“ハッカー”であり“クラッカー”になりえる技術を持っている。だが、そうはならない。

彼が僕をまともに見た。

「おい、哲。お前、ルナ・ドームには来ないはずじゃ？」

「えっと……まあ、そうだな」

「……忍び込んだのか!？」

「えっと……まあ、そうだな」

「違法行為だぞ!! だから最近の……」

翔のお説教が始まった。

彼が“クラッカー”にならない理由だ。糞真面目で、無駄に正義感が強く、法こそ正義だと思っている。

「……が問題で……おい、聴いているのか!？」

「……いや、全く。お前、そんな話をするためにここに居るんじゃないだろう?」

翔がムツとした顔をしたが、何もいわなかった。機長が再び言った。

「すまないが、少し信じがたいな。あそこまで消極的だった君が・
・・・・」

「・・・・・だから気が変わったんです」

「フン」

鼻で笑ってしまった。

「どーせ向日葵を追ってきたんだろ」

「な!？」

どいつもこいつも、ポーカrfフェイス出来なさすぎだ。

「やっぱり、か。そうだよなあ? 葵、かわいいしなあ・・・・・」

翔が真っ赤になった。

「だ、黙れ!!」

周りの奴らが呟いた。

「葵・・・・・・・・・・？」

一瞬赤くなつた翔の顔がスツと青ざめた。

かかった。

「・・・・・・・・・・知ってたな？ “向日葵” の正体」

「・・・・・・・・・・」

「お前、最初に聞いたな？ “向日葵は？” って。そんでもって今の反応でほぼ確定だ」

集会所は静まり返っていた。時々何人かが吸っている煙草の煙が上がるだけだ。

「・・・・・・・・負けたよ。そうさ、俺は向日葵の正体を知って、あいっただけでも助けるためにシャトルに乗ったんだ」

「……………“助ける”だと？」

さっきの大男が怪訝そうに尋ねた。翔が鋭く振り返った。

「ああ、そうさ！こんなばかげた作戦から、助けにな！」

「……………」

「あんたらみたいな筋肉馬鹿は知らないかもしれないけど、この作戦は全て政府に漏れている。あだ名も教えてやろうか！？」

「“Straw” だろ、翔」

彼はまたこっちを振り向いた。

「知っていたのか！？」

「おいおい、なめんなよ。技術はお前にだって負けねえんだ。このくらいは知ってるさ」

大男が考え深げに呟いた。

「……………“藁”か……………」

翔が冷笑した。

「アレ？意外と頭の回転速いな」

流石に男の目つきが悪くなった。それで僕が翔を一発平手で殴って言った。

「・・・・・・・・おい、あんま挑発すんな。それより、なんで葵のことを知ったんだ？」

「いつてえな！！・・・・・・・・“L o k i”に聞いた」

周りがざわめき、機長が考え込んだ。

謎は深まる。

第十七話

決心はついたかい？

地球

「おい！そっちはなんか反応あったか！？」

「ダメです！！何にも反応がない！！！」

「クソ！！！」

騒然としたコンピュータールームを見下ろし、羽下は溜息をついた。

“ムダムダ。お前らには手におえない代物だよ”

「決心はついたかい？」

「………君のような 犯罪者 に全てを託すのは……」

「まだ逮捕はされてないぜ？」

「証拠がないだけだろう」

羽下は肩をすくめ、そこから出て行こうとした。その腕を正田ががしりと掴んだ。

「分かった、頼む！」

彼は正田を睨みつけ、忌々しそうに舌打ちした。そしてその手を振り解き、一歩後ろに下がった。

「ちょっと前に言った条件・・・・・・・・・・」

「分かってる、パソコン4台に個室、だな？」

「もう一つ!」

たつぷりと間をおいて羽下が告げた。

「俺を監視したり、指図したりしたら・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・どうなるんだ？」

「・・・・・・・・・・さあな？」

羽下がにやりと笑った。正田は内面の恐怖を巧みに隠し、鼻で笑って溜息をついた。そして傍の職員を呼び寄せた。

「おい、あそこのコンピュータを・・・・・・・・・・」

しかし、羽下が笑いながらさえぎった。

「正田さん、冗談はやめてくださいよ」

「何？」

「あそこのが使い物になるわけないでしょ」

「・・・・・・・・・・」

「多少旧式でも構いませんから、今、完璧にネットワークから遮断されているものを」

正田が職員に問う。

「そんなものあるのかね？」

「倉庫に転がっているものでよろしければ・・・・・・・・」

「よし、確認してみよう」

職員と羽下が部屋から飛び出すと、入れ替わるように一人の男が入ってきた。正田が溜息交じりに聞いた。

「・・・・・・・・“L o k i”とは、何者なんだね？」

「・・・・・・・・“P h a n t o m”と呼ぶ奴もいます。ま、警察が安直につけたあだ名ですけど」

「ファントム？“L o k i”というのは？」

「それは彼自身が名乗ったんです。システムを盗み見たら、そのコンピュータのデスクトップに“L o k i”と大きく書く。ウィルスを送ったら、それが“L o k i”と告げるように設定しておく。等等・・・・・・・・」

「なんというか・・・・・・・・」

「ガキっぽいでしょう？でも、尻尾はつかめませんよ」

「君には分かっているんじゃないかね？」

彼は肩をすくめた。

「確かに、昔、探したことがありますよ。警察官の立場を使ってね」

「で？」

「性別すら分かりませんでした」

正田がそばの椅子にドカリと腰を下ろした。

「いったい何者なんだ？」

「………大臣、ご存知ですか？」

「何を？」

「あいつの被害にあった企業などは洗ってみると必ず何か出てくるんですよ」

正田は目を手で押さえた。

「………洗えば何かしら出てくるさ、この世の中」

「そりゃ、そうですね、洗う糸口は必要ですよ」

「で？その糸口を“L o k i”が提供してくれる、というわけか」

「ええ、有り難いことにね」

「ここでも、そうなるのかな?」

男は挑戦的に笑った。

「さあ、どうでしょうか……」

第十八話

まあ、落ち着けよ

「ところで正田さん」

男が怪訝そうに入り口を見た。

「先ほど出て行った奴、どこかで見たような気がするんですが・・・」

「羽下君のことかね？」

彼は飛び上がった。

「羽下あ！？羽下 兼ですか！？」

男のものすごい剣幕に気圧されて、正田はたじたと下がった。

「あ、ああ。・・・まさか・・・」

「あのハッカー野郎が何でここに！？」

「・・・ある人物を追っているね。彼の力が・・・」

「どうせなら“L o k i”の力を借りればよかったのにね！あいつが一流だしたら羽下は三流以下ですよ」

「・・・結果的に、その“L o k i”を追っているのだが・・・」

男は吹き出した。

「あの“ありえないもの幽霊の影”を羽下が！？ハッハッハ！！」

彼の笑いはちよつと不機嫌な声でさえぎられた。

「おい、筒井警部補。俺が三流以下なら、あんたはもつと下だろ？」

羽下が戸口に寄りかかって“筒井警部補”を睨みつけていた。筒井は鼻で笑った。

「俺は“捜査する側”だ。別にハッキングの腕はいらない」

「フン、昔はあんたも……………」

筒井は右の握りこぶしをそつと持ち上げた。

「言つな。今じゃ俺は堅気だ」

「雑魚が堅気になっていくんだな」

羽下はその拳をポンと殴った。

「……………一概には言えんがね」

筒井はそつと呟いた。何も聞こえなかった正田は筒井に聞いた。

「で、筒井くん、羽下を捕まえるのかね？」

「こいつを捕まえると、私も仕事を追われてしまいます」

羽下がにやりと笑った。先程のいやらしい笑いではなく、仲間同士で悪巧みをしてるかのような笑いだった。

「……そうか」

「おい、それより、筒井。お前、パソコン持ってないか？」

「パソコン？何でまた？」

「このパソコン、ネットワークに接続されたのは“L o k i”に壊されて、無事だったのは20年前の代物で、どうにもならん」

「お前のは？」

「こんな信用できない連中に囲まれた中に持ってこれるか！」

正田の顔に血が上り、筒井は快活に笑った。

「確かに」

「筒井くん！？」

「まあ、落ち着けよ、大臣様」

「安月給なんだから、壊すなよ？」

「大丈夫、政府が保証してくれっから」

正田は深く息を吐き、その部屋から出て行った。

「沈黙は了承のサイン、ですね？」

「……いいだろう」

彼は部屋の外の、誰もいない通路で呟いた。

「どうせ生き残れはしないのだから……」

そして携帯電話を取り出した。

“トゥルルルル……ハイ”

「どうだ？」

“45分でドームに着陸します。順調ですよ”

「よし」

“全て……予想通り……”

正田には確信があった。

第十九話 幸運だったな

シャトル

「L o k i」に聞いた、か・・・・・・・・」

大男があごをさすりながら呟いた。翔はその口調に含まれた疑わしさを敏感に感じ取り、彼をにらみつけた。機長は翔をなだめるような身振りをしながら尋ねた。

「どういう風に教えてきたのかね？」

「・・・・・・・・ただ一言、“向日葵は日向葵だ”って・・・・・・・・」

「

周りを取り巻く連中の一人が笑った。

「ハン！お前、それを信じたのか？」

「L o k i」の言葉を信じたから、あんたらはここにいるんだろ？」

笑った男はちよつと身をすくめた。目の前の大男が今度は腕組をして翔を見下げた。

「そついつお前は？」

「・・・・・・・・・・？」

「“L o k i”を信じてい・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あ、そついうことか」

翔はかすかに呟いただけだったが、男はぴたつと口を閉じた。

「“S t r a w”のことだろ？あれは、“L o k i”の考えじゃない。知らなかったのか？」

ざわめいた部屋の真ん中で、機長が拳をぎゅっと握り締めたのが見えた。

翔の言葉は続く。

「親愛なる“S o u t h - P o r e”のお考えなのさ」

「手の内は政府にばれ、向こうは準備万端整っている」

「しかも、政府への“情報提供者”は彼の部下・・・・・・・・・・」

少しずつ、みんなの目が一点に集まっていた。その“一点”の男はまっすぐ前を向き、その視線を受け止めた。

「おい、おっさん・・・・・・・・ホントか？」

この静まり返った部屋で、機長のすぐ傍に立っている僕が、彼らの視線を集めるのは至極簡単だった。

パチン！

指を鳴らせばよかったのだ。音と同時に皆僕のほうを見た。

「おい、翔。ちょっとそれは、お前にとって“困ったこと”を隠してるようだぜ？」

「何？」

響きと強さは100点満点だ。“自分は何を言われているのか分からない”。そういつているように聞こえる。でも、目はこう言っている。

“お前、正気か！？”

僕は構わず続けた。

「……ここに居る方々、“ルナ・ドーム”が何のための施設か、ご存知ですか？」

男たちが互いに言い合った。

「実験施設だろ？」

「人体実験をやるうなんて、一線を越えてるよ」

黙っている何人かは知っているようだ。じとつとした視線を送ってくる。

「……………それすらも、真実ではありません……………」

僕が話し終えたとき、部屋は静まっていた。

「……………だから、計画が無茶だろうと、やるしかないんです」

翔は僕を睨みつけた。

「……………嚴重警戒の中、“L o k i”の力も借りず、ルナ・ドームのコンピュータを乗っ取るってか？」

「プラス、先にドームに住み着いた人の救出」

「……………正気か？ヒーロー願望にとりつかれてないか？」

「大丈夫だ」

機長の確信に満ちた声がした。

「私の考えでは、“L o k i”はここに居る」

皆がざわめき、お互いの表情を窺った。

「……………何故ですか？」

「“L o k i”がこの計画を知らぬはずも、黙ってみているはずもない。それに……………」

彼は翔をあごで指した。

「いざとなれば、彼がいる」

「^{ラッキー}幸運だったな、来ていない筈の“Wildcat”が来てくれて
いるんだから……」

機長は満足そうに頷いた。

第二十話 乗りかかった船だ

アナウンスが響いた。

“まもなく、ルナ・ドームに到着します。念のため、座席に戻り、シートベルトを着用してください”

「・・・・・・・・石井君、何処に・・・・・・・・」

「その必要はありません。ここに残っていても大丈夫」

翔にも目で合図して残らせた。

皆がざわめき、自分の座席もどろろと部屋から出て行った。残ったのは、機長と、僕と翔。それに、部屋の隅の“誰か”だけだった。

もつとも、僕にはそれが誰なのか分かっていたが。

「おい、さっさと顔を見せろ。さっきのアナウンス、俺はだませねえぞ」

「そんなに怒んなくてもいいじゃん」

暗がりから出てきた顔を見て、翔が仰天した。

「未来ちゃん!?!」

未来は翔にウィンクした。

「“ちゃん”は余計だけどね、愛の勇者さん」

「“愛の勇者”？」

翔の目が“???”という感じだったので、教えてやった。

「こいつがここにいるって事は、俺の体のどこかに発信機をつけたって事。発信機をつけたって事は当然、“おまけ”も、な！」

「あら、何のことかしら？」

この糞ガキが拳の届かない範囲ギリギリにいるのに腹が立つ。

「おまけって？」

「盗聴器」

「・・・・・・・・ナルホド」

「しかも、だ。こいつは人を、なんつうか・・・・・・・・ミツバチ扱いしてんだ！」

「・・・・・・・・ミツバチ？」

「人の体に“花粉”をつけてばら撒くんだ」

「まあ、そこまで分かってんなら」

未来がさつと近寄ってきた。

「私が全部知っちゃったことも……」

「分かってるから怒ってんだよ！」

「そう。で、何で私に隠したの？」

「……まだ、早いと……」

「何言ってるのよ！両親が死んだのよ！？真っ先に知らせるべきでしょ！？」

「……そうだな」

適当に受け答えしながら、さっきまでの会話を順番に思い出していた。

「それに、ルナ・ドームの……」

「……ああ……」

ギャンギャンわめく妹を横目で見ながら、冷静に考えてみた。

“ やっぱり、そうだ…… ”

妹に一つの疑惑が芽生えた。

ふと気付くと、翔が未来をなだめていた。未来がいつの間にか泣いていた。その涙を見て、“会話を聞いただけでは、両親が死んだとは分からない”ことを指摘する気はなくなった。

「…………お兄ちゃんは…………泣きもしないの…………
・？」

「…………親父は……………」

僕はまたしても途中で気が変わった。この言葉は未来に言うべきじゃない。

「……………なによ？」

「……………きつと覚悟の上だったんだ」

「……………」

そう、こんなこと言うべきじゃない。

“自分で死を招いたんだ”

なんて……………

「……………南さん、^{ストーリー}計画に僕らに参加させてくださいますよね？」

「……………ああ」

「……………翔、お前も参加するんだろ？」

「……………乗りかかった船だ」

「……………私もよ」

「……………よし、このメンバーなら、何とかなるかもしれない
ん」

「どうするんだ？」

「当初の計画では、メンバーが本部を襲い、コンピュータシステムを乗っ取る、もしくは完全に破壊して時間を稼ぎ、他の幾人かが先発隊の人たちを救出、ドームにあるシャトルで地球に帰還。ツてとこですよね？」

南さんが苦笑交じりに答えた。

「幾分、批判的感情が混ざっているかもしれないが、まあ、そんなところだ」

「……………敵は、全てを知っている。つまり、この動きに対する準備は整っているわけです」

「・・・・・・・・そうか！」

僕が新しい計画を話している間に、微かな振動を起こしながら、シャトルがドームに到着した。

第二十一話 足掻くんだよ

ルナ・ドーム内

「……………最終便、到着しました」

司令官はにやりと笑った。

「情報によると、奴らは本部に“奇襲”を仕掛けてくるらしい」

「畏の中に、ですね？」。

「そうだ。どうせなら、徹底的に叩く。しっかりと内部まで侵攻させるんだ」

敬礼し合い、彼らはそれぞれの持ち場に戻った。

「情報は武器になるんだ。反乱分子どもめ……………！」

彼らにとって、これは“戦争”ではない。始める前に、勝利を手に行っているのだから。

シャトルの集会所

「連絡は行き渡りましたかね？」

「うむ。しかし、何故“作戦中止”ではなく、“作戦変更、指示を待て”と送ったのかね？」

南以外は“そんなこともわからねえのか！？”と心の中で叫んだ。
一番耐えたのは僕みたいだ。

「……………そう言えば、過激な馬鹿が勝手に動いて死ぬなんてことも起こらないからですよ」

集会所のドアをノックする音が響いた。扉のところにいた男がにやりと笑った。さっき、“知っている者”の目をしていた一人だ。

「その、過激な馬鹿が参上しましたよ？」

「……………へえ……………？」

「俺は羽下 隼^{ジュン}。あんたらのお手伝いをしようと思っ
てね」

僕は彼を疑わずにいらなかった。

「……………あんなの、当初の計画は？」

おかしいことに、僕のこの発言は、その場にいる全員の視線を集めることになった。

「……………なんだよ？」

未来が呆れたように言った。

「……………いやあ、突っ込んだ発言をするなあ、と思って」

「だってさ、明らかにこの人“ドーム”の目的を最初っから知ってたし、いきなり“お手伝い”とくるし、絶対なんかあるだろ。それに……………」

「それに？」

とっておきの情報だ。まだ隠しておいたほうが良い。

「俺の勘がこいつは危ないって言ってる」

未来が鼻を鳴らした。

「……………何だよ？」

「別に」

羽下は、僕が隠すことにした“とっておき”に勘付いた様だ。僕を疑わしさと警戒の入り混じった目で見ている。

「……………何を知っている？」

「兄貴のこと、だ」

彼は目をスッと逸らした。

「・・・・・・・・あいつとは関係ねえ」

「ホウ！」

「俺は興味があるだけだ。ヒーロー気取った輩がどう戦うのか」

「・・・・・・・・戦うんじゃない」

翔が不機嫌に言った。

「足掻くんだよ」

僕はニヤリとした。笑っていないきややってられなかった。

「で、羽下君は計画に・・・・・・・・？」

「参加してもらいましょうかね」

未来と翔の肩がカクツと下がった。

「・・・・・・・・お兄ちゃん、氣い變わんの早くない？」

「・・・・・・・・さっきまでの警戒モードは何処に??」

「馬鹿、あれは“信用するかどうか”の問題で、“参加させるかどうか”はまた別の話だ」

「はあ！？信用してなくても参加させるの!？」

「お前がそうだぞ、未来」

「程度が違つてしょ!？」

「おう、お前のほうが信用ならねえ」

「・・・・・・・・・・」

未来はこっちをギロリと睨み、黙った。僕は構わないことにした。

「さて、じゃあ、計画を説明しようか」

「・・・・・・・・・・いいのか？」

「何が？」

「俺を信用してないんだろ？」

「たいした問題じゃない」

「・・・・・・・・・・？」

「ここにいる全員が、何かしら隠してやがるからな」

隼以外、誰一人僕と目をあわせようとしなかった。

第二十二話 そんな暇はないよ

「さて、と。分かった？」

「ああ。信用してない奴でも連れてく意味が分かった」

「ん？」

未来がふつと溜息をついた。

「もしばれたら、揃ってお陀仏ってわけだし」

翔がぱちんと指を鳴らした。

「もう一つある。裏切れる危険を顧みてる余裕がないんだよ」

「と、言うわけだ。怪我人だからって、寝ていられるとは思わないことだ」

怪訝な顔をしたのは隼だけだった。あとは“ハイハイ分かりましたよ”とでも言ってるような顔をしていた。

扉のほうから声がした。

「気付いてんなら、お見舞いの言葉をかけてくれても良いんじゃないかい？」

「悪いけど、そろそろ“始まる”時間だ。そんな暇はないよ」

そこには葵が立っていた。腕を組んで壁に寄りかかっている。そして左耳のイヤホンからコードが延びていた。

「全く、どいつもこいつも盗聴しやがって、プライバシーも糞もないな」

「でもさ、お兄ちゃんそれ分かっててくっつけたままにしてたんでしょ？」

「結構便利だぜ？こういうやつを持ってる」と

僕は胸ポケットのある機械のボタンを押した。

「ウワァー！！！！！！」

葵がすごい声を出してイヤホンをはずした。

「この馬鹿！！！！！！」

僕と未来は大笑いしていたが、残りは“わけが分からない”と僕らを見ていた。

「・・・・・・・・・・おい、何やったんだ？」

「親父が作った、盗聴器を破壊する装置があつてな、それは簡単に言うと、盗聴器に許容以上の電流を流して、ショートさせるってモンなんだけど、それは中にある制御システムに間違つた命令を下させてるんだ」

「・・・・・・・・・・」

「まあ、とにかく、それを改良すると、相手が聞こえるものをコントロールできるってわけだ。不快な音を聞かしたり、話してる内容とは別物の言葉を伝えたり、音量を馬鹿みたいに上げるとかな」

葵は左耳をさすり、険悪な顔で僕を睨みつけていた。

「いつか、クロス」

「まあ、せいぜい頑張れよ」

「・・・・・・・・・・」

沈黙を破ったのは、自分のコンピュータの画面を見ていた翔だった。

「哲、動き出した」

「場所は？」

「操縦席から出口に向かっている。5分もすりゃ出るな」

画面では、シャトルの図面の上を丸い点が動いていた。

「誰と一緒にだ？」

「待て待て・・・・・・・・・・」

彼がキーボードを叩くと、画面に映像が映し出された。

「・・・・・・・・誰か分かるか？」

「・・・・・・・・日向さん」

「え!？」

画面の中で、斎藤と一緒に歩いているのは、紛れもなく葵の両親だった。

「未来、用心深いお前が・・・・・・・・」

「くつつけてないわけではないでしょ」

「ですよね」

未来はポケットから機械を取り出し、僕のパソコンに繋げた。

「音量は？」

「75あれば十分」

パソコンを通じて音声が届いてきた。

“それで、お体のほうは大丈夫なのですか？”

“ああ、少し、頭痛がするだけだ”

「・・・・・・・・未来、何したんだ？」

「へ？」

「“薬”か“手刀”か“絞め技”か」

「……手荒なことはやってない」

「じゃ、薬か」

未来はさも映像が興味深そうに画面を覗き込んだが、葵の不信感たつぷりの視線は外れなかった。画面の中では斎藤が演技たつぷりに溜息をついた。

“お嬢さんが無事だと良いんですが……”

“ああ。まさか、あの二人が“反乱分子”とは……”

“……これは内部情報なんですが……”

“え？”

“実は、彼らの父親は……そういったもののリーダーではないかと疑われていたのです”

「ナルホドねえ……」

翔が呟いた。

「上手いねえ、斉藤君も」

「“お嬢さんが無事だといいいのですけど……” こんなんなつたのは誰のせいよ！」

葵はそう叫び、襟をガバツと掴んで開き、撃たれた場所を見せた。肩に巻かれた包帯からは血が滲んでる。

「葵ちゃん、結構大胆ねえ……」

未来の言葉ではつと我に返った葵は、頬を赤くしながら服を戻した。彼女は、“男の前でそれはないだろ” という感じの格好になっていた。

「な、何よ!？」

葵が思いっきり睨みつけてきた。

「え？」

「何見てんの!？」

「いや、俺は別に良いけどさ、それで物凄くペース乱される奴もいるんだから……」

「誰が？」

ちよいちよいと指差した方向には、耳を赤くして画面をじっと見ている翔がいた。必死でカーソルを操作しようとしているが、右手が

握っているのは未来が繋げた盗聴装置だった。

第二十三話 どんだけ？

斎藤は日向夫妻を引き連れ、シャトルから出て行った。

「さてさて、こっちも追いかけなきゃな」

「でも お前ら、面割れてんじゃ ?」

「斉藤“氏”が、俺たちが反乱分子だと報告しただけだ。 奴一人が、ね」

「 まさか 」

「情報源をぶっ潰したのさ。俺たちは堂々と歩ける。特に南さんはね」

全員に盗聴器のイヤホンを配り、パソコンをバックに入れて立ち上がった。

廊下を歩いていると、イヤホンから斎藤たちの声が聞こえてきた。

“さ、参りましょう。本部までほんのちよつとですよ”

シャトルの発着所はルナ・ドームの本部の中だ。斎藤が言っているのは、おそらく管制室のことを言っているのだろう。

“止まってください”

別の人間の声が割り込んだ。

“ここから先、関係者以外の立ち入りは許可されていません”

“俺たちは“関係者”だ。こちらは日向さん。連絡が入っているだろう？”

“……それで、キミは？”

“俺は斎藤だ”

“！！………了解した。日向議員、こちらへ”

音から想像すると、日向さんは半ば強引に係員に引っ張られたようだ。

“何をする！？”

しかし、係員はそれを無視した。

“………日向議員を保護しました！“奴”は扉の外です！”

“………そうか！よし、“サイン”を確保する！お前は日向議員を連れて管制室まで来い！”

“はい！さあ、行きましょう！”

“な、何事かね？”

“あいつが反乱分子のスパイだという情報が地球からこ
つちに入りまして……”

「流石だな」

声に振り返ると、翔が耳のイヤホンをポン！とはずしていた。

「お前が地球から送ったんだろ？」

「情報の信頼度は、情報源に依存する……
じゃあ、南さん」

「ん？」

「こいつで管制室とコンタクト取ってください」

僕は無線機を投げた。

「???何処でこれを？」

「そんなの、あの警備員さんから“貰った”に決まってるでしょ」

「いつ？」

「葵を運んだるとき」

「…….…….…….どんだけ？」

「まあ、何でも良いですけど、早く連絡とつてくれませんかね？」

ふと機長の向こうを見ると、翔と未来がわざとらしく自分の財布を確かめていた。

「・・・・・・・・・・こちら、機長の南。応答願います」

“南機長！！ご無事でしたか！”

「・・・・・・・・・・“協力者”のおかげだ。・・・・・・・・・・それより、斎藤からの報告は・・・・・・・・・・」

“地球から、彼がスパイだという報告が・・・・・・・・・・”

「・・・・・・・・・・そうか、地球から・・・・・・・・・・」

“今からおいで願えますか？”

「ああ。すぐに行く」

通話が終った。

「流石あ！」

未来が両手を叩いた。僕もなかなか驚かされていた。意外な演技力に、だ。

「いやいや、この位はやらないと、ね」

南さんは穏やかに笑い、僕に無線機を投げ返した。

「……………おかげで大分楽に入れそうですよ」

「そうかい？」

さすがは“South-Pore”。本当にそう思った。

南機長、隼、翔、葵、未来、それに僕。六人は、大きく開け放たれたシャトルの出入り口から出て行った。

僕たちは、ルナ・ドームに足を踏み入れた。

第二十四話 不気味だな

「・・・・・・・・しかし、こうも簡単にここまで来れるとは・・・・・・・・」

南さんを管制室に送り、残りの五人がメイン・コンピュータ室へと向かった。翔がこうこぼしたとき、僕たちはすでに部屋の扉の前にいた。

「・・・・・・・・逆に、不気味だな」

隼はそういつて両側の廊下を窺った。

「大丈夫ッしょ。“向こう”の会話も別に疑ったりしてないし」

未来はイヤホンを手で押さえ、ちよつと頷いて見せた。

まもなく、扉のロックは解除された。

「・・・・・・・・皆、提案なんだけど」

4人は扉に一步踏み出したところで止まった。

「正面から行くのは・・・・・・・・3人で十分だと思うんだけど・・・・・・・・」

「・・・・・・・・で？お前は何をするんだ？」

「搦め手で攻めようかと・・・・・・・・」

「搦め手？」

首を傾げた隼に、未来が手を振って見せた。

「隼くん、気にしないほうが良いわよ。この人、秘密主義の上、適当に誤魔化するのが得意だから」

「ま、そういうわけだ。未来、お前はついて来い」

「・・・・・・・・まあ、いいや」

未来がフウと溜息をついて僕の横に来た。残りの三人はちょっと怪しんでいるように見えたが、おとなしくコンピュータ室に入っていた。

その扉が閉まった直後、未来が横目で僕を見ているのが分かった。

「で？」

「え？」

「なんかあんでしょ？」

「秘密主義だつて知ってるだろ？」

「・・・・・・・・はいはい、黙ってついていけばいいんでしょ？」

「そうそう。分かってんなら聞くなよな」

未来のとび蹴りを軽くかわし、僕は歩き始めた。

本部の“出入り口”は二つある。一つは僕たちが使った、宇宙空間とつながっている場所、もう一つは居住区と連結している。

僕と未来はそこを通って居住区に出た。

「ふーん・・・・・・・・・・」

政府の説明とは明らかに違う、お粗末な建物が辺りに広がっていた。壁にはひび、屋根には穴があき、おまけに土台からして曲がっている。

おそらく、災害時の仮設住宅のほうはまだしっかりとした家だ。

しかも、歩いているのはしわだらけのお年寄りばかりである。

その中の一人が僕らを見てそばによって来た。

「おやあ？珍しいねえ、お若い方を見るなんて・・・・・・・・」

「おじいちゃん、お偉いさんが言ってたのとずいぶん違うね、ここは」

未来の問いかけに老人は目を伏せた。

「まだここはいい方だ．．．．．お嬢さん、あんまり奥の方には行かないほうがいい」

「え？どうして？」

話すたびに、老人の目は暗くなってゆく。

「ルナ・ドーム」に法律はない．．．．．」

「法律がない？」

「特に奥の方は．．．．．完全に無法地帯になっている．．．．．お嬢さんも、ただで帰っては．．．．．」

老人はそれからさらにわけの分からないことを呟きながら去っていった。

「．．．．．どういうこと？」

「ルナ・ドームにいるのは、“経済的弱者”が“大半”だったのはお前も知ってるな」

「うん」

「じゃあ、残りは何だと思う？」

「え．．．．．？どつかの成金でしょ？」

僕は未来の前で指をふって見せた。

「残念、違った」

「へ？」

「思ったとおり、気をつけないといけないなあ」

「だから何に!？」

僕が振り返ると、未来が2、3歩後ずさった。

「残りは・・・・・・・・・・更生の見込みがない、凶悪犯たちなのさ」

第二十五話 怖い怖い

「更生の見込みのない、凶悪犯………?」

「そう。明確な判断基準はないらしいけど、そう判断された奴がここに送られている」

「誰に?」

「決まってるだろ」

僕は“安全地帯”に向かって歩き始めた。

「正田さ」

「ナルホドねえ」

未来は立ち止まり、空を見上げていた。造られた空がその上に広がっている。ちよつと振り返ると、未来は頭を振りながらついてきた。

「作り物の空なんて、ね」

「ハハ………」

「ねえ、ちよつと」

「あん?」

「何処に向かつてるの?？」

僕はくるりと振り返った。口元がニヤついているのが分かった。

「“安全地帯”だよ、妹よ」

「あんぜんちたいい??」

「そう」

不信感たっぷりの視線がこちらに注がれた。

「まさかとは思いますが……」

「どうした?」

「“奥の方”に向かつてるとか?」

僕はパパンと手を鳴らした。

「ご名答!」

「このヤロー……」

「大丈夫だって。そろそろ“落ち着いてる頃”だから」

「はあ?」

「いきや分かんと思うよ」

未来が腕を組んで僕を睨んだ。

「私の身の安全は？」

「自分の身は自分で守れ。他人に頼るんじゃない」

さらに視線が険しくなった。

「それで私についてくるように言ったとか？」

「そうそう。お前なら滅多な事じゃ死なないから」

「シネ！！！！」

「おう、それぞれ。怖い怖い」

身構えた未来を前に、僕はスタコラ逃げた。

“奥の方”と“それ以外”にはっきりした区別はないが、どうやら俺たちはすでにそこに入り込んでいたようだ。

“声”が聞こえてきたのは、破壊の跡が生々しい、廃屋の横を通ったときだった。

「客人が来るとは、珍しいな」

僕らがバツと背中合わせになって身構えると、何人かの笑い声が響いた。

「ハハ！しかもやる気満タンときた！」

その声は上のほうから聞こえてきた。上を向くと廃屋の一番てっぺんに若い男が腰掛けていた。

「おうおう、しかも一人はかわいい女の子か！」

「・・・・・・・・・・かわいいって」

「そんなの何処にも・・・・・・・・・・イテ！！」

思いつきり足を蹴られた。

「歓迎してやろうぜ、皆で」

彼が指を鳴らすと、廃屋の影という影からごつい男がのっそりと出てきた。皆が皆意地汚い笑みを浮かべている。

「へへへへ、かわいがってやるからな」

「あらあら、か弱い女の子に何人がかりなんだか」

吹き出した僕の脚がさらに蹴られた。

「イテテ・・・・・・・・・・」

「そっちの坊やには用がないんだけどな」

「坊やって俺のこと？」

「そうだよお、逃げたかったら逃げても良いでちゅよ。ハハ！！」

ニヤニヤ笑ってる連中を見渡しても、何の感情もわいてこなかった。

「ところがこつちには用があるんだよ」

「はあ？」

「橘 洋介って奴に会いに来たんだが」

「橘？」

「別に知らない振りしても構わねえけど、哲が会いにきたって伝えて欲しいな。それで分かるはずだから」

「……………チ、“哲”か。ホントに来るとはな」

若い男が飛び降りてきた。

第二十六話 相打ちになろうとも

「・・・・・・・・俺が橘だ」

若い男が唸った。周りを囲んでいる連中は驚きを隠せない。

「おいお前ら。こいつらは俺の客だ。余計な手出しするんじゃない」

「はあ!？」

「そりゃないぜえ!!」

「マジかよ!？」

野次馬どもが轟々とわめいたが、橘のひとにらみで辺りは静かになった。

「・・・・・・・・文句があるなら、俺が相手してやる」

その迫力にほとんどが目を逸らした。しかし、全員がそうしたわけではなかった。

「説明、してもらいたいね」

ひよろつと背が高く、眼鏡をかけた20前後の男が飄々と言った。橘に睨まれても、口元の笑みは消えなかった。

「・・・・・・・・俺がここに送られたのは、正田の野郎に喧嘩を売ったからだ」

「喧嘩を売った？」

「“L o k i”という奴と一緒にね」

未来の反応は凄まじかった。電光石火の早業で橘の胸倉を掴み、後ろの壁に押し付けた。

「イテ！！！」

未来は無言のまま、彼の喉に手を当てた。どうやら頸動脈を押さえているらしい。

「お、おい……………」

周りの荒くれどもは勿論、橘も啞然としてされるがままになっていた。

「知ってるんでしょ！？」

「あ……………あ？」

困惑している橘に、未来が叫んだ。

「“L o k i”の正体だよ！！」

橘は目をぱちぱちさせていたが、だんだんと自分のペースを取り戻しつつあった。未来の手を外しながら、鼻で軽く笑って見せた。

「何を根拠に……………」

先程の男は、眼鏡を押し上げながら言った。

「あんたがもし、“L o k i”とつるんで動いた、“オーディン O d i n”なら、あいつの正体も知っているはずだ！」

眼鏡の言葉に彼は驚いたように目を見開いた。

「お前・・・・・・・・何処でその名前を・・・・・・・・!？」

「・・・・・・・・もつぱらの評判よ、“L o k i”と“O d i n”が国家機密を手にしたって」

橘が二人の間からこつちを見た。

「そつなのか?・・・・・・・・哲」

「“L o k i”が吹聴してた・・・・・・・・らしいぜ」

“吹聴してた”から“らしいぜ”というまでの短い間に眼鏡も未来もこつちを振り返った。僕は三人の顔を見て溜息をついた。

「おいおい、そんなに睨むなよ」

未来はさつと橘に向き直った。

「で?あなたが“O d i n”なんでしょ?」

橘は僕を睨んだまま、鼻から息を出した。

「・・・・・・・・・・そうだ」

「知ってるわよね？」

「ああ」

こっちをじっと見ていた眼鏡が二人の会話に割り込んだ。

「何者だ？」

「細かいことを話す気はない。が、一つ、いい事を教えといてやる」

「・・・・・・・・・・なによ？」

「・・・・・・・・・・俺も“L o k i”も、本気で喧嘩を売った。相打ちになろうとも、連中の思惑を叩き潰す」

橘が不思議な目をした。僕はそれを見て頷いた。

僕と橘は同時に呟いていた。

「・・・・・・・・・・相打ちになろうとも・・・・・・・・・・」

僕ら以外がいつせいに顔を見合わせたのが見えた。

第二十七話 撃てるさ

メイン・コンピューター室

「・・・・・・・・あの野郎、何のつもりだ・・・・・・・・？」

隼は首をかしげた。

「さあ？」

「・・・・・・・・哲の考えはよくわかんないわ」

翔は葵の言葉に頷いた。

「・・・・・・・・よくわかんない行動とるくせに・・・・・・・・」

「最後には正しいことになってる」

「え？」

隼が取り残されていた。後の二人は彼に説明しながら作業を開始した。

「いつもああいう感じなのよ、あの馬鹿」

「学校とかでいざこざが起きたりするんじゃない？教師と生徒とか、生徒同士とかで」

「はあ」

隼も手を動かし始めた。

「皆がいきり立ってさ、今にも爆発しそうなときに、あいつは」

「我関せずって感じでどっちつかずってか、何事もないかのように動いたり、まるで知らない振りをしたりね」

「なんか想像つくな」

「だろ？ “何だあれ？” って感じになるだろ？」

隼はくすくす笑った。

「確かに」

「だけどね、いろんな奴をちよつとした言葉とかで操って、自分の思ったとおりに動かしてんの。勿論、影のそのまた奥の影でね」

「そういうことに関しちゃ、あいつ、天才だね」

翔がウィンクした。葵はにこつと笑い、肩をすくめて見せた。

「それでよ。いろいろ問題を複雑にして、こんがらがせたと思ったら、同じやり方でそれを解いちゃう訳」

「んで、後から皆に話を聞くと、あいつの存在が浮かび上がって来る」

翔は左の手のひらを右拳で打った。ぱちんと小気味のよい音がした。そして明るい声で続けた。

「メイン・コンピューターを“洗脳”したぜ！」

「ナルホド………って早い！」

葵も立ち上がった。

「制御システム、制圧！」

「そっちもかい！」

二人は同時に隼を振り返った。

「隼は？」

隼は溜息をついた。

「ふう………連中の命令系統への割り込みと、殺人兵器の保管場所の検索と、それから………」

翔が口笛を鳴らした。葵も感心して目をぱちくりさせた。

「すごいわね、まだあるの？」

「………ルナ・ドームの本当の目的を」

「分かったのか！？」

その時、ドアが蹴破られた。

「動くな！！！」

三人が振り向くと、五人の役人が（驚くべきことに、武装警察ではなかった）拳銃を構えて立っていた。

「・・・・・・・・あちゃあ、捕まっちゃったか・・・・・・・・」

隼が忌々しげに呟いた。翔が両手を挙げて見せたが、薄笑いを浮かべていた。

「・・・・・・・・あんたら、撃てんのか？俺たちの後ろには、大事な大事な・・・・・・・・げ！？！？」

一番後ろに立っていた男が、なんの躊躇いもなく、翔と葵の間のコンピュータの画面の打ち抜いた。三人は考えるゆとりもなく、床に伏せた。

「撃てるさ」

どこかで聞いたことのある声が嘲り、そこにある画面を片っ端から打ち抜いた。その銃声と頭の上に降りかかる破片が、三人の頭を中から外から打ち叩いた。

男はずかずかと部屋の中に踏み込んできた。

「斎藤さん！！」

「心配には及ばん、どうせこいつら丸腰だ」

「し、しかし……………」

「……………斎藤……………」

目の前に影がかかり、葵は顔を上げた。その男の顔を見て、彼女は飛びのく。

「何であんたが……………!？」

「これはこれは、またお会いできて光栄ですよ、“向日葵”さん？」

斎藤の笑い方は、常人のそれではなかった。青ざめた葵は何かないかと後ろのほうを手で探った。

「……………おいおい、あんまりなめんなよ？」

彼は自分が撃った葵の左肩を蹴った。

「キャ!!--!!」

彼女は仰向けに倒れた。そこで斎藤はさらにその肩を踏みにじった。

「……………あ……………あ……………!!!--!!」

「葵!」

翔が立ち上がった。斎藤は彼に目をやった。

「余計な真似、すんなよ？こいつを殺されなくなかったらな」

斎藤の足はまだ動いていた。

「止めるよ！」

「………お前、俺に命令できる立場だと思ってるのか？」

斎藤はさらに力を込めた。葵の悲鳴が上がる。

「わ、分かった、止めてくれ！」

彼はようやく足をどけた。が、葵が息を継ぐ暇もなく、その髪を引っ張って立たせた。

「痛……！！！」

「ダメエ！」

斎藤は、二人の声には耳を貸さず、葵の腕を捻りあげた。

「さて、もう一人も、出てきてもらおうか」

葵のこめかみに銃口が当てられたのを見て、隼は無念そうに立ち上がった。彼はいつの間にか斎藤の背後に回っていた。斎藤は気配を感じて振り返った。

「な！？」

それでも、隼を見たときの斎藤の反応は大きすぎた。

「何故だ!？」

「「「は?」「」」

斎藤は葵の腕をさらに捻りあげた。

「痛!!!!!やめ・・・・・・・・」

「石井 哲はどこだ!?!?!?」

葵は腕が折れるような 実際折れそうだったが
一つ、僅かな可能性が残っていることに気付いた。

痛みの中、

第二十七話 撃てるさ（後書き）

感想を頂けると、作品の調子が向上するような気がしています！

さあ、皆さん、憐れな作者に感想を（ー）

第二十八話

延べ、十二人だな

「・・・・・・・・・・!!」

斎藤は葵の腕をさらに捻った。

「何処だ!？」

葵は何とか声を絞り出した。

「・・・・・・・・・・“ Good night ”!!」

瞬く間に光が消える。

「ナツ・・・・・・・・!!？」

その驚きによって出来た一瞬の隙が、命取りだった。

葵は斎藤の腕を振り解き、まず肘で鳩尾に一発。さらにその隙を広げる。

くわえて右の拳を振り向き様に顎に。

仕上げは、右の上段蹴りを全く同じ箇所にかました。

どのタイミングでかは不明だが、彼は床に倒れる前に気を失ってい

た。

全ては暗闇の中で行われた。

電気が復旧された時。残りの四人は何かする暇もなく、両手を挙げさせられた。

「黙って言うこと聞かないと、斎藤の頭を吹っ飛ばすわよ!!」

と叫んだ少女によって。

「………葵に助けられたな、俺たち」

翔がコンピューターのコードで役人たちを縛りながら言った。

「ああ。あの“仕掛け”はいつやったんだ？」

隼も斎藤を事の他きつく縛りながら不思議そうに首を傾げる。葵は溜息をついた。

「私じゃない。哲がやったの」

男二人は顔を見合わせる。葵はまたしても溜息をついた。手はすばやく動き、必要以上にきつい結び目が出来上がっていた。

「やっぱ、踊ってるだけなのかな。掌の上で」

「おそらく、な」

翔は諦めたように笑った。隼は顔をしかめ、立ち上がった。

五体のコード巻きの人間が完成していた。

“ 奥の方 ”

「さあ、役者は揃った」

「役者？」

「まずは“向日葵”それに“South-pore”。裏切り者の
“ザイン”に、優秀なハッカー“Wildcat”。そして“Thor”^{トル}。……」

「“Thor”？あの、一時期有名になった、ウィルスばら撒いた奴でしょ？そんな奴が……」

「黙って聞けよ！……ここに居る“Odin”に、地球に
いらっしやる正田こと“Ragnarok”^{ラグナロク}、羽下こと“Logi”^{ロギ}」

「隼ならここに居るでしょうに」

「大馬鹿だよ、お前は」

僕が下げた頭の数センチ上を未来の手が通過した。

「地球にあいつの兄貴がいんだよ！えっと……何処まで行ったっけ？」

「隼の兄貴まで……！」

「ああ、そうそう。+筒井警部補が“Fennir”^{フェンリル}。それに、どこかにいるであろうと予測される“Loki”と……。」

未来は再び出てきた知らない名前は聞き流したが、“Loki”には反応した。

「“Loki”、か。お兄ちゃん正体知ってんでしょ？実は」

「妹が知りたがってるよ。言えればいいじゃないか」

眼鏡の男が口を挟む。

「おい、“Tarsier”（メガネザル）。黙っていたほうが得策だぞ」

飄々としていた男がたじろぐ。

「何故俺を……？？」

「さあ？俺が知ってんのはそれだけじゃねえぜ？“Heimdall”^{ヘイムダル}……！！！」

僕は未来を振り向いた。

僕と彼女がはたとにらみ合う。

「延べ、十二人だな」

“Odin” がふふんと鼻を鳴らした。

第二十九話

馬鹿な真似はよせ

地球

正田は官邸に悠々と入っていった。秘書がその後ろから追いかけてくる。

「総理、お電話です」

「電話？誰だ？」

「羽下 兼です」

「・・・・・・・・・・ほう」

正田は携帯電話を受け取った。

「何かつかめたのかね？」

電話の向こうの相手の言葉を聴き、正田の顔色が変わった。

「・・・・・・・・・・それは・・・・・・・・・・君等の宣戦布告になるのかね？日本に対する・・・・・・・・・・」

秘書が顔をしかめ、耳を澄ましたが、会話は聞き取れない。

「その両者に違いはあるのか！？・・・・・・・・・・よし、いいだろう。君等が平和に暮らせる時間は終わった、と言うわけだ」

正田が電話を切った（秘書の目には一方的に切ったように見えた）。

「総理??」

と、彼は突然携帯電話を壁に投げつけ、破壊した。

「どうされたのですか!？」

「なんでもない」

正田のこめかみに青筋が立っているのを見逃す秘書ではなかったが、それを指摘するほど愚かでもなかった。

「羽下、筒井の二人を逮捕しろ。国家反逆罪だ」

「そんな罪状は………」

「ないのは分かっている!!だから、とにかく何か被せて警察に追わせろ!」

「………はい」

「今日はもう、貴様に用はない。早く帰れ」

「しかし………」

「失せろと言ったんだ!!!」

秘書は抵抗をあきらめた。

「では、失礼します……………」

正田は彼の厳かな礼には目もくれず、さっさと奥の部屋に入っていた。

“プルルルル……………プルルルル……………はい”

正田は即座に命じた。

“羽下だ。優先度は石井 哲、未来と同等に”

“かしこまりました”

“それで、まだつかまらんのかね？ “悪戯坊主”は”

“……………どこかで死んでるんじゃないかと疑ってるんですが……………”

正田は溜息をついた。組織が発足してから、今までこんなことはなかった。まさか、まだ10代のガキにてこずるとは……………

“それで、 “L o k i” は？”

“……………やつのアジトを突き止めました”

“ほう！”

正田はガッツポーズをしかけたが、男の暗い口調に違和感を覚えた。

“喜べませんよ、こちらは”

“どういうことだね？”

男は苦々しさを前面に出して言った。

“そこにあつたコンピュータのモニター全てに、
“ダメー発見おめでとう”と・・・・・・・・・・！！”

“・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・”

“しかし、複数の人間の髪の毛を採取しましたので、そこから・・・・・・・・・・”

“楽観的観望は、成功したときに聞かせてくれ”

正田は苦々しい気持ちで電話を切った。

「・・・・・・・・・・役立たずめ！！」

本部 約1時間前

「接続完了。兼、いつでも出来るぜ？」

「おつ」

すでに人払いを済ました彼らは、昔の悪戯を再現するような心持でコンピュータの電源を入れた。筒井は羽下に聞いた。

「で、何を調べるんだ？」

「決まってるだろ？あの正田サマサマが、何をたくらんでるのか、だよ」

「知らねえ方が良いと思うんだが」

羽下は昔の相棒を振り返り、ニヤツと笑った。

「だからこそ、知りたくなんだろ？何か国家機密を握れるかもな……」

彼が画面に戻った瞬間、後ろでガチャツと音がした。

「……………何のまねだ？」

筒井警部補は銃を構え、兼の頭に突きつけていた。

「言つたろ？俺は堅気だと……………馬鹿な真似はよせ。今なら、俺が昔のよしみで見逃してやる」

兼は背後で銃を構える親友に指を一本立てた。中指……………じゃなく人差し指を。

「一つ、教えて欲しいんだが」

「残念だが、俺は知らない」

筒井は首を振ったが、兼は指を振って見せた。

「お前のことだよ、筒井。何があった？」

「・・・・・・・・お前には関係がない・・・・・・・・!!」

突然、“声”がした。

“珍しいこともあるもんだ!!”

その“声”はコンピュータから聞こえてきた。が、まるで誰かがその後ろでしゃべっているような、極めて人間らしい声だった。

“Logi”と“Fenrir”が口論してるなんて、な!”

自分のコードネームが知られている。困惑した二人は、身動きすら出来なかった。

第三十話

なんとも思っちゃいねえ！！

「誰だ・・・・・・・・・・！？」

“声”が答えた。

“L o k i”だ”

「・・・・・・・・・・本物か！？」

羽下の問いかけの後、鼻を鳴らす音まで聞こえてきた。

“疑うのか？まあ、どっちにしろ信用しないんだから気にするなよ”

「・・・・・・・・・・何のようだ？」

“そう、怒るなよ“F e n r i r””。俺はただ、あの正田総理を信用するな”
用するな”って言いに来ただけなんだから”

筒井は仇を見るような目でコンピュータを睨みつけた。

「・・・・・・・・・・だからと言って、お前の側につくと思っただのか？」

「おい、ツツ・・・・・・・・・・」

“筒井サン、あんたの婚約者^{フィアンセ}の件、俺は絡んでないぜ？”

筒井は銃を構えてコンピュータを撃ち抜こうとした。羽下がその手を押さえる。すると案外簡単にとめることが出来た。

「・・・・・・・・ツツ、何の話だ？」

「・・・・・・・・詩織は同僚だった。一緒に“L o k i”を追っていた」

険しかった彼の顔が、さらに迫力を増した。

「だから襲われた。心も体も滅茶苦茶にされて、警察が居場所を見つけ出すまで、一ヶ月も縛られたまま放置されていた」

「フィアンセ婚約者つて・・・・・・・・・・」

「そうなる予定だったんだ。拉致された夜に、な」

羽下はちよつと呻き、さらに聞いた。

「死んだ、のか？」

「・・・・・・・・行方不明だ」

おそらく、自殺だ。筒井は心の中で、そう付け足した。彼は、“それ”を見て、詩織が何をされたかを知った。とても生きてはいけな
いだろう・・・・・・・・

「どうして“L o k i”が絡んでくるんだ？」

「その部屋においてあったパソコンのモニターに、“L o k i”を追

った罰だ。次はない”と出ていた」

そして、そのパソコンの中に、暴行の様子を一部始終収めた映像が・
・・・・

“全く、とんだ言いがかりだぜ!!”

“声”が怒ったように叫んだ。

“俺は警察なんかなんとも思っちゃいねえ!!女刑事^{デカ}を襲って捜査を止めさせる!!?そんな非道なことが出来るかつ!!!”

「・・・・・貴様・・・・・」

筒井は再び銃を構えかけた。

“そんなことやるのは、” R a g n a r o k ” ぐらいだ!”

「ラグナロク?」

羽下が驚いた顔で顔を上げた。筒井は一拍遅れてその名前を聞いた場所を思い出す。

「・・・・・あの、総理直下の極秘プロジェクトのチームか・
・・・・?」

“そうか、表向きにはそんな説明されてるんだ?”

今度は羽下が憤っていた。

「L o k i」、貴様……………」

“Log i” そう怒るなよ。あれが暗殺チームだつて知ってるのがそんなに意外か？”

「総理大臣直下の……………暗殺チーム？？」

“そう、おそらく、科学者の石井夫妻は彼らに殺られた。今はその二人の子供と俺のことを追ってるはず”

「何！？」

筒井は何か言いかけたが、羽下が遮った。

「何故お前はそんなに詳しい？？」

“L o k i” は悪戯を仕掛けた子供のように嬉しそうだった。

“L o k i” だから、じゃ不十分？”

「あまりに真実を知りすぎているな……………」

“筒井サン、目を覚ましてください”

“L o k i” の声は打って変わって真面目だった。

“多分、詩織サンは知りすぎたんです。だから、“あいつら”に襲

われた”

「どういうことだ・・・・・・・・・・？」

“俺が馬鹿だった・・・・・・・・・・”

二人は一人の人間を見るような目で機械に見入っていた。

第三十一話

さあ、知らないな

「どういうことだ!？」

“詩織サンは気づいたんだ。俺が、正田の企みを暴くために誘導しようとしてることに”

筒井と羽下は不安そうに顔を見合わせた。

“だから、俺とコンタクトを取ろうとした”

「ちょ、ちょ、ちよっと待て」

筒井が頭の周りの蠅を払うような動作をした。

「正体もわからん奴にコンタクトって……どうやって?」

“なめてもらっちゃ困るよ、筒井サン”

“L o k i”は面白そうに言った。

“俺と話したけりゃ、ネット上で一声俺を呼べばいい”

「はあ?」

“「L o k i」、来てくれ」&でも言えば、1、2週間以内に行つてやるよ”

「それが畏だとしても、か?」

羽下がせせら笑ったが、“L o k i”の声は、それをさらに嘲った。

“あんたらや“R a g n a r o k”が俺を捕まえるとしたら……”

“俺が自首したときだけだ”

あまりの自信に二人は声も出せなかった。

が、それが真実であることにも、気付いていた。

“それで、だ。俺は手に入れた情報を彼女に伝えた。ルナ・ドームが殺人兵器である事、虐殺が目前まで迫っている事、等等な”

羽下がしかめっ面で言った。

「……………是非聞きたいんだが……………」

“ん？”

「なぜお前はそんな行動をとる？」

“さあな”

“L o k i”が肩をすくめる気配まで伝わってきた。

「面倒なだけだろう？そんなお節介焼いても」

“俺は、正田の野郎が気に喰わねえ。というか、あいつをこのままにしたら危ないと思ったから、動いたんだ”

筒井がさらに突っ込んだ。

「それは、お前が捕まるという意味か？」

“違うね。さっきも言っただろう？俺が捕まるのは自首したときだけだ
って”

その言葉の一句一句に多少の嘲りが込められていた。

「じゃあ、どういう……」

“地球上の全生物が危ないって言うてんだよ”

「………??？」

“一部のお偉いさんを除いてな………!!”

二人は彼の憎々しげな声を聞き、自らの耳の届く範囲以外で何かが動いていることを知った。

「・・・・・・・・その情報を知つてすぐ、詩織が襲われた、というわけか」

“一週間後だ。恐らく、誰かに伝えたんだろう。用心しろといつておいたのに・・・・・・・・”

筒井は無表情で尋ねた。

「その、“誰か”も知ってるんじゃないのか??」

“・・・・・・・・さあ、知らないな”

「・・・・・・・・お得意の独り占めかい?」

羽下が笑った。あきれているというか、馬鹿にしているというか、そんな笑い方だった。

“・・・・・・・・確証がないことは話さないポリシーなんだ”

「ああそうですか・・・・・・・・で?俺たちに何をさせたいんだ??」

“ずいぶん^{ストレート}単刀直入だな、“Logi””

「“駒”が考え出したら混乱が起こる。だろ?“Loki”さんよ」

““駒”?”

「そつだ。俺たちはお前に取っちゃ将棋の駒だろ?」

“俺は将棋もチェスも嫌いだ”

“L o k i”は笑っていた。

“見てるだけだったらどっちでもいいけどな”

羽下は気付いた。

“L o k i”は競技者^{プレイヤー}ではない。

究極の傍観者であり、かつ、気まぐれな手出しもする……………
神の視点で世界を見ているのだ。

全ては彼の思うままに……………

第三十二話

だろっね

“じゃあ、単刀直入に言おう”

「・・・・・・・・ああ、頼むぜ」

“俺は誤解が解きたいだけだ”

“L o k i”は飄々と言い放った。二人は狐につままれたような顔をしている。

「・・・・・・・・・・は？」

その反応を見たからか、“L o k i”は説明を始めた。

“別にあんたらが正田側タヌキにいても、こっち側　ま、言うなれば
キツネ側、だな　にいても、俺たちが失敗すれば死ぬ。だから、
仲間になつてもらいたいわけじゃない”

「・・・・・・・・キツネとタヌキの化かしあいであれ俺たちが死ぬのか？」

“死ぬね。世界の半分以上が死ぬ。下手すりゃ全滅だ”

筒井が眉をひそめた。

「・・・・・・・・物騒だな・・・・・・・・何が起ころうとしている
？」

“・・・・・・・・お偉いさんの壮大な計画さ。ま、とにかく、俺は

濡れ衣で恨まれたまま死ぬのは嫌だからさ、わざわざここまで来たわけよ”

羽下がパソコンの画面をにらみつけた。

「理解できねえな」

“ だろうね ”

“ L o k i ” はせせら笑った。 “ あんたには理解できないだろうさ ” とでも言うように。

羽下はむっとした様だが、筒井は別のことに気をとられているようだった。

「ひとつ、教えてくれないか？」

“ 一つじゃなくてもいいぜ。ただ、答えられねえかもしれないけど ”

「 詩織の行方を知っているのか ? 」

“ 知っている、とは思う。ただ、確証はない ”

「 どこだ ? 」

“ ルナ・ドーム ”

「 何 ! ? 」

羽下は怒りを忘れるほど驚いていた。

“……………繰り返すが、確証はない。ただ、そこしか考えられねえっただけだ”

筒井は驚くほどの冷静さだった。

「……………正田か？」

“それは間違いない”

「詩織は生きてるのか？」

“恐らく。殺すつもりなら、最初に拉致った時にそうしてる”

「……………詩織を殺さない意味は何だ？」

“……………それが分からねえんだ”

筒井は低い声でうなり、考え込むように視線を落とした。

「餌として使うつもりじゃないのか？」

羽下がポツリと言った。筒井がゆっくりと身を起こす。

「そのために……………？」

“相当な大物を狙ってるってわけだ”

二人は頷いた。

「まずは詩織の居場所を突き止められて……………」

「ルナ・ドームに潜入できる奴じゃないと……………」

「！」

筒井は画面に食らいつくようにパソコンをつかんだ。

「おい！哲の居場所は！？分かるか！？」

羽下が怪訝な顔をした。

「哲……………？石井 哲か……………」

「そうだ！おい！」

一瞬の沈黙の後、茫然とした声が聞こえてきた。

“……………ルナ・ドームだ……………”

二人の間の理解が読めない羽下が怒鳴った。

「ルナ・ドームにあの悪ガキが！？おい、どういつことだ！？」

「弟なんだ……………」

「弟！？お前の！？」

“正確には、違う……………石井 詩織の……………弟だ……………”

羽下は目を丸くして、髪の毛をかきむしる相棒を見やった。

正田が狙った獲物が判明した。

第三十三話

ま、甘過ぎるけどな

沈黙を破ったのは筒井だった。

「・・・・・・・・おい、兼」

「・・・・・・・・どうした」

「力を貸してくれ」

羽下は訝しげに彼の顔を窺った。

「・・・・・・・・何をやる気だ」

「そいつは“L o k i”に聞いてくれ」

“おい、ちょっと待て”

“L o k i”の声は少しいらついているように聞こえた。

“俺は思うところに従って動く。それに他人を巻き込むつもりはない”

「よく言っぜ」

羽下が呟いたが、“L o k i”は聞こえなかったかのように続けた。

“だから、今のところ安全なお二人さんにやってもらう仕事はねえよ”

「……………じゃあ、俺も思つところに従つて動けばいいのか？」

筒井が静かに、だが力強く言った。

“……………まあ、そういうことになるかな”

「……………改めて言う。兼、力を貸してくれ」

羽下は躊躇うことなく頷いた。

「何する気か、教えてくれるんだろうな？」

「正田を暗殺する」

あまりのことに“L o k i”も羽下も言葉を失った。

ルナ・ドーム“奥の方”

“十二人目”の役者に睨まれ、少々背筋が寒くなっていた。

「……………どこで知つたの？」

「企業秘密だ」

「吐け」

「やなこった」

未来は僕の首を絞めたがってるかのように、指を曲げ伸ばししていた。

「・・・・・・・・橋、例の在り処、分かったか？」

僕の問いに橋はニヤツとした。

「愚問だな。ここに送り込まれた連中、ほとんどは3年もすればシヤバに出ちまう知能犯ぞろいだぜ？」

未来は首を傾げた。

「・・・・・・・・確か、“更生の見込みのない凶悪犯”が送り込まれたんじゃないの・・・・・・・・？」

「“正田が選んだ”、な」

「あいつにとって、怖いのは殺人鬼や、強姦魔じゃない」

「本当に恐ろしいのは、“Odin”みたいなハッカーとか、真実に気付く恐れのある知能を持った連中だ。ずっと捕らえておくことも出来ず、かといって殺すわけにもいかない」

“Tarsier”がため息をついた。

「で、始末するために送り込まれたってわけだ」

「ま、甘過ぎるけどな」

“Odin”が鼻で笑った。

「俺たちがその名簿を作り変えた」

「つ、作り変えた………？」

「おう、こっちの都合に合わせて、な。………ちょっといかれた輩を外すだけだったが」

「………じゃあ、私たちがここに来た時“優しい声”をかけてくれた“紳士”連中は！？」

未来は周りでやらしい笑みを見せてる男たちを指差した。

「ああ、あれはホントの“凶悪犯”だ」

「お嬢ちゃん！俺たちが何やったか聞きたかったら、ベッドで話してやるぜえ！」

野次を飛ばした男は下品に笑ったが、3人（僕、未来、橘）の一睨みで黙った。

「さすがにまともな知能犯だけじゃ名簿を埋められなかったからな。わざわざ俺が来たわけだ」

“Odin”は不敵に笑った。

「………？」

「こいつ、あの荒くれどもをまとめるだけの力があるんだ。武力も、知力も、な」

「哲、そんなにほめるなよ、照れるだろ」

そうは言っていたが、当然の評価を受けているとしか思っていないようだ。

第三十四話

今度こそ、無理だな

僕はなせる限りを尽くして皮肉っぽく言葉を発した。

「ほんじゃあ、まあ、そろそろ案内してもらえますかね、“Odin” 様様？」

橘は目を細めた。

「おいおい、こっちは大変だったんだぜ？もうちつと“敬意”ってのを示せねえのか？」

「ええ？これ以上？？」

「………分かった分かった」

「………お兄ちゃん、いったい何を探してるの？ここに軍の機密でもあるの？」

僕は肩をすくめた。

「恐らくあるな。だけど、そいつは“あの”三人の役目。きっとそろそろ見つかる頃だ」

「哲、こっちだ」

橘がもう歩き始めている。僕は歩きながら続けた。

「俺の探しもんは、俺か、未来かししか探さ

ないもの………」

未来はぴんと来ないようだ。

「姉貴だよ」

後ろで息を呑む音が聞こえた。

本部のある廊下

「まったく、何で斉藤が………?」

葵が頭をぶんぶん振った。隼は躊躇いがちに呟いた。

「どうでもいいが、やっぱり脱出したほうがいいと思うな………」

「だめ」

葵はきつく彼を睨む。

「“South-Pore”を助けなきゃ!」ね。はいはい………」

翔もあきらめたように呟いた。

斉藤が自由ということは、南が危険な立場にいることを、火を見るより明らかにしている。

葵は彼の救出を頑なに主張した。後の二人がぼそぼそと、“もう死んでるかもしれない”と言っても、聞く耳を持たず、“じゃあ、私一人で行くから！”と言い放った。

二人もそんなことをさせるわけにもいかず、ついてきている、というわけだ。

「でさ、隼」

「んあ??」

彼はいかにもめんどくさそうに返事をした。

「ちょっと!.....ルナ・ドームの本当の目的って?」

隼は言葉を選ぶ間をとった後、重々しく告げた。

「.....居住者を殺すのに、核ミサイルは必要ない」

翔の声が掠れた。

「か、核ミサイル??」

「そもそも、“中の人間を殺す”だけなら、ただ、空気の漏れる穴を作るだけでいい」

隼は無表情だった。

「せいぜい使っても細菌兵器だ。というか、それがベストかな。施設も壊れねえし、“後始末”がしやすい」

葵はごくりと唾を飲んだ。

「でも、核兵器だ。しかも、大きさを考えると・・・・・・・・・・」

「動くな!!!」

今度こそ、無理だな。

隼はぐるりと周りを見渡した。

10人の武装警官じゃあ、さすがにこの娘でも勝てない。

彼はそっと肩をすくめ、ゆっくり手を挙げた。

「おとなしくすんのが無難だよ、お二人さん」

体を硬くしていた二人は隼を見てあきらめたようにため息をつき、彼に倣った。

「あ、そうそう。大きさの話だったね？」

彼は手錠をかけられても、冷静だった。

「ありゃあ、地球の半分はぶっ飛ばせる大きさだよ」

今のところ、この意味を理解しているのは隼一人だ。

少なくとも、今、この場の中では……………

第三十五話

ただの鎌かけよ

正田は暗い所に、一人で座っていた。

円形の部屋の真ん中に。目はじっと閉じられ、何かを祈っているかのような表情だ。

「・・・・・・・・」

かすかな振動を感じ、彼はスイッチを押した。

パツと正面の壁がディスプレイに変わった。

“ F・F ” 主要メンバー3人を拘束。残りは石井 哲、未来等のみ。二人の姿をルナ・ドームで確認済み”

「ほう・・・・・・・・分かっていと思うが、殺すな。どうあっても、石井 哲や橘 洋介に吐かせなきゃならない」

彼の顔がいつそう残忍になった。

「 L o k i ” の正体を・・・・・・・・！！」

ふっと画面が暗くなる。

その残像が消える前に、彼は別の振動も感じた。

テレビ電話だ。

画面に映った顔を見て、正田は薄笑いを浮かべた。

相手は、アメリカ大統領。彼も、同じように笑った。

ルナ・ドーム“奥の方”の更に奥

この辺りになると、飾り付ける必要も感じなくなった政府が、適当にごちゃごちゃした建物を作っただけになっている。

「・・・・・・・・ひっどお・・・・・・・・まるで小学生の工作ね」

未来の意見はかなり手厳しかったが、別に外れてもいなかった。

「この辺になるとさ、別に変な輩も入ってこないし、しっかり作る必要もないんだよ」

“Odin”はそういつて、近くの家の壁を蹴飛ばした。彼が一步下がったとたん、メキメキという音がして、家が崩れてしまった。

「・・・・・・・・ひでえな、ホントに・・・・・・・・で、どの辺りなんだ？」

「ああ、もう少し先に、何か地下の空間への入り口があるらしいんだけど・・・・・・・・」

「へえ・・・・・・・・形状は？」

「お兄ちゃん、設計図！」

“なるほど！”と思い、バッグに手をつ込んだ瞬間、ふと思った。

「・・・・・・・・なんで、未来がそのことを知ってた？」

睨みつけたが、済ました顔をされただけだった。

「ただの鎌かけよ」

僕はしぶしぶパソコンを取り出し、立ち上げた。

表示された設計図を見て、“Odin”が口笛を吹いた。

「すつげえ！おい、これなら、俺がここに来ることなかったんじゃないの??」

「しょうがねえだろ」

自分の声が相当暗かった。

「親父が勝手に渡してきたんだから」

程なく、入り口は見つかった。隠す気があったのかもしれないが、途中でその必要がないことに気づき、中途半端に投げ出した、といった感じだ。

地下へ続く階段を下りていくとき、誰も口をきかなかった。

センサーが俺たちを感知して、だんだんと明かりがともり、通り過ぎると消えていく。

長い廊下を、光とともに歩いているように思えた。

最後に、僕たちはスタジオのような部屋にたどり着いた。

「・・・・・・・・ここは・・・・・・・・？」

ガラス張りの向こう側に、さらにガラス張りの四角い部屋がある。こちらについた光で分かるのはそれだけだ。

“・・・・・・久しぶりね、人が来るのは”

スピーカー越しに、懐かしい声が聞こえてきた。

第三十六話

とつと片付けよう

“何か用？”

未来はおでこをガラスに押し当て、ガラス張りの中の人影を確認しようとした。息でガラスが曇る。

「……………お姉ちゃん……………」

“え！？”

「……………夢じゃ、ないよね……………？」

“未来！？何でここに……………”

「その説明は後でする」

“哲！？”

「そうだよ。まずは姉貴を出さないとな」

“……………どうかな……………このガラスの外はね、毒ガスで満たされてるの。単純だけどいい手よ。こっちは絶対に出られない”

「毒ガス？……………まあそんなところだろうとは思っただけど……………息止めていくって手は……………」

“皮膚からも毒が入るから、不可能”

「ガスを放出出来るかな？」

姉貴は大きくため息をついた。

“それはそつちで調べることでしょ”

まあ、もつともだ。

僕は設計図を表示した。皆もそれを覗き込む。

未来はまだガラスに張り付いていた。

「お姉ちゃん、入れられてからどのくらい？」

“・・・・・・8ヶ月、かな？”

「ずっと一人？」

“まあね”

視線を感じて顔を上げると、未来がじつとこつちを見ていた。

「・・・・・・大丈夫だよ。な？姉貴」

“何が？”

「孤独は人を狂わせるって言うけど、姉貴は大丈夫だろ？」

“絶対、死ぬわけにも、狂うわけにもいかないの。まだ、ね”

“Odin”が急に声を上げた。

「哲、あつたぞ！通風孔だ！」

「どこにつながってたんだ？」

彼は画面を指でなぞった。

「・・・・・・・・・・“外”、だな」

「よし、じゃあ、とつと片付けよう」

未来以外の3人が管理用のコンピューターに向かった。

“Tarsier”が口笛を鳴らした。

「・・・・・・・・・・どうした？」

「このガス、すごいな。皮膚から入んのはもちろん、ものすごい毒だ。数ml 気体でだぞ 致死量だとさ！」

「“サリン”か？」

「いや、そいつをもうちよつと強力にした代物だ」

僕もついつい口笛を鳴らす。

「いやはや、“Ragnarok”も流石だね」

「ラグナロク？」

未来がこちらを振り返った。記憶の中を探っているようなしかめっ面だ。

「正田様様直属極秘開発組織」

「ああ、それで……………」

「暗殺と兵器の開発をやるにはもってこいの位置、だな」

“Odin”が呟いた。

その時、ガスがすべて排出され、換わりの空気が満ちたことを知らせるブザーが鳴り響いた。

“……………もう、出て良いの？”

「ああ。今、そのガラス箱を開けっから」

“Tarsier”に合図すると、彼は頷いてコンピューターのキーボードを二、三叩いた。

みな氣息を殺して、ガラスの向こうの闇に目を凝らした。

音もなくガラスがすべり、中の人影がするりと外に出てくる。

人影は一瞬、自分の牢屋を振り返った後、半ば急ぎ足で出口に向かって歩いた。

シューツという音とともに、重い扉が開き、姉貴、石井、詩織が部屋に入ってきた。

第三十七話

嘘は言わないで

「・・・・・・・・・・なんか、雰囲気変わった？」

僕の口からそんな言葉がついて出た。

「ちょっと筋肉ついただけよ」

「・・・・・・・・・・ちよつと、ねえ・・・・・・・・・・」

体のどの部分も、服越しに筋肉の走りが見えるほど鍛え上げられていた。未来が姉貴をつつく。

「うわぁ・・・・・・・・・・かたぁ・・・・・・・・・・！」

「何せ、暇だったし、いつか役に立つと思ってね」

姉貴はウイंकすると、力こぶを作って見せた。未来がまた感嘆の声を上げる。

「“Tarsier”、哲、お前らの力こぶと比べてみねえか？」

“Odin”は愉快そうに笑った。残念ながら、僕たちには敵いそうにない。

「パス。勝てる勝負しかない性質でね」

「同じく」

姉貴はニヤツとした後、ちよつと表情を曇らせた。

「でもね、ちよつと問題があるのよ……………」

僕はすかさず茶化した。

「男が寄り付かないとか？」

“Odin”も乗ってきた。

「いやいや、それはもとか……………グエ!!」

彼女の手刀が僕ら二人ののどを打った。激しく咳き込む僕らには目もくれず、詩織がため息をついた。

「筋肉って重いから体重が増えちゃったのよね……………」

その辺も色々と突っ込みたかったのだが、それどころじゃなかった。

「あ、そうそう。哲」

僕が身を起こすと、にこやかな姉が目と鼻の先にいた。

「……………何?……………!!!!」

強烈なストレートが左の頬に炸裂した。

僕の体が後ろの壁にぶつかって跳ね返り、地面に転がった。

「お姉ちゃん！?!?!?」

未来がパツと僕のそばに駆け寄ってきた。“Tarsier”もまごまご僕と姉貴を交互に見ていた。

「お兄ちゃん、大丈夫……? いったい何なの!？」

姉貴は肩をすくめた。

「私は別に 哲のせいにはしてないんだけど、哲はこうでもされなきゃ気がすまないでしょ。でも、もうチャラ。忘れなよ」

「何の話よ?」

未来が手を借してくれながら、訝しげに僕を覗き込んだ。立ち上がったとき、頭がぐらぐらした。

「……………ああ。でも、もう一発殴ったほうが良いかもしれない」

無視されて未来がむっとしているのが分かったが、僕は構わず、真っ赤な唾を吐き出した。姉貴がニヤリとして“へえ”と相槌をうつ。心臓の辺りがきりきりした。

「姉貴、ごめん。親父とお袋が殺された」

詩織の顔から笑みがゆっくり消えていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「親父が、この、ルナ・ドームの設計図を、命と引き換えに・・・・・・・・・・・・・・・・！！！！！」

また左の頬にこぶしが激突した。さっきより激しく僕の体がバウンドする。

「お姉ちゃん！」

未来が間に割り込んだが、詩織はそれを意図も簡単に押しのけ、僕の胸倉をつかんだ。僕はそのまま持ち上げられ、壁に押し付けられる。

彼女は後ろで呆然としている三人には聞こえない声で言った。

「・・・・・・・・正直に答える必要はない。ただ、嘘は言わないで・・・・・・・・あんだ、それ、お父さんから受け取る前から持ってたんじゃないの？」

僕は目を伏せた。

それで姉貴は手を離れた。

別に怒るわけでもなく、泣くわけでもなく。

ただ、手を離した。

第三十八話

・・・・・・・・畜生

気付いたときにはもう遅かった。

我が妹　　腹立たしいほど僕に似ていて、抜け目がないクソガキの“耳”が、僕にも仕組まれていることを迂闊にも忘れていたのだ。

未来は薄目で僕を見ながら、右の人差し指で唇を叩いている。

「・・・・・・・・Odin」、聞こえた？」

「・・・・・・・・いや。未来・・・・・・・・ちゃん？君は？」

「“ちゃん”要らない。・・・・・・・・私は聞こえた」

目がスッと開く。

「・・・・・・・・なんかさ、“お父さんからもらう前から設計図を持っていた”というような意味の言葉が聞こえたんだけど」

僕は黙って視線を受け止めた。未来は続ける。

「・・・・・・・・多分、ルナ・ドームの設計図つてのは、史上最大の国家機密だよね？絶対に知られちゃいけないもの・・・・・・・・お父さんは、仕事柄、持っけていてもおかしくないけど、24時間監視されていた・・・・・・・・」

“……………何でお前がそれを知ってるんだよ！”

声に出せるわけもなく、心の中で叫んでみる。

「……………でも、その監視状態になかったお兄ちゃんが自分で持つてるって事は……………」

“Tarsier”が目を見開いてこっちを見る。

「お前が自分で手に入れた……………!?!」

ちらりと姉貴を見ると、“耳”を外してなかったあんたが悪い”
というような目をしていた。反射的に“Odin”を見ると、素知らぬ顔で鼻の頭をかいている。両方とも、僕を助ける気は全くないらしい。

「……………畜生……………」

未来がスツと近づいてきて、僕の袖を掴み、目を覗き込んだ。

「……………そうなんですよ？お兄ちゃん」

ついつい目をそらしてしまう。その行為が肯定することと同じだとは分かっているのだが。

「……………だったらどうなんだ？」

「決まってるでしょ？」

マズイ。

ルナ・ドーム本部司令室

葵、翔、隼を引き連れた武装警官の一人が、背を向けて偉そうに立っている軍人に敬礼した。

「向日葵」“Wildcat”と・・・・・・・・・・」

彼はちらりと隼を振り返る。

「あ、加藤 守と・・・・・・・・・・」

軍人がそれを遮る。

「羽下 隼君、無駄なことはやめ給え」

隼は目を細めた。

「・・・・・・・・・・あんだ、やっぱり・・・・・・・・・・」

声を聞いて葵も顔を上げる。軍人はクルリとこちらを向いた。

「・・・・・・・・・・南さん・・・・・・・・・・？」

「意外そうだな、“向日葵”君」

それは紛れもなく、南機長だった。ただ、彼の静かな微笑みは含みのある笑みに変わり、穏やかな視線は人を見下すものになっている。

そう、変わったのはそれだけだ。

だが、それだけで、彼が裏切り者であることが十二分に分かる。

葵は眩暈がした。

“私たちは・・・・・・・・・・違う。私は、この人たちの掌の上で踊らされていた・・・・・・・・・・？”

南はにやりと笑い、再び背を向けた。

第三十九話

この瞬間

この瞬間、日本中に散らばった“Ragnarok”の43名のメンバーが目を光らせ、耳を澄ましていた。

それぞれの目が、“Loki”である可能性がわずかでもある人間を見張っていたのだ。

彼ら在必死になって絞り込んだのは47名。

メンバーがまさに影のように彼らに張り付いている。

また、耳は、“ルナ・ドーム”のとある場所に仕込まれた盗聴器が拾う音に注意を向けていた。

43人のメンバーが、

IT企業の技術者の周りを掃除しながら、

有能プログラマーの横で助手をしながら、

悪名高いハッカーと話しながら、

あるウィルスを蔓延させたと噂される男とベッドを共にしながら、

目の前で自分のちらつかせている“餌”に飛び掛ろうとしているか

つての盟友を見ながら、

“ルナ・ドーム”の本部のモニターを見ながら、

耳の内部に埋め込まれた、極小のイヤホンの声に耳を澄ましている。

今、まさに電撃が走る。

敵の正体はもう分かったのだ。

全てを繋げたのは、“L o k i”候補の一人。

“ 彼女 ” の “ 耳 ” のお陰である。

衝撃からくる一瞬の空白の後、遅れて勝利の喜びがやってくる。

敵はもう、こちらの手の中にあるのだ。

少女が言う。

“ 決まってるでしょ？ ”

“それは、お兄ちゃんが、
“L o k i”だっていう、何よりの証・
・・・・・！”

石井 未来の言葉が、ルナ・ドームの深部で、本部で、日本のさま
ざまな場所で響く。

当然、正田の所でも。

“石井 哲が“L o k i””

正田を含めた、44人が拳を握り締めた。

第三十九話

この瞬間（後書き）

へ、“予想通り”だって？

知・る・かつ！（ー）

さてさて、突っ走っていきますよ！

第四十話

聞こえるか・・・・・・・・・・?

「こっの、馬つ鹿野郎!!!!!!」

久しぶりに腹の底から怒鳴った。未来が衝撃を受けたようにびくつと動いた。

「未来、今それを言う必要あったのか!? お前なら、気付いてたんじゃないのか!？」

「・・・・・・・・・・え・・・・・・・・・・?」

次の一言を言う前に、コンピューターのモニターが変わり、“South - Pore”の顔が現れた。

“もう遅い、哲君”

「・・・・・・・・・・南、さん・・・・・・・・・・?」

未来はまだ状況を理解できていないようだ。

「・・・・・・・・・・やつぱ、あんたもスパイだったんですね、南機長」

“残念だな、哲君、スパイが一人とは限らない”

「残念だな。俺はあんたを気に入ってたのに」

南は、人を見下すような笑みを浮かべた後、後ろを振り返った。

“石井哲・・・・・・・・” “L o k i”を確認した。作戦を実行する”

そして再び僕を見る。

“ここからゆっくり見物させてもらおう。君の死を、ね”

「残念ですねえ。カメラの故障みたいですよ。・・・・・・・・ついでに盗聴器もね。また後で会いましょう」

南の嘲笑が画面に映る前に、この部屋中に仕掛けられた盗聴器、監視カメラが破壊された。

未来、姉貴、“O d i n”が動いてくれたのだ。が、そんなことにかまってる暇はなかった。僕は皆にくるりと向き直った。

「南はさっきの毒ガスで俺たちを殺すつもりだ。防護服がそこに3着と、奥に2着ある。そいつを着て脱出する。姉貴と未来と“T a r s i e r”はこの箱ん中のを着てさっさとここから出る。俺と“O d i n”は奥のやつを着てすぐに行く。分かったな？時間がねえ、急げ！」

みんな僕の指令通りに動いてくれた。未来が何か言いたそうな目をしたが、首を振って黙らせる。

「後で聞く、とにかく急げ！」

僕と“O d i n”が防護服を取りに行く振りをする中、3人の足音がバタバタと遠ざかっていった。

耳を澄ましていた“Odin”が、ほっとため息をつく。

「・・・・・・・・行つたな、哲」

「悪い、巻き込んでしまって・・・・・・・・」

彼はひょいと肩をすくめた。

「気にすんな。それに、まだ、可能性が消えたわけじゃねえ」

僕はため息をつきながら微笑んで、モニターを覗き込んだ。

モニターに、三つの点が映っている。その点が、この施設の見取り図の上を滑らかに移動していく。

その三つが“ある点”を通り過ぎた後、ひとつのキーを叩き、この場所を封鎖した。

そして、点が立ち止まったあたりの監視カメラを指導させ、唯一残った“糞ガキ”の“耳”を取り出した。

「未来、聞こえるか・・・・・・・・？」

自分でも驚くほど、静かな声だった。

第四十一話

“生き残れ”

三人　未来、詩織、“Tarsier”　のすぐ後ろでも
のすごい音が鳴り、廊下が壁に変わった。三人とも急ブレーキをか
けて、立ち止まる。

「「「・・・・・・・・・・・・？？」」」」

と、未来が右耳を押さえる。

「お兄ちゃん!？」

詩織の直感が、彼女に警告を発した。

「未来、それ、こっちにも聞こえるようにして」

未来は不安そうに頷き、スピーカーにつながかえる。それと同時に、
石井　哲の声が廊下に響き始める。

“・・・・・・・・聞こえてるみたいだな。こっちにスピーカーはない。
一方的に喋るから、黙って聞けよ”

「・・・・・・・・・・・・？」

未来は詩織を見ていた。詩織がスピーカーを睨みつけているのを。

“いいか？後二分もすれば、この建物はあのガスで満ちる。だけど、
“ルナ・ドーム”の内部全体となれば話は別だ。少なくとも一時間

はかかると思う。その間に“奥の方”の連中と一緒に本部に攻め込むんだ。出来れば走りながら聞いてくれ”

「……………だつて。いこ！」

未来はさっさと走り出す。声は続けた。

“本部の司令室とは反対側にガスの解毒剤が保管されている。それを“F・F”メンバーに配るんだ。本部も司令室以外にはガスが満ちている。お前ら三人が行くしかないからな。じゃあ、気をつけるんだぞ”

この時、彼女は急に立ち止まった。すぐ後ろの“Tarsier”が慌てて未来をよける。

未来は気がついたのだ。

この廊下が封鎖された意味に。

姉が兄に向けた怒りの意味に。

兄の、妙に静かな声の意味に。

「・・・・・・・・お兄ちゃん？・・・・・・・・聞こえてるんじゃないの・・・・・・・・？」

哲のため息が聞こえた。

“・・・・・・・・やっぱりばれたか”

未来は無意識に天井に問いかけた。

「お兄ちゃん、お兄ちゃんはどうするの・・・・・・・・？」

“・・・・・・・・ある可能性を信じる”

「・・・・・・・・まさか、防護服が・・・・・・・・？」

明るい声が返ってくる。

“ご名答。ここって不親切だからさ、三つまでしかなかったって訳よ・・・・・・・・まったく、せめて四つは欲しかったな”

「・・・・・・・・」

未来は驚愕した顔で何か言いたげに口をパクパク動かしていた。しかし、声が出てきていない。

「・・・・・・・・哲、もう一発ぶん殴ってやるから」

詩織が監視カメラを睨む。

哲が笑う。

彼は笑い終わると、再び静かな声で未来に言う。

“未来、親父と同じ、月並みな言葉だけど、言っとくぞ。……”

プツッ

未来の“耳”が壊れた音がした。

第四十二話 それがルールだろ？

盗聴器を握りつぶした直後、“Odin”は難しい顔でこっちを見ていた。

「あいつら、どこまでやれっかね？」

「さあ、な」

監視カメラを見やると、未来が僕が封鎖した壁を殴りつけて、何か叫んでいた。

次の瞬間、姉貴と“Tarsier”が駆け寄り、その腕を掴んで、引きずり始める。

姉貴は未来を怒鳴りつけ、キッと監視カメラを睨んだ。隠しカメラであるはずのこっちを。

「・・・・・・・・悪い、姉貴」

「・・・・・・・・アメリカ映画ならよかったのにな」

「何？」

「ほら、アメリカ映画なら、主人公と相棒は絶対死なない。それがルールだろ？」

僕はすぐに反論する。

「いやいや、相棒が死んで、その弔いのために主人公が奮闘するつてのがベストだろ？」

「あ、ナルホド！……主人公は俺だよな？」

「バカ！“L o k i”の俺を差し置いて何が主人公だよ！」

「ああ？主人公が“L o k i”本人でした！なんてオチを誰が期待すんだよ！」

二人して声を出して笑った。が、場違いな笑いは、瞬く間に過ぎ行く。

「………現実………」

「暗い部屋に二人だけ、“死”を待つて………」

「………ガスの名前、“P a n i k h i d a”^{パニダ}は、死者が神の許しを得られるようにする祈りらしい」

ギリシャ語で、“夜を徹して歌う”“徹夜の祈り”。

正教会で、死者のために行う祈りのことだ。

「へえ………名前の割りに、死に方が汚いな」

僕は頷く。

「だから、観客に退場してもらったのさ」

一瞬の沈黙。

「哲、まだ諦めんなよ？俺等には……………」

「“可能性”がある」

そう、穴も穴、大穴でも、俺たちは賭けた。

大逆転のチャンスはある。

「フ！」

「おいおい、鼻で笑うなよ」

「“Odin”、ヒーローなら生き残るさ。だけど、俺達はどうじゃねえ。だろ？」

「……………そうだな……………」

俺達はまた笑った。後、十数秒だ。

「……………せいぜい、“ブッチ・キャシディ”と“サンダース・キッド”、だよ」

この名前を知っている人は少ないだろう。

あるアメリカ映画の主人公達だ。

“O d i n”はラストシーンを知っている。

だからこそ、穏やかに笑って頷いた。

その映画の題名は、“明日に向かって撃て！”

時間だ。

第四十二話

それがルールだろ？（後書き）

“明日に向かって撃て！”のラストを知っている方でしたら、この意味分かってくださると思います！（多分）

え？ “そんな古い映画知らない” って？

“分からない奴の方が多い”？

作者からは一言だけです。

“全員観ろ！”

“そして意味を悟れ！”

後書きにまでお付き合いいただき、ありがとうございましたm（

— — ）m

第四十三話

あれは・・・・・・・・

建物の中に、空気の漏れる独特の音が響き渡る。

“シュー・・・・・・・・シュー・・・・・・・・”

防護服を着た三人は、もう出口のすぐそばに来ていた。気を失っている未来を、“Tarsier”がおぶっている。

「・・・・・・・・・・それにしても、見事な一撃でしたね・・・・・・・・・・詩織さん」

そう、いつまでも駄々をこねる妹にちよつと“キレた”詩織は、何のためらいもなく彼女の首筋に手刀を食らわせたのだ。

「・・・・・・・・・・」

“Tarsier”は沈黙に耐えかねて、さらに声をかける。

「そういえば、哲君の言ってた“可能性”って何なんでしょうね？もしかして、助かるかも・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・あのガス・・・・・・・・・・」

詩織は暗い声で言った。

「食らった奴を何人も見た．．．．．死亡率百％で、死に方も、醜い。だから哲は私達を締め出したんでしょうね」

“Tarsier”はその言葉の響きに吞まれ、足を止めた。普通じゃ有り得ないほどの力がこもっていたのだ。

「．．．．．行こう。弟の遺志を継がなきゃ」

詩織は悲しげに付け足した。

本部司令室

「P an i k h i d a」、順調にドームを満たしていています」

南は満足そうに頷いた。

「パニヒダ．．．．．？」

葵が呟くと、南は再びこちらを向いた。

「新たに開発された毒ガスだ。効果は．．．．．まあ、見てもらえば分かるな」

彼は底意地の悪い笑みを浮かべ、モニターのスイッチを切り替えた。

「．．．．．？」

無残に荒らされた薄暗い部屋が移っている。床で何かが動いている。

「あれは・・・・・・・・・・」

「そう、君達がいた、メイン・コンピューター室だ。これじゃ見にくいな。斉藤をアップにしろ」

まもなく、一人の男がコードでぐるぐる巻きにされてもがいているところがモニターに映る。

「この部屋にも、“P a n i k h i d a”が満ちてくる。そうすると・・・・・・・・・・」

南は残忍な笑みを浮かべた。

“う・・・・・・・・・・”

「ほお、斉藤が気がついたようだ！」

“・・・・・・・・・・なんだ、この音は・・・・・・・・・・?”

葵は目が離せなくなっていた。恐怖の表情のまま、画面を見つめている。

「このガスは、空気より軽い。だから、床にいるこいつらに届くのは時間がかかるが……………」

斉藤が呻いた。

そして、激痛からくる叫び。

「見るな！」

隼が葵に叫んだが、彼女は動けない。

斉藤は、叫びながらもだえている。その時、ブチッという音がした。その瞬間から、彼の動きが小さくなる。

「腱が切れた音だ。まったく、うるさい男だな、あいつも」

そして、最後に、斉藤は声に出来ない叫びを出したようだった。息も止まってしまった中、目を見開いて口を何か動かしている。

彼はその表情のまま、大量の血を吐き出し、事切れた。

葵はもちろん、翔も隼も顔面蒼白となっていた。

斉藤は苦しみの表情で白目をむいている。

南だけが笑った。

「心臓が破裂したんだ。どうだ？すばらしい技術だろう？」

血まみれの斉藤を背景にしているせいかもしれない。

南の目の中の光は、狂気に染まっていた。

第四十四話

まだ、終わらねえんだ

翔は顔面蒼白のまま、顔をゆがめた。

「・・・・・・・・・・殺人だ」

南はさらに笑う。

「大いなる意志には付き物の、小さな小さな犠牲だよ」

隼も無理に唇を吊り上げた。

「ずいぶんご機嫌だね、南さん。さっきこそその部屋を出て行ったときに、何かいいことでもあったのかい？」

「そう、その通りだ。ビクニユースだぞ」

隼は鼻で笑い、“ワービククリダヨ”と片言で葵にささやいた。彼女は弱弱しく笑う。

「“L o k i”の正体が判明した」

途端、葵も隼も翔も目を見開いて、身を乗り出す。

「・・・・・・・・・・石井 哲が、“L o k i”だったのだ」

「ええ！？」

驚いたのは葵一人だった。あとの二人は、動きも言葉もシンクロしていた。

すぐにつまんなそうな顔をして、後ろの壁にどさつと身を預ける。

「・・・・・・・・なんだ、やっぱりそうか」

南も葵も“・・・・・・・・え？”という顔をしている。何とか動揺からさめた葵は、二人を覗き込んだ。

「何、二人とも知ってたの？」

「一番可能性高いのはあいつだ」

「技術、考え、悪戯心」

「・・・・・・・・まあ、言われてみれば・・・・・・・・」

遅まきながら、自分のペースを取り戻した南が三人を見下した。

「ふん、だが、これは知るまい。“L o k i”はその他諸々とともに、“P a n i k h i d a”の餌食だ」

「え・・・・・・・・？」

「貴様らもさつき見ただろう・・・・・・・・？あのようにして“L o k i”は最期を迎えるのだ・・・・・・・・！」

南は、みるみる青ざめる葵を見て満足しかけたが、残りの二人が薄笑いすら浮かべているのを見て、寒気を覚える。

「……………おっさん、じゃあ、そいつを拝ませてくれよ」

「そつだ。“L o k i”の最期とやらを」

南は無言で生意気な高校生連中を睨む。

「出来ないんだろ、南サン」

翔は挑戦的に彼の目を見返す。

「哲か未来にぶっ壊されたはずだ、カメラだの盗聴器だのは」

南の唇に力がこもる。

「あんたは“確認”できない。“L o k i”がホントに死んだかどうか」

隼も強気な笑顔を見せる。

「まだ、終わらねんだ。あんたや、タヌキンジイ正田サンの思い通りになると思っなよ」

南は怒り心頭といったところで、言つべき言葉が出てこないらしい。

と、モニターが切り替わる。

「司令官！シャトルが、消えました！」

「なに！？」

翔がニヤツと笑った。

「もう、とつくにルナ・ドームを離れてるよ。俺達の仲間と、ここに送り込まれた人たちはね」

南はゆっくりと翔に向き直る。

「しかも、あんたらのレーダーに映りはしない。少なくとも、あの人たちを助けた。って面では、俺達の勝利です」

南は自分に言い聞かせる。

“まだ、もうひとつの方はばれていない。大丈夫だ”

「……………せいぜい足掻くがいい。今の君らに何ができる？縛られ、監視され、全ての力を奪われた君達に」

南は演技が下手な男が、強がって笑うかのよう
に笑い、その部屋を出て行った。

だが、葵は知っていた。この部屋は監視されていないことを。

彼女はポケットの中の携帯電話サイズの機械をそつとなる。

かつて、哲の胸ポケットに入っていたそれは、既にこの部屋の監視
の“目”や“耳”を、破壊していたのだ。

第四十五話

落ち着け

部屋に葵、翔、隼だけになり、三人はほっとため息をついた。ほぼ同じタイミングで、翔と隼が縄を切る。

隼はごろりと仰向けになり、目を閉じた。

「目、耳は無いにしても、やっぱりコンピューターが無けりゃ、やることねえな」

「・・・・・・・・・・そうね」

「・・・・・・・・・・いや」

翔はすくつと立ち、隼を見下ろした。

「・・・・・・・・・・お前の話を聞くことぐらいは出来るだろ？」

「・・・・・・・・・・俺の・・・・・・・・・・話？」

葵も座ったまま隼を見る。

「思い出した。“地球の半分を吹っ飛ばせる核爆弾”が・・・・・・・・・・」

「ああ、それか」

隼はむくりと起き上がる。

「単純な話なんだけど……………」

ガチャ

南が図ったかのようなタイミングで入ってくる。隼はそれで口をつぐんでしまった。南は既に切られて床に転がっている縄を見つけ、呆れたように言う。

「……………まったく、君らはおとなしくすることが出来るのかね？」

翔は肩をすくめる。

「別に何もしやしませんよ。窮屈なのが嫌いだけで」

「……………まあいいだろう。それより……………」

“南司令官^{さん}！！”

南の背後の壁がモニターに切り替わった。ひどくあせっている若い軍人が映し出される。南は遮られたのが不愉快だったようだ。

「……………なんだ？騒々しい」

“受刑者達の蜂起です！！正確な数は不明ですが、相当な数な様です！！”

南はちらりと三人を見たが、格別あせっているようには見えなかった。

「落ち着け。相手の武器は？」

“どうやら、わが軍の武器を横流したものがいるようです！”

「ふむ。恐らく、ここにいるお三方の仲間だな」

南と違い、若い軍人は滑稽なほど動揺している。

“どうなさいますか！？”

「落ち着けといっている。どうせ、彼らには武器はあっても、防具が無い。時間稼ぎさえ出来れば、全員“P a n i k h i d a”の餌食だ」

南はにやりと笑った。

「確実に勝つ勝負。じっくり詰ませるとしよう」

翔は内心あきれ果てていた。

“勘違いも甚だしい・・・・・・・・・・相手の駒をたくさん取れば勝てると思ってやがる”

もちろん、そのほうが有利になることは否定しない。

だが、大事なのは、チェック・メイト。

キング
王を取るのが第一だ。

ほかの駒は、そのための捨て駒でしかない。

“・・・・・・・・・・そーいや、この考えは哲に教わったんだっけ”

翔は、自分も捨て駒のひとつかもしれないな、と呟いた。

第四十五話

落ち着け（後書き）

ご無沙汰いたしやしたm（―――）m

パソコンの調子がよくありませんで……………

直ったわけではありませんが、またがんばってまいりますf（^――^；

第四十六話

勝利を得た顔

南は見せ付けるつもりなのか、三人がいる部屋で指揮を取っていた。小憎らしいほどに冷静に、的確な指示を飛ばしている。

「よし、近藤の隊は正面を。東谷は右手を固める。追う必要は無い。あと、5分もすれば、“P a n i k h i d a” が満ちてくる」

明らかに、無謀な反乱だった。若い軍人をうるたえさせた情報は、ほとんどがはったりだったようだ。

彼らには武器も、人数も、道具も、ごくわずかで、翔たちの目には、戦略すらないように見えた。

正面から幾人かのグループが徒歩で突撃し、軍の集中砲火の前に倒されるか退却させられるかを繰り返し返していた。

“……………哲は何を考えてんだ？”

翔は思った。

“あんなやり方じゃ、皆死ぬただぞ……………？”

南が三人を振り返った。

「・・・・・・・・君達の仲間は思ったより考えが無いな」

三人ともモニターに映る戦いの様子をじっと見ている。また十数人が殺された。

「そろそろタイムリミットだ・・・・・・・・総員、防護服を確認しろ！」

スピーカー越しに次々と確認が完了したことを知らせる声が聞こえる。

「よし・・・・・・・・そろそろだな」

軍のほうからの銃声が途絶えた。それで、受刑者側が時の声を上げ、あちこちの壕から飛び出す。

と、その時、先頭を走っていた男が、見事に転んだように見えた。

まるで喜劇のような、笑いを引き出しそうな転び方だ。

その後ろの面々も、同じように倒れる。

だが、それは笑いから程遠かった。

葵は口を手で覆い、目をぎゅっと瞑る。

“ やめて・・・・・・・・やめて・・・・・・・・!! ”

その時、感度の良すぎるマイクが受刑者達の断末魔を拾い、部屋の空気を震わせた。その声を聞き、葵の肩がびくくと動く。耳をふさいでも、無駄だった。

長く尾を引いた叫びは唐突に、パタツと止まり、後には背筋を凍りつかせる沈黙が残る。

葵は恐る恐る目を開けた。モニターには、うつぶせのまま動かない、何十人もの死骸が映し出されている。

“ひどい..... ”

ふと、葵の目が、何か動くものを捕らえた。

「え？」

「・・・・・・・・どうした？」

「あの、真ん中の・・・・・・・・」

彼女が指差したところが、ちょうどアップにされる。

一人の男が映しだされた。

歯を食いしばり、前に向かって這っている。

「あの男・・・・・・・・」

南も驚愕している。

男は静寂の中、そこからさらにゆっくりと進む。前だけを見て、ゆ
っくりと。

50cm。

1m。

1m50cm。

男はついに力尽き、がくりと頭をたれる。

「・・・・・・・・なんて奴だ・・・・・・・・」

しかし、まだ彼は死んでなかった。

地面に突っ込んだ顔が少しずつ上がり、彼は正面を
つまり、
カメラがある方向をまっすぐに見た。

南は寒気を感じる。

“・・・・・・あの目には、何か、確信がある”

男はさらに、にやりと笑ってみせる。

彼の顔を見た誰しもが思った。

“あれは、勝利を得た顔だ”と。

男は、その表情のまま、突っ伏すように息絶えた。

反乱は失敗に終わった。

彼らは、全滅した。

第四十七話

“ e d ” を外せ

静まり返った部屋の中に、正田首相からの通信が入った。

“ 南、無事か？ ”

正田は、口先だけで言っているようだ。心配している様子が全くない。完璧に無表情だ

南は、まだショックから立ち直っていない。

「 はい。ちょうど今、受刑者達を鎮圧したところで
す」

“ そうか。 “ P a n i k h i d a ” の出来はどうだ？ ”

「 殺傷能力は、十分すぎるほどです」

南がぶるつと体を震わせるのを、正田が冷たい目で見ていた。

“ あれはまだ実験段階だ。問題点が多い ”

「問題点・・・・・・・・ですか？」

“ああ。血清が至極簡単に・・・・・・・・いや、そんなことを話してきたのではない。南”

「はい」

““e d”を外せ”

「！？」

“こちらは既に動き始めている。すぐにかかれ”

「・・・・・・・・了解しました」

通信が切れた。

そのあとすぐ、南は足早に部屋から出て行った。

隼は片膝を立てて座り、壁に寄りかかっていた。頬を膝につけ、何か考え込んでいる。

「・・・・・・・・隼？」

「・・・・・・・・・・一か八か、賭けてみるか？」

葵はひざを抱えて座っていたが、急に明るい顔になった。

「何？何するの？」

「・・・・・・・・・・さっき、あのおっさんは、ここで指令なんかを出してた。ってことは」

隼はガバツと立ち上がった。そして、さっきモニターに変わった壁の前まで行き、そこをノックした。

「・・・・・・・・・・てことは？」

「ここに、コンピュータがある可能性が非常に高い」

「でも・・・・・・・・・・」

葵は“ あったとしてもどうしようもない ” というようなことを言おうとしたが、途中でやめた。

「・・・・・・・・・・なにやってんの？」

隼が壁に何かをくつつけていた。切手のような大きさの箱だった。

「・・・・・・・・・・下がってたほうがいいと思うな」

翔が遠慮深げに言った。

「・・・・・・・・・・行くぞ。Three、Two・・・・・・・・・・」

「だから、何って・・・・・・・・・・」

「One、Zero」ボン!!!

「キャアッ!!」

爆発音がしたが、どちらかというと、葵の悲鳴の方が大きかった。

「おい、盗聴器壊したからってあんまり騒ぐなよ」

「爆弾なら爆弾って言ってよ!!」

二人は哀れむような目で葵を見た。

「・・・・・・・・・・なに？」

「・・・・・・・・・・はあ・・・・・・・・・・」

「ちよつと!!」

隼の爆弾は、壁に腕が入る程度の穴を開けていた。

“・・・・・・・・・・よし”

彼は躊躇い無くその中に手をつ突っ込む。

「・・・・・・・・隼？」

「こーいう機械^{モン}は、大体この辺に・・・・・・・・」

人差し指が何か硬いものに触れる。

そつとなでて、形状を確認する。

“・・・・・・・・違うな・・・・・・・・これか？”

三個目の突起が“それ”だった。

隼はそのボタンを押し、素早く手を引き抜いた。

途端に壁がモニターに代わり、キーボードがどこから出てくる。

「すい・・・・・・・・」

「さて、奴らは何をするつもりなのかねっと」ポン！

翔と隼は画面を指差しながら、次々と操作を進めていく。

“私の出番は無い、かな・・・・・・・・”

葵は反対側の壁に寄りかかり、ぼんやりと画面を見つめていた。

大体5分後。画面に、三つのアルファベットが並んだ。

“ P・T・P ”

葵はぼんやりと思った。

“・・・・・・・・？なんかどつかで・・・・・・・・”

「ピーティーピー
“ P・T・P ”？いつたい何の・・・・・・・・」

葵は無意識のうちに口走った。

「・・・・・・・・“ People Tempted Providence ”・・・・・・・・」

「え？」

二人は驚いて振り向いたが、一番びっくりしているのは葵だった。
目を見開いて、床を見つめている。

「・・・・・・・・人々は神意に逆らった・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・神意・・・・・・・・・・？」

パチ！

部屋の電気が消えた。

パシュウ・・・・・・・・・・

コンピューターの電源も落ちる。

三人とも驚愕の表情のまま、辺りを見回す。

“ばれたか・・・・・・・・・・？”

幸い、そうではなかった。

ルナ・ドーム中の電力が、一瞬止まっただけのことだ。

そう、ほんの一瞬だ。

だが、その一瞬で、地球との通信は途絶えた。

第四十八話

いや、まだある

地球

物語は、筒井と羽下、“F e n r i r”と“L o g i”の会話に戻る。

「正田を暗殺!?!」

「ああ」

筒井はコンピューターの電源を引き抜いた。

「おい!?!」

「あいつが“L o k i”である保証は無い。それから……………」

彼はポケットの中にある手帳のような形の機械のスイッチを入れた。

「……………これで盗聴の心配は無い。さて、協力するか否か」

「……………こんな面白そうなことに、俺が参加しないわけが無い」

筒井は、笑顔の羽下を横目に見ながら、“確かに”と呟いた。

「で？その頭ん中に出来た構想を聞かせてもらいましょうか？」

「・・・・・・・・・・簡単な話だ。正田を居場所を探り出し、頭を打ち抜く。恐らく、それで“お偉いさんの壮大な計画”は止まるはずだ」

「・・・・・・・・・・なあ、そいつあいつたい何なんだ？お前には分かってるのか？」

「・・・・・・・・・・さあな。ただ、推測することは出来るだろう」

「・・・・・・・・・・」

「よし、整理してみようじゃねえか。俺達が知っていることは何だ？」

「1、“L o k i”はいい加減な糞野郎」

羽下が笑いながら言うと、筒井がそれをたしなめる。

「馬鹿、真面目に考える。1、正田は何かでかいことをたくらんでる」

「2、その“でかいこと”で、世界の半分、下手すりや全部がくたばる。生物も含めて、だ」

「3、あの“L o k i”が危機感を覚えている」

「4、一部のお偉いさんは生き残る」

「といったところか？」

考え込んだ羽下は、ついに“解答”を見つけた。パズルのピースをいや、むしろ、パズルの完成図を見つけたのだ。

「……………いや、まだある。5、情報が“L o k i”にとって武器になっていない」

「何だと？」

筒井は驚愕の表情でゆっくりと立ち上がった。羽下の頭の中で、パズルのピースがはまり始める。

「そうだろ？“L o k i”は全てを握っているはずだ。でも、今回はそれをどこからもらそうとしない」

「……………詩織経由で広げるつもりだったのかもしれない」

「おいおい、女刑事経由でどうやって広めるんだよ？そんなことするより、マスコミの本部に叩きつけた方が手っ取り早いし、あいつは今までそうして来た。例の自動車会社のリコール隠しも、IT企業の先駆けの社長がとっ捕まったのも、プロ野球界の薬がらみのうわさも、元はといえば、あいつがマスコミをどうにかして動かした結果だったろ？」

「……………まあ、確かに……………」

筒井は明らかに齒切れが悪い。しかし、羽下はかまわず続ける。

「今回に限って、それをしない。なぜだと思う？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「出来ねえんだ！パニック、暴動が起こるからだ！」

羽下は目を輝かす。難易度の高いパズルを完成させた子供のように。

「でも、遅かれ早かれ分かるんなら・・・・・・・・・・」

「いや、気付いたときには全てが終わってるんだ」

彼は怪訝な顔をした筒井に何かを耳打ちした。

「・・・・・・・・・・なるほど・・・・・・・・・・そうすると・・・・・・・・・・
やはり、正田の暗殺が急務だな・・・・・・・・・・」

羽下は“元・相棒”の目の中に、驚きがまったく無いことに気付いた。そして、悲しみが見えたような気がした。

何故だ？

羽下は思った。

昔通りだろ？ちょっとでっかくなっただけのこと。

また俺達が“お偉いさん”の裏をかけるってのに、こいつは何にお
びえてやがるんだ？

だがしかし、羽下は疑ってはいなかった。

第四十九話

そっくりか？

筒井は自分の計略を、羽下に説明し終えた。

「……………正田の行動パターンは分かっているから、そこを狙う。異議はあるか？」

筒井は無機質に言う。羽下は呆れたように笑った。

「なあ、相棒。もっとリラックスしろよ。それじゃ、最初の仕事ん時とそっくりだぜ？」

「……………最初？いつの話だ？」

「さあ？詳しくは覚えてねえけど、ドジ踏んだってのは確かだ」

筒井は笑いをこらえた。

本当にこいつは変わっていない。良い意味でも、悪い意味でも。

そうか、思い出した。

確かに、俺達の初仕事は大失敗だった。

羽下^{コイツ}の“でかいことやろう”の一言で、やることになった、ささやかな情報戦争だ。

俺達は、某超大国が長きに渡って隠蔽し続けてきた“K氏暗殺事件”の重大な情報を盗みだし、全世界に公開することを計画した。

そんなことやったところで、一文の足しにはならないし、寧ろ危険の方が大きかったが、俺達はやった。ただ単に面白そうだからという理由で。

思うに、羽下のペースに巻き込まれていただけなんだろう。

だけど、それでおおむね、成功しかけた。

自画自賛になるが、計画は完璧だったし、あと一步で資料を盗み出すことが出来た。

まったく気付かれない内に、だ。

だがしかし、その国で作業に取り組んで一ヶ月。

俺達は敗北した。

あと数十秒で情報の取り込みが完了するといったところで、急にコンピュータの電源が切れた。もっと言えば、電化製品全てが止まった。

後で分かったことだが、その“某超大国”が、国中の電力を停止させるという荒業をやったのだ。

しかも、電力が回復したときには、情報管理システムは物理的にネットワークから切り離されていた。

まったく持つて信じ難いことに、奴らはこっちの居場所まで掌握しかけていた。

ギリギリでそれに気付いた俺達は、ほうほうの体で日本に逃げ帰ったのだ。

あれはまさに踏んだり蹴ったりだ。

あの時に似ているとは……………

「……………そっくりか？」

大真面目に頷かれてしまった。

「ああ。あの頃に比べて、俺達の相手は小さくなってるんだぜ？あいつらに比べりゃ、我が祖国なんかちょいおちのちよいだろ？」

「……………お前の祖国は日本じゃないって」

羽下はアメリカ国籍だ。

「細かいこと気にすんなよ！じゃ、電話かけるぜ？正田様によ」

羽下は歯を見せて笑った。

筒井は、そういえば、あの時も今と同じような気持ちだったな、と思った。

第五十話

論外だろ？

羽下は電話をかけている。

「・・・・・・・・もしもし？総理頼まあ」

“・・・・・・・・名前も言わずに“総理頼まあ”は無いだろ・・・・・・・・”

筒井の懸念をよそに、電話は正田につながる。

それと同時にモニターに彼の様子が映し出された。

“・・・・・・・・何かつかめたのかね？”

スピーカー越しに聞こえる声は、機嫌が良いわけではないが、不機嫌にも聞こえなかった。

「いや、全く。だが、あんたに報告があるんだ。俺達は、あんたを暗殺することにした」

正田の顔色がすぐに変わる。何故か、筒井が舌打ちをした。

“・・・・・・・・それは・・・・・・・・君等の宣戦布告になるのかね？日本に対する・・・・・・・・”

「……………いいや。“正田賢治に対する”
宣戦布告です」

正田が叫んだ。

“その両者に違いはあるのか！？……………よし、いいだろう。君等が平和に暮らせる時間は終わった、と言うわけだ”

正田は電話を一方的に切り、ものすごい勢いで携帯を壁に投げつけた。羽下はモニターを見ながら口笛を鳴らした。

「すげえ怒り方。その両者の違いが分かってないから、あんたは終わりなんだよ」

盗聴器から聞こえる正田の命令により、二人は“国家反逆罪”などという、訳の分からない罪状で警察に追われることとなった。

「“国家反逆罪”と来たか。よし、もういいだろう」

筒井は映像と音声を切った。

「あの正田は危険を察すると、自分の巢にこもる。その場所は……………」

「例の地下シェルターだな。何でも核ミサイルが直撃しても耐えられる構造とか言ってたか？」

筒井はスペックを思い浮かべながら答える。

「……………そうだ。今の最高の技術を駆使していて、理論上

では、耐えられる。その上、食料品なんかの備蓄もかなりのもので、1、2年は中にいても大丈夫らしい。運動設備なんかもそろっていて、もはや避難所という域を超えてるんだとさ」

「そーいやあれはホントなのか？例の遊園地の地下の空間に隠されているってのは」

例の遊園地というのは、千葉にあるにもかかわらず“東京”と名乗っている世界規模の某有名テーマパークのことである。

「ああ。世界中にある上、もともと地下空間があつたらしいから、極秘でいろんな場所で作るのに都合がよかったらしい」

「ああ、そういう都市伝説あつたな」

羽下は感心したように言った。

「・・・・・・・・・・そうだな。さ、進入路だ。調べられたか？」

「ああ・・・・・・・・・・一つ。馬鹿馬鹿しいが、ランドの隠し店舗からは入れるとか・・・・・・・・・・」

「何なんだよ、あそこは？」

「さあ・・・・・・・・・・？二つ目。地下鉄の線が繋がってる。こっちはちょっと苦しいな。地下鉄はいつでも監視カメラが回ってるし、駅員もしっかり見てやがる」

「・・・・・・・・・・三つ目は？」

「・・・・・・・・官邸から行く道がある。論外だろ？」

二人は顔を見合わせ、にやりと笑った。

第五十一話

奴の裏をかいてやる

筒井が腕を組んでシエルターの図面の向き合っていた。モニターの中で、立体の図面がぐるぐる回っている。

「……………セオリー通り考えると、やっぱりこの隠し店舗からが一番安全だろうな」

筒井がモニターを指で叩くと、ソファで寝転がっていた羽下が身を起こした。

「ああ。完全に封鎖するなんて出来っこないし、人目に触れるところからシエルターまでの距離も短い」

「……………それに、奴らは俺達を逮捕したいんじゃない。始末したがつてるはずだ。警察を使って堂々とやるわけにも行かない」

二人は目を合わせて頷いた。

場所こそ違えど、正田側もほぼ同じタイミングで計画を練っていた。

立体映像として映し出された図面の前で正田と司令官らしい軍人がしゃべっている。正田はボタンを押し、あるルートを色付けして表示した。

「恐らく、奴らはこの隠し店舗のルートから侵入してくるだろう」

軍人が答える。もう若くはないようだが、姿勢、眼光、体つき、口ぶり、全てが力みなぎっている。

「そうなるど厄介すな。一般人の無数の目の前で、大々的に動くことも出来ませんから」

正直なところ、正田にとって、一般人の目などもうどうでもいいことだった。だが、そういつて勘付かれるわけにもいかない。とくに、この男には。

「・・・・・・・・そうだな。何か案は？」

「ええ。シェルターの中に隠れるのをやめたらいかがですか？」

「何？」
“・・・・・・・・コイツにだけは・・・・・・・・”

「シェルターの中に“Ragnarok”の部隊を待ち伏せさせるというのは・・・・・・・・？」

正田は頭を振った。内心脅威を感じながら。

「だめだ。それは・・・・・・・・ルール違反だ」

「は？」

「・・・・・・・・とにかく！私はあの中で待機している。それは変えん！」

軍人は正田をじっと見たが、それ以上追求しようとはしなかった。

「・・・・・・・・・・では・・・・・・・・・・やはり、入り口を固めるしかなさそうですね。奴らも馬鹿ではない。官邸からのルートを使うことはまずないでしょう。残り二つに集中して守りましょう」

正田は曖昧に頷いた。

正田は、この計画を完全に遂行するに当たって、“L o k i”以外にも3人、“脅威”とみなしたものがいる。

一人は死に、もう一人は月にいる。

そして、最後の一人がこの軍人である。

名前は三浦 和輝だ。

羽下が指を鳴らした。

「と、まあ、俺達がそう考えるってあいづらは思っているだろうな」
筒井はにやりと笑った。

「そうだな。お偉いさんの頭は、セオリーか前例通りにしか働かないからな。俺達は」

正田はため息をついた後、立ち上がった。

「君らはそうやって常識で考えた作戦を繰り広げてくれたまえ、私は」

羽下、筒井、正田の声が、空間を越え、見事にかぶる。

「『奴の裏をかいてやる』」

第五十二話

簡単すぎる

軍は二人が侵入する可能性のある二つのルートを完全に包囲した。

が、外から見ただけでは、全く気づけないだろう。

狡猾に準備された罠。

後は、獲物が飛び込んでくるのを待つだけだった。

残念ながら、獲物は彼らの想像以上に賢かったわけだが。

羽下と筒井は、警備の手薄い“官邸ルート”を使用して侵入していた。

当然、こちらのルートにも監視カメラや、少数の兵はいるが……

「監視カメラの映像、止めたぞ」

「よし、陽動作戦、開始だ」

軍の張り込んでいるルートのそばで爆発音が鳴り、煙が上がった。当然兵士達からは見えないが、彼らの無線機に通信が入る。

“ Aルートに応援要請！！奴らが現れた！”

「おい！」

「ああ！」

彼らは軍用車に乗り込み、即座に立ち去った。

二人は堂々と官邸の正面から中に入った。

「あいつら、あんな簡単に引つかかって、将来が心配だなあ？」

筒井は肩をすくめた。

「心配ないさ。むしろ、最高の兵士になれるかもしれない」

「何で？」

「兵士つてのは、命令どおりに動けばいい。頭なんてないほうがいい」

二人は中をずんずん進んだ。

隠し通路も簡単に開け、地下のスペースにもぐりこむ。

全く何の障害もなく、だ。

流石に羽下が呟いた。

「……………簡単すぎる」

「ああ。これは恐らく畏だ」

筒井はさりとて言う。

「……………畏？どんな？」

「まあ、恐らく、俺達を始末する仕掛けがあるんじゃないかな？」

羽下の舌打ちが響く。

「んなことあ分かってんだよ！どついう風にそうするかを聞いてんだ」

「馬鹿か、お前は。そんなことは正田に聞け」

筒井は地下道をすたすた歩いていった。羽下は毒づきながら、その後ろについて歩いていった。

そう、あの時と、状況がそっくりなのだ。

筒井は初仕事のことを思い出していた。

違うのは俺達が狙う獲物が、現実世界リアルにいるか、ネットワーク上のバーチャルバーチャル仮想世界にいるかというだけだ。

一見何の障害もないルートの上に、狡猾な罠が仕掛けられているところも。

まあ、あの時、俺は失敗と引き換えに“報酬”を手にしたわけだが。

アメリカ政府は、何が自分にとって危険なのか、どうすればそれを回避できるかの判断が鋭敏だった。

彼らは闇を闇の中に保つことに成功し

俺は“ちょっとした”金を受け取った。

当時、俺にとっての“でかい事”とは、でかい金以外の何物でもなかった。

アメリカ政府にとって、“闇”の露呈は混乱を生み、自らの破滅を意味した。

つまり、丸く収まる理想的な取引がなされたわけだ。

俺は友人をほんの少し騙すだけで、向こうは有り余る金のほんの一部を渡すだけで、目的を達成出来た。

妙に重なるのだ。

第五十三話

そこまでだ、“相棒”

二人はシェルターにたどり着いた。

入り口を開け、中に入ると、正田 賢治が真正面に座り、退屈そうに頬杖をついていた。

「……………ずいぶんと時間がかかったな。お前達も大したことはなさそうだ」

「……………正田、自分の命が少し延びた分を喜んだらどうだ？」

羽下は既に銃口を正田に向けていた。だが、正田は表情を動かさない。

「……………“話せば分かる”とはいわねえのか？」

「そう言えば、“問答無用！”と撃たれるだろう。羽下君」

「……………」

羽下は、正田の“余裕”の正体につすつす勘付いていた。

だから、大して驚かなかった。

“あの時”も、だ。

絶妙すぎるタイミングで奴らが反撃を開始したのにも、“相棒”が妙に潔く逃げることを選んだことにも、驚かなかった。

もっと言えば、ばれる筈のない俺達のプロジェクトがばれたことにも。

ただ、“相棒”は知らなかった。

俺があゝの“国家機密”をとつくの昔に盗み出していたことを。

張り巡らされたセキュリティも、複雑な暗号も、意味を成さない。

“見えざる敵”……“Phantom Menace”
にとっては、そんなものに等しいのだ。

“Phantom Menace”という名前も俺しか知らない。

その存在に気づく者すらいないからだ。

だから、あのプロジェクトは単なる試験紙に過ぎなかった。

筒井に用意すべき餌は何なのかを見るための。

そう、筒井は多額の金を受け取る代わりに、俺の動きを敵にばらした。

つまり、だ。

奴を釣るのに、特別なものは何もいらぬ。

ただ、奴が満足するだけの金があればいい。

それを把握したからこそ、その後の“仕事”は大体が“成功”を収めた。

正直、一人でやれば、誰にも気付かれる事なく、全ての仕事を終えられたのだ。

多分、俺もまだまだ修行が足りなかった。

俺は、誰かに気づいてほしかったのだ。

俺の力を示したかった。

だから筒井を組み、わざわざ気づかれるように動き、無駄にセキユリティーに引っかかってもみたのだ。

俺は数年間ずっと筒井と組み続けた。

自分のアホさ加減に気づくまで、ずっと。

あいつとのコンビを解消してから　つまり、俺が“Phantom Menace”に戻ってから、五年が経った。

それでも、“相棒”のやりそうなことは手にとるように分かる。

“正直者がいつでも正直とは限らないが、裏切る者はいっただって裏切る”

だから、驚きやしない。

筒井が銃を俺の後頭部に突きつけても。

「そこまでだ、“相棒”」

背中になにやら硬いものが当てられる。

俺はさっさと手を挙げ、降参のポーズをとった。

「そうらしいな。 “相棒”」

やっぱり、そう来たか。

. ところまでは、
“奴”の予想通り。

第五十四話

決まってるだろ？

筒井は羽下から拳銃をもぎ取り、弾を抜いて床にばら撒いた。

「・・・・・・・・念入りだな」

「油断大敵、というじゃないか」

当然のことながら、正田はご機嫌だった。筒井は黙ったまま“相棒”の両手に手錠をはめる。

「念の入れすぎじゃねえか？流石に手錠は必要ないだろ」

「いいや」

正田は自分の目の前にあった書類をぺらぺらめくった。

「勘違いするな。君は警察官によって、逮捕されたんだ。法に基づいた正式な逮捕だ」

「そりゃありがたいね。判決が下されるまでは、死ぬ心配がないってわけだな」

羽下の皮肉っぱい言葉は無視された。正田は黙ったまま書類に目を通している。羽下の個人情報 筒井さえも知らない、極秘なものも含まれている が記されたものだ。

「・・・・・・・・アメリカ国籍の男が、日本国総理大臣を暗殺しようとして官邸に押し入りました」

正田がぴくりと反応した。羽下は満足そうに笑い、アナウンサーのようなしゃべり方をさらに続けた。

「幸い、首相は無事、男は現行犯逮捕されました。しかし男はアメリカ中央情報局、いわゆる“CIA”が関係していることをほのめかす供述をしており、日本政府はアメリカ政府に関連を問い合わせています”……………といった流れだな」

「貴様……………まさか……………??」

「なんだ、あんた、国家機密が漏れてないとも思ってたのか？ましてや、“アメリカ合衆国”のトップも絡んでぐたぐた企んでるんだぜ？この“Phantom Menace”が、見逃すはずがないでしょうが」

「……………“Phantom Menace”??」

筒井が、銃口を羽下に向けたまま、一人で呟いた。羽下は先程までと同じように、いたずらっぽい笑みを浮かべ、肩越しに彼を向いた。

「知らなかっただろ？俺の本当の名前^{コードネーム}」

「……………それどころか、そんな名前、聞いたこともない」

「当然だ。それこそ、本当の“見えざる敵”^{ファントム・メナス}。世界に存在さえ知らせぬまま“仕事”をなす。究極のクラッカー……………あ、これ、俺のことだぞ？」

「……………君の名前などどうでもいい」

正田はいらだたしげに書類を机の上に投げた。

「……………君が何を知っていようと、今、君に何が出来る？そこでおとなしく、“終わり”を見ている」

羽下は声を上げて笑った。

「ハハ！おとなしく？この俺が？」

「黙ってる！」

彼は背後で筒井が銃を構える音を聞いても、まだ笑みは消えなかった。

「ツツ、この最期の戦争の後、お前の懐にある金に何の価値がある？」

「……………」

「もっと言えば、お前が生きていられるかさえわかんねんだぜ？」

筒井は、静かに銃口を下ろした。そして暗がりにはため誰にも見えなかったが微笑んで見せた。

「そもそも、この世界に価値はない、そうだろ？」

「出た出た。勘弁してくれよ……………」

正田は二人を無視し、ルナ・ドームとの通信を開始していた。羽下もやはり、正田を無視した。

「お前にとって無価値でも、俺達にとっちゃそうじゃない。だから・
・・・・・」

正田は軍人らしき男がモニターに写ると、間髪入れずにたずねた。

「南、無事か？」

まるでこちらには注意を寄せていない。

「・・・・・俺と、“究極のハッカー”が手を組んだ。あの正田^{シジイ}を止めるために！」

「究極の・・・・・ハッカー・・・・・？」

「決まってるだろ。“^{キツネ}Loki”だよ」

羽下の浮かべた屈託のない笑み。それを見て、筒井は顔を曇らせる。

彼は知っていた。

“Loki”は“Panikhida”の餌食となっただけである
ことを。

どうすることも出来ない。

ルナ・ドームに毒ガスが満たされたのは、3時間近く前のことなのだ。

正田が言った。

「“e d”を外せ」

もう、誰にも止められない。

第五十五話

全くだ

「さて、いよいよ大詰めだ」

通信を終えた正田は、無表情なままで呟いた。言葉の隅に、ここま
で来た疲れが一瞬にじみ出た。が、一瞬緩んだ気持ちには、羽下の一
言で再び引き締められた。

「・・・・・・・・・・“People Tempted Providence”」

「・・・・・・・・・・何!？」

羽下は相変わらず笑みを見せていた。

「知ってたんだよ、俺達は」

「・・・・・・・・・・!!」

正田は何とか冷静さを保とうとしていた。羽下が続ける。

「人々は神意に逆らった」。この言葉が意味するのは、1945
年、8月6日、9日に原子爆弾が投下されたこと。そうだろう?」

正田は黙ったまま動かない。

「……………“edを外せ”の意味も簡単だ。“People Tempted Providence”から“ed”を外せばいい」

「……………“人々は神意に逆らう”……………」

筒井は静かに銃口を上げた。無感情なロボットのようない話しかたでさらに続ける。

「“核兵器を再び使う”という意味だ」

羽下は再び自分に向けられた銃口をちらりと見た。

「……………“前回”と違うのは、一発の威力の高さと、双方からミサイルが発射されるってこと。そうだろ、ツツ？」

一瞬の沈黙が肯定のサインだった。筒井は正田が告げた言葉を繰り返す。

「……………“人類から不純物を取り除くため”、だ」

「分かってないな、ツツ。これは“粛清”なんてレベルじゃない。コイツの考えてるのは、人類を滅ぼし絶やすことだ！！」

羽下はイライラと反論したが、筒井の無機質な態度は全く変わらない。彼は見下すような調子で答えた。

「だからどうした。もう、止められやしない。お前は正田の手の中

にいるし、“L o k i”だって……………」

「だから、正田にすがって生きようとしても？」

自身を遮った言葉に、筒井の顔がぴくりと動く。羽下の目は注意深く彼を観察していた。ついで、がっかりしたような顔になり、肩を落として見せた。

「……………図星か。全く、“F e n r i r”ともあろうものが、そんなにも“生”にしがみついているとはね……………
・みつともない」

「生きることにはがみついて何が悪い！それは人の性だ！！！」

筒井は猛然と怒鳴った。が、羽下の落胆は深くなる一方だ。

「……………吠えるなよ。余計に空しくなるぜ」

「全くだ」

冷たい声がした直後、一発の銃声が響いた。

彼の名前は筒井 幸一。もしくは“F e n r i r”。

表側では真面目で、善良な人間だ。今も、昔も。

しかし、裏側はまるで違う。

彼は友人を売った。

兼を売った時に得た報酬は多額の金だった。

彼は恋人を売った。

詩織を売った時に得た報酬は“Ragnarok”における地位だった。

彼は全世界を売った。

正田が約束した報酬は筒井自身の命のはずだった。

だが正田は突然、^{クライアント}支払うものを変更した。

今、まさに彼の頭を貫いたもの。

そう、一発の銃弾が、彼の最期の報酬だ。

筒井 幸一は、床に倒れるよりも前に事切れていた。

第五十六話

“ハティ”

「・・・・・・・・・・何故だ、正田」

羽下は正田の顔をじっと見つめていた。額から血を噴出している筒井には目もくれない。

「なんてことはない。そろそろ彼に退場してもらうつ予定だった、というだけだ」

彼はモニターを起動し、なにやら作業を進めていく。羽下は聞かすにはいれなかった。

「・・・・・・・・・・正田、お前は勝つつもりでいるのか？」

正田は一瞬、動きを止めた。しかし、その次の言葉の無機質さから考えると、ただ、作業が終わった瞬間だったというだけかもしれない。

「静かにしている。大統領から通信が入った」

「・・・・・・・・・・」

羽下はごく自然に右手を上げ、異議がないことを示した。

この二人の会話は聞かなくても分かる。

正田が“CIAエージェントと思われるテロリスト”について大統領にまくし立て、大統領は大統領で“発射準備が整えられた核ミサイル”についてわめくのだ。

羽下は筒井の脇にしゃがみこんだ。

「……………馬鹿野郎が。何で正田なんかを信じた。これじゃ、詩織に申し訳がたたねえだろうが」

彼は“Fenrir”のまぶたを閉じてやってから立ち上がり、吐き捨てるように言う。

「あいつは、お前の目を覚ますって息巻いてたのによ……………」

彼はふと筒井の銃を拾い上げ、胸ポケットに納めた。そして、左手にぶら下がってる手錠を右手にもはめなおし、大統領が映っているモニターに目をやった。

“……………これ以上、ニッポンの暴走を許すわけには行かない。1時間以内に武装を解除しなければ我々は“核”をつかう”

「そちらの国のテロリストについては何の説明もなく、いきなり宣戦布告とは……………そちらの強硬な姿勢はあるまじき行為だ。覚悟を決めておくんですな」

通信は切れた。

待ってましたとばかりに、羽下が嘲る。

「……………ハハ、茶番は終わったのか？」

「いや、これから始まるんだ」

正田は再びモニターを起動する。通信相手は、三浦 和輝だった。

「三浦司令官。君達は何をやっていたのかね？羽下はここまでやすやすと進入して来たのだが？」

三浦は無表情のまま、頭を少し下げる。

「申し訳ありません。どうやら、羽下は私どもより何枚か上手だったようです」

正田は不服そうに鼻を鳴らした。

「この次は、まともに働いてくれるのだろうか？」

「……………了解しました」

「早速だが、先程、“ルナ・ドーム”の“南司令官”が反乱を起こした」

「……………はい？」

三浦は目を丸くした。

「厄介な事に、あそこには大量破壊兵器が“いくつか”備わっている。そこで、先手を打ってこちらからあれを破壊する。すぐに“ハティ”発射準備にかかれ」

「しかし……………」

「説得にかける時間はない。一刻を争うのだ」

「……………了解、しました」

正田は通信をきった。

正田が描いたシナリオはこうだ。

ルナ・ドームからのミサイル“レーヴァテイン”がワシントンを、アメリカからのミサイル“ゼファール”が東京を、日本からのミサイル“ハティ”がルナ・ドームを襲い、世界の大掃除が始まる。

何度目の“大戦”かなんて気にすることはない。間違いなく“最後”なのだから。

一人残らず、破壊の渦の中で息絶える。

最初の一撃をややくしくした理由はいくつかある。

一つ。三浦 和輝だ。

彼が“始まる”前に気づいたなら、この計画は絶対に阻止される。
三浦はそういう人間なのだ。

だから、彼を通してアメリカ合衆国にミサイルを放つわけにはいかなかった。だから、三浦の命令下にはない部隊を形成するために、“ルナ・ドーム”を用いたのだ。

二つ。日向 政史だ。

彼は物事の中から出来るだけ遠くにやる必要があった。これは大統領からの要望でもあった。

“彼がいたなら、私達の企みは見抜かれてしまう”ということらしい。

だから。彼を“ルナ・ドームのトップ”という名目で月に送り込んだのだ。

三つ。安全な逃げ道を用意するためだ。

もし、仮に計画が途中で失敗に終わっても、正田に罪は降りかからない。

正田が直接命じるのは、凶悪な反乱分子が占拠したルナ・ドームを破壊するということだけなのだ。

世界は、着々と“ラグナロク神々の黄昏”に向かっている。

その前に訪れるのが“フィンブルヴェト”と呼ばれる、3度も続く恐ろしい冬。

この、3発の核ミサイルだ。

第五十七話

・・・・・・・・最低

ルナ・ドーム

翔と隼は、電力が回復したら5分後には、目当ての情報を手に入れた。

「よし、準備良いか？」

「・・・・・・・・・・ホントに“メインコンピューター室”に戻るの？」

葵は心底嫌そうな顔をしている。

「・・・・・・・・・・俺だって正直行きたくねえけど、ここはあまりに危な過ぎる」

「分かってるけど・・・・・・・・・・」

「都合よく、防護服もガスの探知機も“ここ”にあるし、大丈夫だよ」

この部屋の床下には、その二つのみならず、食料、武器、無線など、

必要なものは全て隠されていた。

「都合よすぎる・・・・・・・・・・ちょっとは怪しまないの？」

葵は気に食わなかった。この危険のにおいがぷんぷんする状況も、全く同じタイミングで吹き出した“男ども”も。

「・・・・・・・・・・何よ??」

「あのさあ、哲から、“罨に対する対処法”教わんなかったの？」

「全然。・・・・・・・・・・教えて？」

“男ども”は顔を見合わせ、再びニヤツと笑った。

「きつと何とかなると思って」

「迷わず罨に、身を投げろ！」

葵は興味を持ったことを後悔した。そんな彼女の表情がまた可笑しかったらしく、翔と隼は大笑いしている。

「・・・・・・・・・・馬っ鹿じゃないの？」

この冷たい一言で、二人は急に神妙な顔になった。

「まあ、それは冗談として、ここにいるより外のガスの中にいた方が安全なんだよ」

実際、三人とも、いつ南に殺されてもおかしくない状況にあるのだ。

それには、葵も同意せざるを得ない。ただ、どうしても、畏にかかりにくいという行動には賛成できなかった。

「でも……………」

「くどいねえ、君も」

隼が困った顔で言う。

「信用しろよ。俺も、翔も、^{コイツ}全くの馬鹿って訳じゃないんだからさ」

「……………考えがあるなら教えてよ」

葵は憂鬱そうに言ったが、隼は茶化すように返すだけだった。

「それじゃ、面白くねえだろ？」

葵が目を限界まで細めて彼を睨んだが、結局何の答えも返ってこなかった。

“ 哲そっくり ”

あえて声には出さなかった。

葵にとって残念なことに、通るルートも哲と同じだった。

つまり、薄汚い通気孔である。

“・・・・・・最低”

「え？なんか言った？」

「・・・・・・別に」

二度目だろうと“慣れる”ということはない。

葵の“不機嫌”のオーラを感じ取った二人は、黙って先へ進んだ。

ところで、これは罨だった。

すぐに命を奪うための罨ではないが、確実に三人を使えるものにする罨だ。

南は彼らの動きをしっかりと把握していた。

確かに、三人は彼らを見張るための盗聴器、監視カメラを破壊できる。

だが、彼らを追尾するのに全く手段が無いわけではないのだ。

そう、彼らに仕掛けられた“旧式の発信機”は、何事もないかのよう
うに信号を送り続けていた。

第五十八話

埒が明かないな

南は薄笑いを浮かべながら、ルナ・ドーム“本部”の地図を見ていた。

点滅する三つの点が“メイン・コンピューター室”へと向かっている。

「全く、愚かだ」

彼がそう呟いた時、司令室の扉が開き、日向 政史が怒りに震えながら入ってきた。

「・・・・・・・・・・南」

「日向議員」

南は敬礼をした。が、蔑むような目のおかげで、敬意は微塵も感じられなかった。

「今すぐ作戦を中止しろ」

日向の言葉には何か込められた力があつた。静かで、尚且つ力強い、命令だった。

「残念ですが、それは出来ませんな」

南の言葉には、可能な限り侮蔑の響きが含まれていた。敬意の込められていない敬語ほど、人の神経を逆なでするものも少ない。

「“非常時”に司令官に命令を下せるのは、首相お一人ですので」

日向は目をつぶり、空気を深く吸った。そしてその息を吐くと同時に目を開ける。“覚悟”をした目だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それでは、強硬手段をとらざるを得ない。動くな、南」

相変わらず日向は冷静だった。恐ろしいまでに。南は表情をこわばらせた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何のつもりですか？」

「私は今、特殊爆弾の起爆スイッチを握っている」

南はむなしでの日向を胡散臭そうに見つめた。それに気づいた日向は両手を広げて見せる。

「言葉のあやだ。．．．．．その特殊爆弾には、“ルナ・ドーム本部”を破壊するだけの力がある」

「．．．．．ほう」

南は正田の予想が完璧に的中しているので驚いた。

「それで？どうなさるおつもりですか？日向議員」

「．．．．．もう一度言っ。作戦を中止しろ」

「それは脅迫ですか？」

「．．．．．そうだ」

「状況の整理をしましょう。今、日本とアメリカの間で戦争が始ま

「つた。私たちが生き残るには、“撃たれる前に撃つ”しかない。私はミサイルの発射の全権を任されていて、貴方はそれを阻止しようとしている。貴方は特殊爆弾をどこかに隠し持ち……………」

「南の目が鋭く日向を観察した。彼が知りたいのは、特殊爆弾が“何処に”あるのか、ということだけだった。」

「……………作戦を中止しなければそれを爆破させる、というわけですな」

日向の目が南をじっと見つめた。真意を推し量るように。

「……………概ね、正しい。ただ、生き残るための考えが間違っているだろう」

「貴様の理想論を聞くつもりはない。その脅迫に屈する気も」

「南……………?」

南の声の温度が明らかに下がった。

「特殊爆弾はどこにあるのだ？」

「・・・・・・・・・・作戦を中止しろ」

日向の表情がぐっと険しくなる。南はついに嘲りを前面に出して笑った。

「全く、埒が明かないな」

彼は先程まで見ていた地図を指差す。

「この、点滅している光が何か分かるか？」

日向は怪訝な顔でそれを見た。ルナ・ドームの地図であることは分かったが、三つの光が何をさしているのか、見当もつかなかった。

「・・・・・・・・・・なんだ？」

「貴様の娘と、その仲間がここにいる」

日向の体がびくりと動く。南は勝ち誇った顔で彼を見ていた。

「彼らは“P a n i k h i d a” 防護服を着て、メインコンピューター室に向かった。何かをやらかすつもりらしい」

日向は内心ほつとした。少なくとも葵は“防護服”を着ている。

「・・・・・・・・・・それで？南」

「失礼、言い間違えた」

南の唇がめくれ上がった。

「“防護服”だと持っているものを着ている”だった。彼らが着ている服には、“P a n i k h i d a”を防ぐ力はない」

日向の顔から血の気がうつせる。勝ち誇った南はさらに続けた。

「娘の断末魔が聞きたくないのなら、大人しく在り処をはけ」

日向は両拳を握り締めたまま、地図上の点滅している三点をじっと見つめ続けていた。

彼の中の相對する二つの思いがせめぎあっていたのだ。

南は歪んだ笑みを浮かべ、その様子をずっと見ていた。

第五十九話

．．．．クソッ

「．．．．．南、作戦を中止しろ」

日向は顔をしかめたまま繰り返した。

「．．．．．状況の把握が出来ていないらしいな？」

南は明らかに日向を見下していた。

「貴様、自分の娘を殺すつもりか？」

「．．．．．南、本当に葵はそこに
いるのか？」

日向は南をじつと睨みつける。が、彼には動揺や焦りは微塵も感じられなかった。

「．．．．．良いでしょう。日向さん．．．．．
おい」

南は部下を呼び出した。

「はい」

「日向氏に、“向日葵”の声を聞かせて差し上げる。確か、最新型のは壊されなかったと思うが？」

「はい。了解しました」

実に機械的な男だった。

「・・・・・・・・・・最新型？」

「盗聴器だ。奴らは隠された盗聴器を破壊する手段を持っているのだが、最新型のだけは破壊を免れている」

「ほう・・・・・・・・・・それで・・・・・・・・・・」

“プツッ”

この部屋のスピーカーが動き始めた。

“・・・・・・・・・・翔、なんか、変な音、しない？”

葵だった。

“ 変な音？・・・・・・・・これ・・・・・・・・空気
漏れる音じゃねえのか？ ”

“ まさか、ばれた！？ ”

緊縛する葵の声とは逆に、隼の声は落ち着いていた。

・・・・・・・・途中までは。

“ 安心しろよ、俺達には・・・・・・・・！？ ”

隼の苦しそうな呻き声。倒れる音。

“ 隼！？ ”

“ 伏せろ！！！！ ”

翔が叫んだ。

“ P a n i k h i d a ” は上から満ちてくる！！ ”

“ で、でも！私たち、防護服を・・・・・・・・ ”

“ 嵌められたんだ!!!!!! ”

隼の歯を食いしばる音が聞こえる。彼は叫ばなかった。

“ テメエ ら
 . ! ”

“ 隼! ”

“ 部屋から 出る
 ! 早く ! ”

ブチィ!!!!!!

ドサ

“ 隼!!!!!! ”

“ 行くぞ、葵 ”

“ でも ! ! ! ”

“ 早く!!!!!! ”

葵は唾を飲み込んだ。

二人が床を這う音。

ガチャ！！

“駄目！！ロックされてる・・・・・・・・！！！”

“・・・・・・・・クソッ”

直後、葵が息を呑んだ。

“グ・・・・・・・・！！！”

翔が呻く。

葵が悲痛な叫び声をあげた。

“・・・・・・・・あおい・・・・・・・・！！！”

二人の声はぱたりとやんだ。

後には凄まじい静寂が残された。

息を吞んで耳を澄ましていた日向は呆然と膝をついた。

「葵・・・・・・・・・・？」

「まだ、助かるも知れないぞ。今貴様が爆弾の在り処をばけば、すぐに彼女を治療して助けてやろう」

南は相変わらず冷たく笑っていた。

だが日向は知っていた。

“P a n i k h i d a”を無効化する手段はガスに触れる前に解毒剤を打つしかない、ということ。

今、ガスの中に倒れた葵を助ける手段はない、ということ。

日向は顔を上げた。

憎悪の表情だった。

彼は怒鳴った。

「DAMN IT」！！！」

実のところ、特殊爆弾は彼の体内に仕込まれていた。

そして、この罵りこそ、起爆スイッチだったのだ。

日向は南を睨みつけながら、頭の中で最後の十秒をカウントした。

第六十話

全てはこの時のために

爆弾はルナ・ドームごと正田の計略を吹き飛ばすはずだった。

だが……………

「……………」

爆弾は爆発しなかった。

日向は驚愕の表情で腕時計を確認する。それは爆弾のスイッチが入った瞬間に残り時間をカウントするようになっていた。

もちろん、通常では何の表示もされていない。

確かに、爆弾の起爆装置は起動していた。

「……………なんだと!？」

“ 00秒 ”

時計にはそれしか表示されていなかった。

勝ち誇った冷たい声がする。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうやら、不発のようすな、日向議員」

南は再び部下を呼んだ。先ほどの機械的な男がやはり機械的に入ってきた。

南はたじろぐ日向を指差した。

「この男が作戦の妨害工作を企てた。逮捕しろ」

「は！」

男は敬礼すると、ポケットから手錠を取り出し、日向の後ろに回る。切り札を失ってしまった日向はおとなく手錠をかけられるしかなかった。

が、彼の目はまだ死んでいない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・南、このまま終わると思うな・・・・・・・・・・
・・！」

日向の言葉に、南は再び歪んだ笑みを見せた。

「そうか・・・・・・・・・・・・・・・・おい」

南は日向に手錠をかけ終えた部下に声をかける。

「はい」

「日向議員を“メイン・コンピューター室”までご案内しろ」

「!？」

驚く日向を尻目に、軍人は頷き、彼の腕を掴んだ。

「自分が引導を渡した娘の、苦痛の表情をとくと拝ませてやれ」

南は勝ち誇った顔で、血の気の失せた日向を見ていた。

日向は引きずられていきながらも、何か言おうと口をパクパクさせていたが、結局何も言葉が出てこなかった。

日向は負けたのだ。

正田の恐れていた人物が4人いた事は既に話した。

その4人とは、言うまでもなく“L o k i”。

そして、全ての設備を作った男、石井 一。

軍人の中の軍人、三浦 和輝。

最後に、この日向 政史だ。

今、正田たちはその全てをかわし、ミサイル発射に踏み切ろうとしていた。

アメリカで、

東京で、

そして、月、“ルナ・ドーム”で。

全てはこの時のために。

この三発のために。

ミサイル発射まで……いや。

世界の終わりが始まるまで、5秒

4秒

3秒

2秒

1秒

第六十一話

そんな、馬鹿な

ミサイルの発射ボタンが押されたとき、アメリカ、日本、ルナ・ドームにいた兵士達は、世界が終わったのだと感じた。

突然、目の前が真っ暗になり、永遠に光が失われたように思えたからだ。

これが、“神々の黄昏”、“ラグナロク”なのだと。

だが、すぐに何かがおかしいと気づく。

それは、自分の呼吸音だったり、時計のバックライトだったり、隣の同僚の気配だったりしたが、明らかに彼らは生きていた。

世界が終わったのに、自分達だけ生き残ることなどあり得るだろうか。

大多数が自分の手を顔に当てている頃、電力が復旧した。

次々と再起動するモニターや、計器類の明かりが彼らの目を眩ませる。

しばらくしてから、彼らは何が起こったのかを把握する。

かつて大国は、“F e n r i r”と“L o g i”を止めるためだけに、国の電力を全て止めるといふ暴挙に出た。

そして今、ミサイルを止めるために、軍の設備だけが電力を奪われたのだった。

三つの場所で。

予備電源に切り替わり、制御コンピューターが再び動き出したとき、事態はさらに悪化する。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！？制御コンピューターが・・・・・・・・・・・・・・・・
・・！！？」

“それ”は暴走を開始したのだ。

人がどれだけキーボードを叩こうと、電源を絶とうと、それは止まらなかった。

「まずいぞ……！」

彼らが叫んで制御を取り戻そうとしている間に、それは全ミサイルの発射準備を整えていく。

ほんの数分間の出来事だった。

男達が必死に行った作業も虚しく、死を無限に積んだミサイルは飛び去っていく。

本当の世界の破滅。

各地の歴戦の司令官達は絶望し、頭を抱えて座り込んでしまった。

ただ一人、南を除いて。

彼は画面を睨んで立ち尽くしていたが、コンピューターの暴走が止まったことを直感的に知っていた。

彼は落ち着いた声で命じた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・着弾点はどこか調べる」

彼の言葉に我に返った兵士が、調査を開始する。南にはそれがとてもおろく感じられたのだが、実際はほんの一瞬だった。兵士は即座に報告した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・判明しました。着弾点は　あの短時間でなされた計算が正しければ、ですが　太陽です。全弾、太陽に向かっています」

南は目を閉じ、拳を握り締めた。

彼は、他の場所でも同じ事態となっていることを知らなかった。

だから思った。

日本は焼き尽くされるが、アメリカは無傷だ。

これでは過去の戦いと殆ど同じではないか、と。

彼が目を開けたちよつどその時、背後で声がした。

「安心しろよ、南さん」

その声に、南の筋肉が一瞬で硬直する。

そんな、馬鹿な。

第六十二話

またお会いしましたね

ここ最近、かなり面白いことが多かった。

それでも、今の南の顔は一、二を争う面白さだ。

彼はよろよろと後ずさる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！？石井 哲・・・・・・・・・・・・・・・・！？」

「またお会いしましたね、南サン」

幽霊を見たかのような顔の南に、僕は穏やかに言った。

「ちなみに、俺は幻ではありませんよ」

「何故だ！？お前は“P a n i k h i d a”の中に・・・・・・・・・・」

「あのガスにも、弱点があるってだけです。そして、俺と“O d i n”の運も良かった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

南は有能な人物だ。この短い間に、落ち着きを取り戻しつつある。
“Odin”も生き残ったことを知らされても、余計なことを言わないように自分を押しとどめている。

「あれの弱点は二つ。空気中では一時間しか持たないことと、死んだ人間には何の作用もないってことです」

彼がじりじりと動き出したのには最初から気づいていた。でも、僕は話し続けた。

「この二つを結びつけば、どうすればいいのかは見えてきます。俺達は、ガスが存在する一時間の間だけ、死ねば良かったです」

何かを狙っている南も、この言葉には関心を持ったようだ。

「なんだと？」

「この薬を使いました」

僕は胸ポケットから、黒と白のカプセルを取り出した。これは、人を仮死状態に陥らせる薬。いや、その表現は間違っているかもしれない。

人を限りなく死に近付ける薬だ。

“Tarsier”は“戻ってこれない可能性”を危惧していた。

実際、俺も“Odin”も“逝き”かけた。

「・・・・・・・・・・一時間半、呼吸、鼓動、思考を停止させ、生き残れた、というわけですよ」

「必殺の、死んだ振り作戦、というわけだな」

南は急に皮肉っぽい調子を取り戻した。僕は再び笑いをこらえなくてはならなかった。あまりにも見え見えだ。

「そう、ですね。ところで、俺が言った“安心しろ”って意味、分かりました？」

「いや、全然だ。哲君」

今や彼は勝った気でいた。思い切りこちらを見下している。

「あんたらの計画は完全に潰れたんですよ。今回、人間に向けて発射されたミサイルは一発もありません」

「・・・・・・・・・・なるほど」

悪い癖だと思う。南はいつも、“チェック”と“チェックメイト”が別であることを忘れるのだ。

その上、盤面に自分の駒が多く見えたというだけで、自分が優位だと思っている。

彼がかけた“チェック”は、自分の部下を呼び出すことだった。

僕にとって見れば、それは予想通りの手だった。

どうでも良いかもしれないが、この長々しい化かしあいの勝負^{ゲーム}も、そろそろ“詰み”だ。

僕は笑顔を見せた。

「この勝負、俺の勝ちです。南サン」

南はそれを嘲笑った。

「どうかな？」

その瞬間、この部屋のドアが蹴破られ、武装した男どもが乱入してきたのだった。

第六十三話

“詰み”だ

勝ち誇った南は、“それ”に気づくのが一瞬遅れた。

武装している7人の銃口が、全て自分に向いている、という事実。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

つりあがっていた唇の端が徐々に下がり、目が見開かれていく。

彼は暗視用のゴーグルで顔を隠した男達を順番に見た。

疑惑が確信に変わり、さらにそれが驚愕に変わる。

「まさか・・・・・・・・・・！！？」

僕のすぐ横にいた男が、にやりと笑って銃をおろし、ゴーグルを取った。

「はじめまして、“South-pore”」

「“Odin”!?!?”」

残りの6人も次々にゴーグルを取る。

詩織^{アネキ}、未来、“Tarsier”、そして翔に、隼に、葵だ。

「そんな・・・・・・・・!?!?貴様らは・・・・・・・・」

隼は自分の足を見た。

「ちゃんと足ついてるよな。どうやら死んじやいねえみたいだぜ？」

「ありえない!貴様らは確かにあの部屋に・・・・・・・・!」

「いたのは確かだね」

未来が楽しそうに笑う。

「でもね、南サン。どんな毒にだって、解毒剤はある。それを忘れ

ちやいけないね」

未来はしっかり仕事をこなしたのだ。

僕が頼んだ、“F・F”メンバーに解毒剤を配る”という仕事を。

誰一人、死にはしなかった。

南が聞いた悲鳴にしたって、単純な話だ。

あの盗聴器は、壊せなかったのではなく、断末魔を聞かせるために残されただけだったのだ。

「うちの馬鹿兄貴が言ったの、聞いてなかったんでしたっけ？ “相手が聞こえるものをコントロールできる” ですよ、私たちは」

未来は例の携帯電話サイズの機械を取り出した。

彼女はこれの“達人”だ。極めているといっても過言ではない。

僕には、雑音や静寂を“聞かせる”ぐらいしか出来ないが、未来は会話や声、物音まで混ぜた“音”を作り出す。

想像もしたくないが、人間の耳をごまかす様な“音”は、いったいどれほどのデータ量なんだろう。天文学的な数字になるのは、まず間違いない。

そのくらい人間の聴力は繊細だし、デジタルデータってモノは雑だ。

それをいとも簡単にやってのける未来は、正直、人間とは思えない。

人間離れた少女が、にっこり微笑む。

「お分かりですかね、南サン」

その時、部屋の扉が開き、一人の男が入ってきた。

南の敗色はさらに濃くなる。

「・・・・・・・・・・日向・・・・・・・・・・！」

日向政史は少々青ざめている。

「・・・・・・・・・・南・・・・・・・・・・」

二人はじつとにらみ合った。

いや、南の憎悪の視線を日向が静かに受け止めていた、とでも言うか。

「・・・・・・・・・・南。正田と話がしたい」

「無理、だ。地球との通信はとくに途絶えている。犯人は分かっているがな！」

思い切り睨まれた僕は肩をすくめる。

「とつくに回復させましたよ。もう両国にミサイルはありませんし、ルナ・ドームの兵士達も制圧させてもらいましたし、ね」

制圧、というか、無力化、というか。計画通りなら、“Tarsier”の催眠ガスが全兵士を眠らせたはずだった（でも、例外がある。日向をメインコンピュータ室に連行した二人は、詩織の手刀の

餌食になった）。

とにかく、南には、動かせる駒が一つも残っていなかった。

敵の“キング”を倒すのではなく、全ての手駒を奪い、敵の勝機を完全に0にすること。

これもある種の“チェックメイト”。

“詰み”だ。

第六十四話

それだけです

完全なる敗北を喫した南には、もはや選択権などなかった。

彼はモニターを起動させ、地球との通信を始める。

程なく、正田の顔が画面に映る。

“・・・・・・” “L o k i” か？”

「はい。石井 哲です」

正田は深々とため息をついた。

“全く、余計なことをしたものだ。大人しくしていれば、気づかないうちに蒸発していたのに・・・・・・”

「・・・・・・残念だが、まだ死ぬときじゃないんでね」

“それで“L o k i”、どうするつもりかね？”

正田は皮肉っぽく言う。

“私を殺しても、貴様らが犯罪者となるだけだ。国民は総理大臣が殺されたことを知るだけで、私の計略のことは何も知らない”

「・・・・・・・・・・」

正田が笑う。

“貴様らが命を助けた馬鹿どもは、どんな態度を示してくれるだろうな？”

「・・・・・・・・・・なめんなよ、正田」

“Odin” だった。

「俺達がヒーロー願望に取り付かれて、あんたらを止めたと思っているのか??」

“そうでなかったらなんなのだね？ヒーロー気取りであったことぐらい認めたらどうだね？”

「正田サン。俺達はヒーローって柄じゃないですよ」

僕は愛想良く笑った。

「ただ、黙って死ぬ気はなかった。それだけです」

正田と僕の視線が一瞬絡まり、彼からの憎悪がどつと送られてきた。

「それで・・・・・・・・どうするか、でしたよね？」

正田は黙っていた。

「俺達はあなたを殺すことはしません。そんなことに意味はありませんからね」

“それで？”

「これ、なんだか分かりますか？」

僕は黒いメモリーを見せた。

これこそが、正田を破滅させる、僕の切り札だ。

「何だそれは？」

それまで黙っていた日向が、この時ばかりは口を開いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・この計略がどんなもので、どんな戦いがあったのかが詳しく書いてあります。書いてないのは、俺達の実名ぐらいいです。全てが書かれているといっても大丈夫な資料です」

正田が青ざめる。これは、正田を社会的に抹殺できる代物なのだ。

“・・・・・・・・・・・・・・・・それをマスコミに公表するというのか・・・・・・・・・・・・・・・・！？”

「そうです。これであなたは終わりだ」

正田はどさつと背もたれに寄りかかった。

うつむいた顔に影が入り、表情は全く読めない。

しかし、彼は唐突に笑い始めた。

“クッククク………！！！！”

「おい、おっさん！何がおかしい！！」

“Odin” がすごんでも、笑いは止まらない。

“ウツハツハツハ！！！”

僕らが見つめる中、敗北したはずの男は笑い続けた。

その様子は、不気味以外の何物でもない。

「狂ったのか………!？」

隼は心配そうに画面に映った男を見上げている。

違う。

正田は狂ってなどはない。

彼は切り札を見つけたと思っている。

僕の“メモリー”という切り札を打ち砕く切り札を。

男は笑い続けている。

第六十五話

このクソヤロウ

“君の手は、それで終わりかね？哲君”

正田は勝ち誇っていた。相変わらず、“正田側”の方々は単純だ。

南も、斉藤も、そして正田も。どいつもこいつも、すぐに勝ったと思ひ込む。

「……………あなたに対する手は。これでチェックメイトです」

僕は“あなたに対する”の部分我非常に強めて言った。が、正田はそれに気づかない。

“残念ながら、チェックメイトにはまだ早い！”

「そうですか？まあ、最後の時間をゆっくりと楽しんでください」

段々とうんざりしてきた僕は、一方的に通信を切った。

振り返ると、一同が怪訝そうにこっちを見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

「あ、忘れてた」

ぽんと手を叩いた詩織が、つかつかと近づいてきて、ほんの半歩ほどの間合いを取って止まる。

「・・・・・・・・・・・・何を？」

何の前振りもなく、僕は右の頬をぶん殴られた。一瞬身体が宙に浮くほど強烈に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・！！！」

したたかに背中を打ち、倒れたまましばらく声も出せない。

グイッと胸倉を掴まれ、体を起こされる。

「言っただでしょ？一発ぶん殴るって」

脳震盪を起こしたらしく、視界がぐるぐる回っていた。

「……………普通、このタイミングで殴るか……………
……………？このクソヤロウ……………」

「おんなじの喰らいたくなかったら、さっさと全部喋んなさい。なんであんたが今生きてるのか、なんで正田があんなに勝ち誇ってるのか、あんたが何を考えてるのか。全部！」

「それと、今までのこと、一つ一つ説明してもらいましょうか？」

未来が笑顔で怒っていた。正直、それで一気に頭がはつきりしてきた。

「あ……………最初に……………心配かけたこと、
謝るところか？」

「死んで償って」

「未来？笑顔で言うと、その台詞、だいぶ強烈だけど？」

詩織が僕の耳元で囁いた。どうやら、妹の逆鱗に触れてしまった僕に、救いの手を差しのべる気になったらしい。

「さっさと話し始めた方が良いよ。未来、怒ると怖いから」

そして、僕の手を引っ張って立たせてくれる。“既に怒ってるんだけど”という言葉を読み込み、僕と“Odin”の賭けを説明した。成功と失敗の割合が五分五分だったことも。

「・・・・・・・・・・と、言うわけで、何とか生還したって訳」

僕が話し終わるか終わらないかというタイミングで、未来が冷たく言った。

「じゃあ次。正田が勝ち誇ってる訳」

僕はムツとしたが、詩織が無言で首を振っていて、反論はやめた方がいいと思った。それで、すぐに話し始めることになる。

「・・・・・・・・・・正田は、盤上に残ってる駒を発見したんだ。チエスで言うところの“クイーン”・・・・・・・・・・“大統領”って駒を」

そう、正田は彼と組むつもりなのだ。

僕達を止めるのは簡単だ。地球に帰るシャトルを、途中で落とせばいい。

僕がここまで説明すると、翔が不思議そうに口を挟んだ。

「でもさ、それなら、大統領なんかと組まないで、自分らの軍隊に命令すればいいじゃないか。昔みたいに、ミサイルがないわけじゃないんだからさ」

「・・・・・・・・・・正田が、恐れた人物が3人いる。一人は“ルナドーム設計者”石井 一」

未来と詩織がぴくりと動いた。が、僕は無視した。

「もう一人は、こちらにいる、日向 政史氏」

日向は押し黙っていた。案の定、知っていたらしい。

「そして、もう一人は、三浦 和輝だ。お前の親父だよ、翔。彼が軍を統制している限り、正田が俺達を落とすことは出来ない」

「親父が！？」

「あれだけ正義感の強いお偉いさんも珍しい。間違ったことだと思ったら梃子でも動かない、なんてな」

“Odin”は興味深げな声だった。僕は思わず、ぼそりと呟いた。

「それを息子も受け継いじゃって、めんどくさいったらありやしない」

「哲、なんか言ったか？」

翔は実際聞こえなかったらしい。

「……………なんでもねえ。とにかく、勝ち誇っているのは、俺達に対する手を見つけたからだ。敵国の軍隊に撃墜させるなんていう、無茶な策はあるけどな。で？次なんだっけ？」

「哲が何考えてるか」

「・・・・・・・・・・そいつは、お国に帰ってから心配しようや」

そんなことを説明したら、僕達は地球に帰れなくなってしまう。

僕は部屋の照明を落とし、壁にシャトルの映像を写し出した。

「こんなしかないからさ、生きて帰れるかどうか・・・・・・・・・・」

僕が映し出したのは、緊急時の救命シャトルだった。本来なら、別のシャトルが救出に来るまで宇宙空間を漂っているためだけのものだが、スペック上では一応、大気圏の突入も可能ということになっている。

「ゲゲッ！そんなんで帰れんの？」

「うるさいなあ、他にないんだよ！」

皆が心配そうな顔でシャトルの写真を見上げている。

“ あらら．．．．．ま、信用しろとはいえないし．．．．．
．．．．．”

ふと“Odin”を見ると、彼はいつものように笑った。本当に楽しそうに。彼の目はこう言っていた。

“ 大丈夫だよ、相棒。今まで俺らは勝ってきただろ？”

だからこそ、心配なんだろうが。人間勝ち続けるのは不可能だ。

僕達の“賭け”は終わってくれない。

ところで、その頃、大統領はシエルターの中にいた。

第六十六話

“完了”

大統領は狂っているのかもしれない。

そんな噂が、彼の側近や軍司令官の間でまことしやかに囁かれていた。

彼がある夜を境に、変わったのは事実だ。

とはいえ、国民から見分けるほど変わった、というわけではない。

彼のごく近くにいる人間が、微かに感じる程度の変化だった。

目が、変わったのだ。

温度がなくなつたと人は言う。

その数日後、大統領は正田と計画を練り始めた。

“ラグナロク”を迎えるための、破壊のシナリオを。

そして今、彼は全てを遮断するシェルターの中の暗闇で一人、“黄昏”を待っていた。

正田でさえ、自分の妻子をシェルターの中で保護したのに、彼は一人だった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・おかしい。こんなにも、静かなものなのか？」

彼は通信を完全に切っていたので、何も知らなかった。彼は正田と違って、失敗したときのことなど考えていなかったのだ。

彼は頑なに信じていた。

“人類は滅びるべきだ”と。

そう、彼は神託を受けたのだ。その日を境に、彼の思いはそれにしか向いていなかった。

人の生み出す闇、醜さ。

戦に明け暮れる者たち、欲におぼれる者たち、自分が世界一不幸だ

と信じている者たち、それに、他者の足を引っ張ることで満足を得る者たち。

今、この瞬間にも、人は死んだり、苦しんだりしている。

しかも、ほとんどは人が招いた災厄によって。

「・・・・・・・・・・・・・・・・人は、滅ぶべきなのだ・・・・・・・・・・・・・・・・」

“そうかもな”

突然、彼の目の前にあるモニターの電源が入る。

「何だ！？この部屋は・・・・・・・・・・・・・・・・」

“完全に遮断されてる。まあ、確かに。軍の連中もあんたの居場所、必死で探してるみたいだぜ？”

大統領はモニターの眩しさに目を細めた。そこには、東洋人の少年がにこやかな表情をして映っていた。

「お前は・・・・・・・・・・？」

“俺は石井 哲。・・・・・・・・・・” “L o k i” って言った方が分かりやすいですか？”

大統領は息を呑んだ。最大の敵と思っていた奴が、こんな少年だとは思っていなかったのだ。

“どうやら知らないようだから教えておきましょう。あなたと正田の計画は失敗した”

「・・・・・・・・・・失敗、だと？」

彼は“そんなことはありえない” と思っていた。“自分は神に命じられたことをしたのだから” と。

しかし、哲は冷たく言った。

“失敗です。残念ですが、あなたは“神の言葉” とやらを勘違いした”

「勘違い・・・・・・・・・・！？どう勘違いしたと言っのかね！？」「人類を滅ぼせ」というこのみ言葉を！！」

哲が“神託”のことを知っているのはなぜか、などということは彼にはどうでもよかった。

ただ、哲の冒涇と、中傷が許せなかったのだ。

「人は滅びるべきなのだ！！君自身、さっき同意したではないか！！！」

哲は静かに言った。

“そうです。人は滅ぶべきだ。それでも・・・・・・・・・・”

静かな声とは反対に、表情は特に目は、ものすごい力を帯びた。

“世界は滅ぼすべきではなかった。あなたのミスは、“核”で全てを焼き尽くそうとしたことだ”

「？何を言っているんだね？人類を滅ぼすべきでも、世界は滅ぶべきではない、と？」

“あなたもやはり、人間中心の考え方をなさりますね。人と世界はイコールで結ばれませんよ”

大統領は目を閉じ、頭を振った。

「すると、君は死すべきは人間だけと言うのかね？」

“そうです。地球上に生きる数多の生物、植物を滅ぼす理由はありません”

「馬鹿な男だ！そんなことが可能だと思っているのかね！？」

大統領は激しい口調で言った。

「人も生物だ！動物達と同じように生きている！その生物を滅ぼすほどの力が加われれば、他の生物にも影響が及ぶのは必然！お子様の理想は通用しないのだ！！」

“それが可能かどうか、今からやってみるん

ですよ”

少年は歪んだ笑みを浮かべていた。大統領は寒気を覚える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・どういうことだ・・・・・・・・・・・・・・・・？」

答えはなく、画面は消える。

「・・・・・・・・・・・・・・・・？」

画面にパーツと数字が並んでいき、スピーカーから不思議な音が聞こえてくる、

大統領は訝しげに画面に見入っていた。

・・・・・・・・・・パシュン

画面に“完了”の文字が表示されたとき、大統領の表情は消えていた。

彼の心臓は鼓動を続け、彼の肺は空気を吸い込んだり吐き出したりしていた。

血液は体中をめぐり、酸素を細胞に供給していた。

だがしかし、彼は死んでいた。

彼の脳は とくにものを考える部分は 完全に機能を停止していた。

彼はもう、感じることも、考えることもしない。

10秒後、“完了”の文字も消え、シエルターの中は完全な闇にと
らわれた。

第六十七話

答えは、“Yes”だ

僕はコンピュータを置いたまま、シャトルの操縦室に戻った。そこでは、翔、隼、“Odin”がシャトルの軌道を計算していた。

「計算、終わったか？」

「ああ。もう、15分ぐらいで出発だ。長いトイレだったな」

「まあ、ね」

僕はドカリと腰を下ろし、シートベルトを締めた。

「翔と隼、皆んとこ行っていいぞ。俺と“Odin”で十分だ」

翔は何の疑いも抱かなかったが、隼は僕をじろりと睨んだ。

「哲・・・・・・・・・・」

「分かったよ！勝手にしろい」

翔はそんな隼を見て、途端に不思議に思ったらしく、立ち上がった姿勢のまま止まってしまった。こいつだけは、なんとしてもここから離れさせなければならなかった。

「こいつ、俺の操縦の腕が信用できないんだと！まさか、翔までそんなことほざくつもりじゃねえよな？？」

僕がふざけたように言うと、翔は笑った。

「何だ、隼、そんな心配してんのか？？馬鹿馬鹿しい！俺はみんなとこで居眠りでもしながら到着を待つよ」

彼が出て行った後、“Odin”が呟いた。

「操縦の腕？？こいつは機械で飛んでんだっつーの！」

「うるせえ！……………皆、ベルトは締めたか？？」

部屋との通信を取ると、皆が口々に同意した。

「よし、じゃ、大船に乗った気分で待っていてくださいな」

と、皆がなぜか曖昧な声を出した。

「おい、何だよそりゃ!？」

「哲、あと20秒」

“Odin”は冷静に言った。すると、未来らしき声がこついった。

「あ、“Odin”ってか洋介君は信じてるから!」

僕は通信を切った。

「あ、ひでーな。今俺がお礼言おうとしてたのに」

「カウント!」

「はいはい。10秒前」

テンカウントの後、シャトルは発射された。

同時に、僕は正田との通信を開始する。

「どうも。今、シャトルが発射しました」

“愚かだな。君は死に向かって飛んでいる”

「お知らせしようと思ひまして。大統領は、死にましたよ」

“・・・・・・・・何・・・・・・・・！！？”

「正確には死んでないですが、もう、考えることも、感じることもないでしょう。それは死に他なりません」

“・・・・・・・・”

「まさか！？」

“Odin” が大きな声を上げた。

「うるさいぞ。今は正田さんとしやべってんだ」

「あれを使っただのか！？あれを！？」

「あれ・・・・・・・・・・？」

隼は怪訝な顔をしたが、僕に構う気はなく、“Odin”にそんな余裕はなかった。

「おい！！そうなのか！？」

「ただの実験だよ」

何故だか分からない。ただ、“Odin”はたじろいだ。目を見開き、顔を恐怖に染めて。僕は怪訝に思ったが、口を開く前に、彼は目をそらした。僕は出ばなをくじかれ、何もいえなくなってしまうた。

沈黙の後、結局、僕は正田に向き直った。

「さて、正田さん。一つだけ、教えてください。何故、あなたは大統領を助けたんですか？」

正田はため息をつく、僕の顔を睨み返してきた。

“決まっているだろう……人類を滅ぼすためだ”

「ええ。ですから、その理由をお伺いしてるんです」

“……大統領と話したか？”

「はい」

“なら聞いたはずだ。人は醜い。汚い。生きる価値がない。だから滅ぶべきだ。理由として十分だと思わないか？”

「そんなはずはない！！」

叫んだのは隼だった。

「あなたは、一部の人間の、一部の部分を、人間全体であるかのよ
うに言ってるだけだ！」

“だとしても、真実だ。誰かの一部であるなら、全ての人がそれを

持っているのだから”

「そんな馬鹿な！皆が同じ可能性を持っているだけで、同じものを持っているわけじゃない！！」

二人は激しく論じ合っていた。僕は妙に静かな気持ちでそれを眺めていた。

どんな議論も僕には、もう関係ない。

答えなんて、とっくに決まっているのだから。

そう、僕が“L o k i”を名乗った、その時から、揺るがないものがある。

人は滅ぶべきか、否か。

答えは、
“ Y e s ”
だ。

第六十八話

俺は“L o k i”だぜ？

「俺は・・・・・・・・・・仲間を殺されるのが気に食わなかっただけだ」

僕がそう呟くと、議論していた二人がぴたりと口をつぐんだ。

コンピューターが稼働しているときの、独特の音が聞こえてくる。

「だから、あんたらを止めた」

そう、僕のもっとも大きな理由は、それだった。神に誓ってもいい。僕は、仲間を護りたかったのだ。

が、視界の隅で、“O d i n”は右手を持ち上げたのが見えた。そして銃声が響く。あろうことか彼は、正田が映ってる画面を撃ち抜いたのだ。当然、通信は切れ、システムはダウンする。明かりさえもなくなった。

「おま・・・・・・・・・・！！馬鹿野郎！マジで死ぬぞ！？」

隼が慌ててシステムを立て直そうとしていたが、“O d i n”はそ

れを無視した。暗闇の中、彼の脅すような声が聞こえてくる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・“L o k i”、芝居はやめようぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・何の話だ？“O d i n”」

その時、隼が再起動を成功させ、明かりがとる。彼は拳銃の狙いを僕のこめかみに定めていた。

「分かってんだろ？お前の下手な芝居をやめろって言ってるだよ」

「芝居なんざうつちやいねえぞ。そして、嘘もついてねえ。俺はお前や“T o u r”　　そうだよ、お前だよ、隼　　。姉貴や、未来を死なせたくなかった」

“O d i n”の腕は微動だにしなかった。彼は冷たく言った。

「それと同時に、人が滅びるべきだと考えていたってのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだ」

隼が哑然として僕を見た。

「何・・・・・・・・・・・・・・・・？？哲、お前・・・・・・・・・・・・・・・・！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・悪いな。俺はそう思ってる」

僕は“Odin”を睨み返した。

「知ってるだろ？ “Look i” が、世界を滅ぼすんだ」

「まさかテメエ・・・・・・・・・・・・・・・・」

「そう、最初っからそのつもりだ。俺が世界を“黄昏”に導くってね」

引き金にかかっていた“Odin”の指に力が入る。ぼんやりと、
“ああ、これでジ・エンドか”と思った。“情けねー終わり方だな”と。ところが驚くべきことに、彼は銃をおろした。憎々しげな表情さえ、消えてしまっていた。

「・・・・・・・・・・どうした？」

「・・・・・・・・・・“L o k i” 。俺達の武器はピストルこんなものじゃない」

僕はにやりと笑った。相棒の言いたいことが、手に取るように分かった。

「おいおい、俺は“L o k i” だぜ？お前、それを承知で、銃それ使わないで、俺と勝負するつもりか？？」

「忘れるな。俺は“O d i n” だ」

“O d i n” は拳銃をくるっと回し、腰だめでぶっ放した。

「ゲ！？」

鼻の頭に、何か熱いものが通った。遅れて火薬のにおいが漂ってくる。鼻と鼓膜がジンジンしていた。

「テメエ・・・・・・・・・・ホントに撃ちやがったな・・・・・・・・・・」

「ほら、お前なんかいつでも殺れる。“L o k i”、もう、やめとけ。お前がいくら意気込んだところで、所詮、一人の人間に過ぎない。全人類を敵に回して、勝てるとも思っているのか？」

僕は肩をすくめた。

「俺は俺の正義に従っただけさ」

僕はふらりと立ち上がり、操縦室から出て行った。

二人とも、追っては来なかった。

ただ、“O d i n”の舌打ちだけが、扉をくぐり、僕に追いついた。

ふと窓をのぞくと、美しい地球^{ほし}が、無限の闇の中に浮かんでいた。

無意味なのかもしれない。最後の最後で立ちただかるが、僕の護り

たかったものかもしれない。

ただ、僕は凌ぎ切った。

とりあえず、護り切れたのだ。

それで満足することにしよう。

最終話

まさにその通りなのである

それから、世界をニユースが駆け巡る。

“日米が互いに宣戦布告。再び世界大戦か？”

混乱が、恐怖が、世界に満ちる。この戦争は間違いなく、核を使った戦争に、人を滅ぼす戦いになるからだ。しかし、次に世界に降りかかったのは、核ミサイルではなく、とんでもないニユースだった。

“日米両首脳が行方不明”

笑い話である。戦争を始めた二人が、消えてしまったのだ。正田も大統領も、忽然と消えた。もともと戦争に乗り気ではなかった両軍は停戦に合意。人々も呆れるしかなかった。その5日後。

“臨時首相に日向氏が就任。米との講和へ”

月から奇跡の生還を果たした日向は、その日のうちに国会に戻り、アメリカとの和解を果たした。何がなんだか分からないうちに始まり、終わったのだ。

そして、世界は落ち着きを取り戻す。大統領も正田も、ついに発見されなかった。彼らが見つけ出されるのは、ずっと先の未来だ。ただ、それは別の物語だ。

ところで、月からの帰還を“奇跡”といえるのには理由がある。

“人類初めての試み、月面移住計画失敗”

“戦争”の混乱の中、ルナ・ドームからの通信が途絶える。終戦の後すぐ、日向は調査隊を送り、そこにいた人員の安否を確かめようとした。だが、彼らが発見したのは、大きなクレーターと、残った放射能だけだった。全ては無に帰したのだ。そこにいたとされる兵士350名は、名誉の殉職とされたが、もちろん、その亡骸は一つも発見されなかった。

その後すぐ、調査委員会が設立されたものの、現場が月ということもあり、捜査は難航した。月から帰還した元・住民達の証言も、大して意味はなかった。彼らはドームが爆破されたことすら知らなかった。ただ“軍の”命令どおりにシャトルに乗り込み、ルナ・ドームを離れただけだったのだ。

そんな中、爆破の寸前まで月にいた上、救命用シャトルに乗って大気圏に突入、太平洋に軟着陸し、生還した一団がいた。その“第二ド・サティーン”の“13号”と呼ばれた奇跡のメンバーの中に、日向もいたのだ。彼らもまた、真相を知らなかった。それは事実だ。しかし、勘付いていなかったという、それは嘘になる。誰一人、それを口にしなかったただだ。

それらのニュースは、世界を駆け巡ったが、真相を伝えることは、とうとうなかった。

いや、一人、もっと言えば二人、本当に真相を知っていたものがある。

石井哲は、モニター越しに羽下兼に話しかけていた。

「どうして正田を殺した？そんな話は聞いてないぞ」

兼は頭をぼりぼりかいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・復讐だよ。昔の“相棒”^{タチ}のな」

哲は不満そうにしながらも、それ以上は追及しなかった。兼はその顔をにらみつけた。

「お前こそ、何故全てを吹き飛ばした？あれはお前が一番嫌いな手じゃなかったのか？」

哲はにやりと笑った。

「復讐だよ」

それから兼も哲も、黙りこくってしまった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・それで？」

長い沈黙の後、兼が問いかけた。

「世界を滅ぼすんだって？」

「違う」

哲はうめいた。

「地球を還すんだ。人間以外の何かに」

「そうか」

兼は興味がないようだった。それは当然のことである。哲と違って、彼には、護るべきものなどない。そんな彼にとっては、世界が滅びるかどうかなど、どうでもいい話なのだ。

一連の騒動が過ぎ去ってから数カ月後。とある新聞の三面に、ある研究データが掲載された。それは地球上の生命があと8年で滅びるという結論に至る、衝撃的な記事だった。

あらゆる角度から、あらゆるデータを取り、考えに考え抜かれたその予測は、確かに起こりえるもの、いや、明らかに実現してしまうものだった。

ところで、その日の数多くの新聞の一面は、人気女性歌手が、別の人気グループの男性メンバーと結婚したというゴシップを伝える記事だった。その中で、そのことについて質問された関係者はこう答えていた。

“あの二人が十年持てば奇跡だ”

くだらない記事ではあった。しかし、まさにその通りなのである。

完

後書き（前書き）

後書き、というより、自分の反省です。

あまり意味はありませんが、言い訳をしたくなるような文章なので、とりあえず載せました。

暇な方はどうぞお読みください。

後書き

さあ、月ゝルナ・ドームゝ、ようやく完結です。

正直、最後の方、完全にやる気を失っていました。 f (^ | ^ ;

理由はいくつかあります。

一つは、登場人物を多くしすぎたこと。

今、読み返して全員の名前を書き出す気力もありません。笑
そのせいで、それぞれの登場人物のいる意味がほとんど失われてしまいました。

二つ目は、ストーリーをまとめられなかったこと。

と、言うのも、書き始めた当初はただ単に、“月、という隔離された場所で、政府が国民を減らす、つまり虐殺していく計画”を“巻き込まれた普通の少年少女”が止めるために戦う、というだけのものでした。

終盤の“詩織”の存在や“筒井”と“羽下”のくだり、果ては“Loki”、“Odin”でさえ、存在しておらず、執筆した時の思いつきで書いてしまったものです。そのせいで焦点がぶれ、非常に読みづらいものになってしまいました。

そして三つ目。それぞれの登場人物像が非常に曖昧になってしまったことです。

結局、哲が何を考えていたのか、正田は何がしたかったのか、洋介は・・・・・・・・隼は・・・・・・・・。。
あげていくときりがありません。

最終的にこのような、目隠しをしたままふらふら歩いていったような小説になり、まこと残念に思うと同時に、自分の力不足を痛感させられています。しかし、こうして、無理矢理にでも完結させたおかげで、目隠しを外せたと思います。

目を見開き、まっすぐに歩いて出来た作品が、いつか皆様の目に留まることを願っています。

最後になりましたが、完結までお付き合いいただけたこと、本当に、ありがとうございます。

田中 遼

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4483d/>

月　～ルナ・ドーム～

2010年10月8日12時08分発行